注連引原II遺跡

―― すみれヶ丘公園造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

1988

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

注連引原II遺跡

―― すみれヶ丘公園造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

1988

群馬県安中市教育委員会
群馬県安中市建設部

注連引原II遺跡全景

注連引原II遺跡出土の弥生 土器

序

安中市は浅間山、妙義山の麓、碓氷川に沿って広がる田園都市です。碓氷川の南に広がる肥沃な台地は、万葉の昔から人々に「すみれの里」と呼ばれ親しまれてきました。このたび、この東横野地区に市民憩いの場として、「すみれケ丘公園」を建設することになりました。しかし、今回の公園建設予定地は、注連引原遺跡に隣接していて、遺跡の範囲に含まれることが予想されましたので、発掘調査をいたしました。

調査を進めてゆくうちに、注連引原II遺跡が学術的に非常に重要な遺跡であることが判明いたしました。東日本最古の弥生時代環濠集落であり、稲作文化の伝播の過程を解明するために、非常に重要な遺跡であることがわかりました。安中市教育委員会としても、前例のない遺跡であり、今後の措置についての判断を仰ぐため、文化庁係官を招へいし、現地で指導していただきました。また、安中市、安中市教育委員会としても、後世にこの遺跡を残すことについて、関係各部署で協議し、工法を変更して遺跡の主要部分は盛土して現状保存してゆくことにしました。

調査により解明された遺跡の内容については、本書の中で詳しく述べていますが、住居、土壙群、環濠といった集落の主要部分が検出されているので、二千年前の弥生時代のムラの様子がはっきりわかります。

こうした意味で、本遺跡から出土した土器や石器は郷土の歴史を学習するには恰好の資料ですので、社会教育、学校教育の生きた教材として、有効に活用を計ってゆきたいと思います。また、この遺跡の貴重な資料を後世へ伝えてゆくことが、私たちの責務と思うところです。

最後にあたりまして、暑さ厳しい夏のさ中から木枯しの吹く秋の終りまで、発掘調査に従事していただいた作業員の方々、本書作成に至るまでの遺物整理作業に携わった作業員の方々の労をねぎらいたいと思います。また、調査に御協力いただいた多くの皆様にはこの場を借りて厚くお礼申し上げたいと存じます。

昭和63年3月

安中市教育委員会

教育長　多胡純策

例　　言

1、本書は安中市が実施した「すみれケ丘公園」造成事業に伴う、注連引原（しめひきはら）II遺跡（略称G－3）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2、発掘調査は安中市教育委員会が実施した。なお、試掘調査については、昭和61年度文化財保存事業国庫補助金、県費補助金を受けて実施した。

3、調査および遺物整理の期間は昭和61年8月7日から昭和63年3月31日までであった。

4、調査は安中市教育委員会社会教育課大工原豊が担当し、松本豊、千田茂雄（調査員）がこれを補佐した。

5、本書の作成は、編集、執筆は主として大工原が行ったが、VI－4－(2)を千田、VI－5－(2)、VII－1を若狭徹氏（群馬町教育委員会）が執筆し、集落推定復元図は須藤美智子氏（群馬県立歴史博物館）の筆によるものである。

6、若狭氏には本書の作成にあたり、終始協力していただいたほか、本文の執筆にも参加していただいた。

7、黒曜石の産地推定は金山喜昭氏（野田市郷土博物館）らの研究グループにお願いした。

8、遺構の写真撮影は大工原が行い、遺物写真は大工原、千田が撮影した。

9、本遺跡の記録及び出土遺物は安中市教育委員会で保管している。

10、調査組織

安中市建設部		安中市教育委員会事務局			
建設部長	星野照夫	社会教育課長	茂木勝文	主事	田中秀雄
都市施設課長	大河原識	社会教育係長	反町良一	主事	大工原豊(担当)
事業係長	小嶋六郎	主任（社教主事）	森泉寿義雄	調査員	千田茂雄
主任技師	矢島清志	主任	松本　豊		
		主任	萩原　昭（昭和62年3月転出）		

11、調査の期間中次の方々に御指導、御協力いただいた。厚くお礼申し上げます。（敬称略・50音順）

相京建史、麻生敏隆、荒巻　実、飯島義雄、石岡憲雄、石川日出志、井上　太、梅沢重昭、及川良彦、岡本東三、加部二生、菊地誠一、車崎正彦、工楽善通、小島敦子、小林達雄、小安和順、酒井清治、佐原　眞、坂爪久純、設楽博己、清水信行、志村　哲、須藤　隆、関　俊彦、田村晃一、外山和夫、能登　健、橋口尚武、橋本博文、平野進一、古郡正志、古山　学、洞口

正史、松村和男、前原　豊、水沢祝彦、森田秀策、吉田章一郎、大成測量

12、発掘調査及び遺物整理参加者は次のとおりである。記してその労をねぎらいたい。

新井進子、蘭悦治、飯塚隆行、井田国治、井上民衛、岩坂尚子、岩永恵美子、内田純子、岡田早百合、岡田和子、小川正子、大島良平、金井武司、北村やい、小坂橋帯刀、小島タミエ、小林八重子、後閑修一、斎藤説成、斎藤三枝、佐藤英子、佐藤千津子、佐藤令江、島田信昭、清水たみ子、下マス江、神宮幸四郎、須藤　功、高木公太郎、多胡いちよ、多胡いの、多胡　静、多胡トシ、多胡信子、多胡政子、多胡　操、多胡好夫、田島かつ子、田島元治、田中重一、田中利策、富田一仁、内藤喜利、長岡政江、中川京子、萩原喜美代、花岡千里、治田あやの、本多くり江、真下盛吉、松本恭子、松本文作、水江ハル、茂木もり、矢野せつ、矢野ますみ、山田はまの、大和房子、横山晴恵、吉沢秀子、吉沢満紀

凡　　例

1、遺構の縮尺は次のとおりである。

住居址、土壙（D－1を除く）、土橋、濠断面図　1/60

D－1号土壙　1/30

濠、山頂部　1/120

2、遺物は縮尺は次のとおりである。

縄文土器実測図・拓本、弥生土器実測図・拓本　1/3

弥生土器実測図　1/4

旧石器時代石器、A類石器、垂飾　2/3

スクレイパーB類、石核B類、磨製石斧、独鈷石　1/3

その他の石器　1/4

埦・刀子　　1/3

横瓶　　1/6

3、Y－1号住居址のスクリントーンは炉址を示している。その他のスクリントーンは図中で示している。

目　　次

本文目次

序
例　　言
凡　　例
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　調 査 の 経 過 …… 1
Ⅲ　調 査 の 方 法 …… 2
Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境 … 3
Ⅴ　層　　序 …… 7
Ⅵ　遺 構 と 遺 物 …… 8
1　注連引原遺跡の概要…… 8
2　注連引原Ⅱ遺跡の概要…… 9
3　旧石器時代の遺物…… 9
4　縄文時代の遺構と遺物……10
(1)　遺構と遺物分布状態……10
(2)　土　器……10
5　弥生時代の遺構と遺物……14
(1)　遺　構……14
(2)　土　器……22
6　縄文時代・弥生時代の石器 ……32
(1)　石器群の分析方法……32
(2)　石器の分布状態……32
(3)　石　器……36
7　平安時代の遺構と遺物……46
(1)　遺　構……46
(2)　遺　物……47
Ⅶ　成果と問題点 ……49
1　注連引原遺跡・同Ⅱ遺跡出土の
弥生土器について……49
2　弥生時代の石器群について ……55
3　集落の構造について……~~61~~ 59

挿図目次

第１図　注連引原Ⅱ遺跡位置図(1)…… 4
第２図　注連引原Ⅱ遺跡位置図(2)…… 5
第３図　注連引原Ⅱ遺跡周辺の地形…… 6
第４図　基本層序柱状図…… 8
第５図　注連引原Ⅱ遺跡全体図……㊗
第６図　旧石器時代遺物…… 9
第７図　縄文土器分布図……㊗
第８図　縄文土器(1)……12
第９図　縄文土器(2)……13
第10図　Ｙ－１号住居址実測図……15
第11図　土壙実測図(1)……16
第12図　土壙実測図(2)……17
第13図　Ｍ－１号濠実測図……㊗
第14図　土橋・門址実測図……20
第15図　山頂部実測図……21
第16図　弥生土器分布図……㊗
第17図　Ｙ－１号住居址出土の弥生土器…24
第18図　Ｙ－１号住居址(2)、遺物集中部出土の弥生土器……26
第19図　土壙出土の弥生土器(1)……27
第20図　土壙出土の弥生土器(2)……28
第21図　土壙群周辺出土の弥生土器……30
第22図　Ｍ－１号濠、山頂部、グリッド等出土の弥生土器……31
第23図　石器組成図……33
第24図　石器分布図……㊗
第25図　石材Ａ類Ｂ類分布図……㊗
第26図　石材Ｃ類Ｄ類Ｅ類分布図……㊗
第27図　石材Ａ類Ｂ類石器分布図……㊗
第28図　石材Ｃ類Ｄ類Ｅ類石器分布図……㊗
第29図　石器実測図(1)……35
第30図　石器実測図(2)……38
第31図　石器実測図(3)……39
第32図　石器実測図(4)……40
第33図　石器実測図(5)……42
第34図　石器実測図(6)……43
第35図　石器実測図(7)……45
第36図　石器実測図(8)……46
第37図　奈良、平安時代の遺物分布図……㊗
第38図　平安時代の遺物……48
第39図　甕の変化……52
第40図　注連引原遺跡検出の浮線文モチーフを残す例……52
第41図　遺跡内におけるＢ類石器剥片剥離作業工程……57
第42図　集落の構造変遷図……60
第43図　注連引原Ⅱ遺跡集落推定復元図…63

表　目　次

第１表　土壙遺物出土状況一覧表……14
第２表　石器分類表……32
第３表　平安時代遺物観察表……47
第４表　文様諸要素出現頻度表……50

図版目次

口　　絵　注連引原Ⅱ遺跡全景
注連引原Ⅱ遺跡出土の弥生土器
図版―1　注連引原Ⅱ遺跡全景　土層断面
図版―2　遺跡遠景、山頂部より南方を望む、山頂部より北西を望む　Y―1号住居址とその周辺の土壙
図版―3　Y―1号住居址、遺物出土状況、精査風景
図版―4　石鏃出土状況、1号遺物集中部、D―1号土壙遺物出土状況、D―1号土壙
図版―5　土壙B群、土壙B群・C群、D―12号土壙遺物出土状況、M―1号濠
図版―6　M―1号濠、遺物出土状況、土橋・門址
図版―7　M―1号濠土橋、土層断面、土塁状遺構土層断面
図版―8　山頂部配石遺構・ピット群、東斜面部遺物出土状況、東斜面部横瓶集中部、刀子出土状況、測量風景、現地説明会風景
図版―9　Y―1号住居址出土の土器
図版―10　Y―1号住居址出土の土器、1号遺物集中部、2号遺物集中部出土の土器、D―1号土壙出土の壺
図版―11　D―1号土壙出土の甕、土壙出土の土器、土壙群周辺出土の土器
図版―12　M―1号濠出土の土器、山頂部出土の土器、グリッド出土の土器、槍先形尖頭器、石鏃、石槍、有肩石斧、円盤状石器
図版―13　スクレイパーA類、リタッチド・フレイクA類、石核A類、石鏃（Ⅰ～Ⅳ形態）
図版―14　石鏃、打製石斧（石鏃）刃部再生剝片、石鏃刃部使用痕、打製石斧（石鏃）刃部再生剝片磨耗痕、打製石斧、スクレイパーB類
図版―15　石匙・スクレイパーB類・リタッチド・フレイクB類、石核B類、凹石、磨石、砥石・敲石
図版―16　台石、石皿、垂飾、独鈷石、磨製石斧、埦（墨書）、横瓶、刀子

I　調査に至る経過

安中市では市民の憩いの場として、東横野地区に都市公園「すみれヶ兵公園」を建設することになった。この公園は注連引原遺跡（現すみれヶ丘聖苑）の東に隣接して建設される予定であり、遺跡の一部が公園建設予定地内まで及んでいる可能性があることから、試掘調査を実施し、遺跡の範囲を確認することになった。

そして、試掘調査を実施したところ、当初予想されていた場所よりも東の地点に遺跡が存在することが明らかとなった。そこで、市建設部都市施設課と市教育委員会で協議を行い、地面の切り盛りと遺跡の範囲を勘案して、現状保存の可否について検討した。しかし、切り土を行う必要のある部分が多く、工法的にも遺跡全体を現状保存することは困難であることから、切り土を行う必要のある部分を中心として本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになった。

II　調 査 の 経 過

注連引原II遺跡の試掘調査は昭和61年８月７日から10月９日までの間実施した。試掘調査は公園建設予定地の南半分を対象としてトレンチ調査を行った。その結果、調査対象区域の中央から東の部分にかけて遺構が存在することが明らかとなった。そこで、遺跡の性格、内容を把握するために精査を行ったところ、縄文時代前期～後期、弥生時代前期～中期、平安時代の遺物が分布し、弥生時代の遺構が存在することが確認された。

そして、本調査は９月22日から11月30日までの間実施した。本調査は試掘調査の結果、遺構、遺物が存在することが明らかとなった部分について、調査区を設定して調査を行った。本調査は弥生時代の遺構、遺物の分布する範囲を面的に調査して、当該期の集落の様子を明らかにすることを主眼として実施することにした。

その結果、本遺跡は弥生時代前期～中期の濠を有する集落であり、学術的にも非常に重要な遺跡であることが判明した。そこで、県文化財保護課に報告を行い、文化庁の指導を仰ぐことになった。そして、11月12日に文化庁文化財保護部記念物課岡本東三氏を招へいし、現地で指導を受けるに至った。文化庁としては、これまで通り市教育委員会で充分な調査を行い、記録保存の措置を講じてゆくことが望ましいという見解であった。そこで、市教育委員会では調査を継続し、記録保存の措置を講ずる一方、市都市施設課等市関係部局と再三にわたって協議を行い、遺跡の現

状保存の可能性についても検討してゆくことになった。

発掘調査が進行してゆくにつれて、弥生時代の集落の主要部分が徐々に明らかとなっていったが、見学者が連日来訪し、調査の進行状況に支障を生じるようになった。そこで、現地説明会を実施することにして、それまで調査に専念できるようにした。そして、現地説明会は11月29日・30日に実施した。また、調査も11月30日をもって終了した。

発掘調査終了後も引き続き現状保存の可能性について検討した。その結果、事業計画を一部変更し、住居址、濠等集落の主要部分については山砂で盛土し、保存してゆくことになった。盛土作業は造成工事に伴い、昭和62年２月から３月の間に実施した。

また、遺物整理は昭和61年11月に一部行い、昭和62年７月11日から昭和63年３月31日までの間に断続的に行った。

III　調 査 の 方 法

試掘調査は調査区の中央にある丘陵の尾根線の方向（N—37°—W）を基準線とし、これに直交する方向に12m毎に幅２mのトレンチを５本設定し、南から１、２、３…と呼称することにした。まず、各トレンチをバックホーでIV層（褐色土層）上面から中位まで掘削し、その後人力で遺構、遺物の確認作業を実施した。遺構の性格がはっきりしない部分については、トレンチを拡張して調査を行った。確認された遺構については、遺跡の性格を把握するため、若干の精査を実施した。そして、確認された遺構は測量基準杭を設置し、平板測量により測量を行った。また、随時写真撮影を行った。

本調査では試掘調査の結果をもとに、弥生時代の集落構造を解明することに主眼を置いて調査を実施した。グリッドは試掘調査同様、丘陵の尾根線の方向を基線として、調査対象区域全体に設定した。１グリッドは４m×４mで、北西隅を基点とし、北から南へA、B、C……とアルファベットの大文字で呼び、西から東へ数字で１、２、３……と呼称することにした。また、グリッドをさらに四分した２m×２mの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でａ、ｂ、ｃ、ｄと呼称することにした。

本調査は22ラインから48ラインまでの区域を対象とし、遺物が検出されなくなるまで拡張することにした。また、調査区を39ラインで二分し、東をＡ区、西をＢ区として、Ａ区から調査を実施した。調査はまずバックホーにより表土を掘削した。掘削は山頂部はＶ層上面、東斜面部はIIb層上面、東裾部はIII層上面まで行い、その後、人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。また、確認された遺構は順次精査を行った。そして、検出された遺構、遺物については測量基準杭

を設置し、平板測量により測量を実施した。土層断面図、微細図は必要に応じて作成し、遺物分布図は原則として遺構及び、遺物が密集している部分について作成した。また、遺物の取上げは土壙、ピットについては遺構毎に行い、遺物の散漫な部分と平安時代の遺物集中箇所については細グリッドで層位毎に取り上げた。また、必要に応じて、遺構、遺物の写真撮影を行った。

Ⅳ　遺跡の地理的・歴史的環境

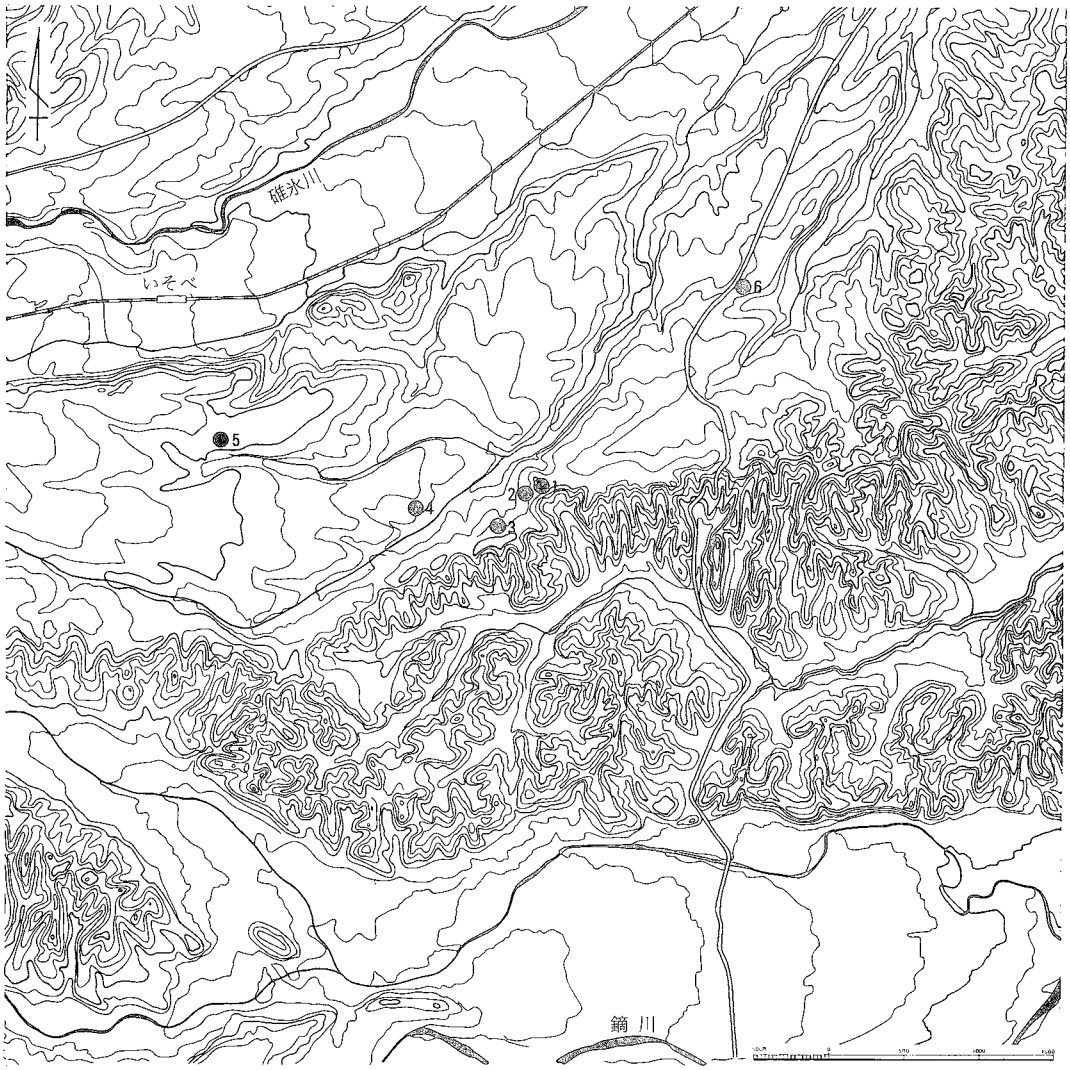
注連引原Ⅱ遺跡は群馬県安中市中野谷字注連引原3638番地、鷺宮字大林西3823、3825－1番地に所在する。本遺跡のある安中市は群馬県西部（西毛）に位置し、関東と信濃方面を結ぶ交通の要路にあたる。古代には東山道、近世には中山道と主要交通路が通り、常に文化の中継地となって今日に至っている。

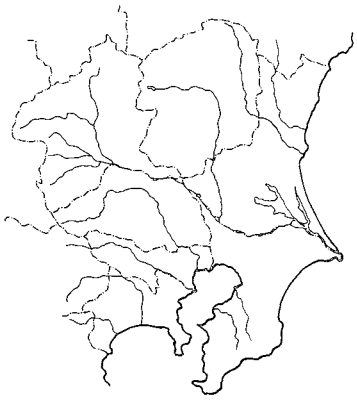
長野県との境、碓氷峠付近は関東山地の西北縁にあたり、この付近に源を発する碓氷川が市域を東流する。また、群馬県西南部の長野県境付近を源とする鏑川が、安中市の南に隣接する富岡市を東流する。この両河川は群馬県西部を並行して東へ流れ、利根川へ注いでいる。注連引原遺跡は安中市の最南端にあたり、富岡市との境界線上にあたる。ちょうど、碓氷、鏑両河川に挟まれた碓氷川上位段丘最南端の丘陵上に本遺跡は存在する。この位置は両河川の分水嶺にあたり、東西に細長く丘陵が延びている（第1図、第2図）。

本遺跡の周辺地形をみると、遺跡のすぐ北側を碓氷川の支流猫沢川が東流し、その北に広がるなだらかな台地から隔絶されている。一方南側は鏑川の支流星川によって浸食され、複雑に入り組んだ険しい峡谷を形成している。本遺跡からは四周を眺望することができ、南には富岡市黒岩の集落が眼下に見える。谷底との比高差は約70mを計る。また、猫沢川との比高差も約30mである。さらに微地形をみると、本遺跡の中心には標高約250mの小高い丘陵があり、この丘陵を囲むように遺跡は展開している。遺跡の西端及び東端には南北から谷が入り込み、細くくびれている。つまり、南北は大きな谷で隔絶され、東西はくびれた独立丘陵的な景観を呈する（第3図）。

注連引原Ⅱ遺跡はこの丘陵の山頂部を中心として、西斜面部、東斜面部、東裾部にかけて展開している。また、**注連引原遺跡**（1987　安中市教育委員会）はすぐ西に隣接し、西裾部にあたる位置に所在する。

本遺跡の周辺遺跡について概観すると、周辺の中野谷、鷺宮、上間仁田地区は縄文時代から平安時代にかけての遺跡が濃密に分布しており、本遺跡周辺の台地上にも多くの遺跡が存在する。このうち、注連引原Ⅱ遺跡に時期的に近い遺跡としては、弥生時代中期前半期の**下原遺跡**（3）、**中原遺跡**（4）が付近に存在する。また、縄文時代晩期前半期の**天神原遺跡**（5）は西方約2km

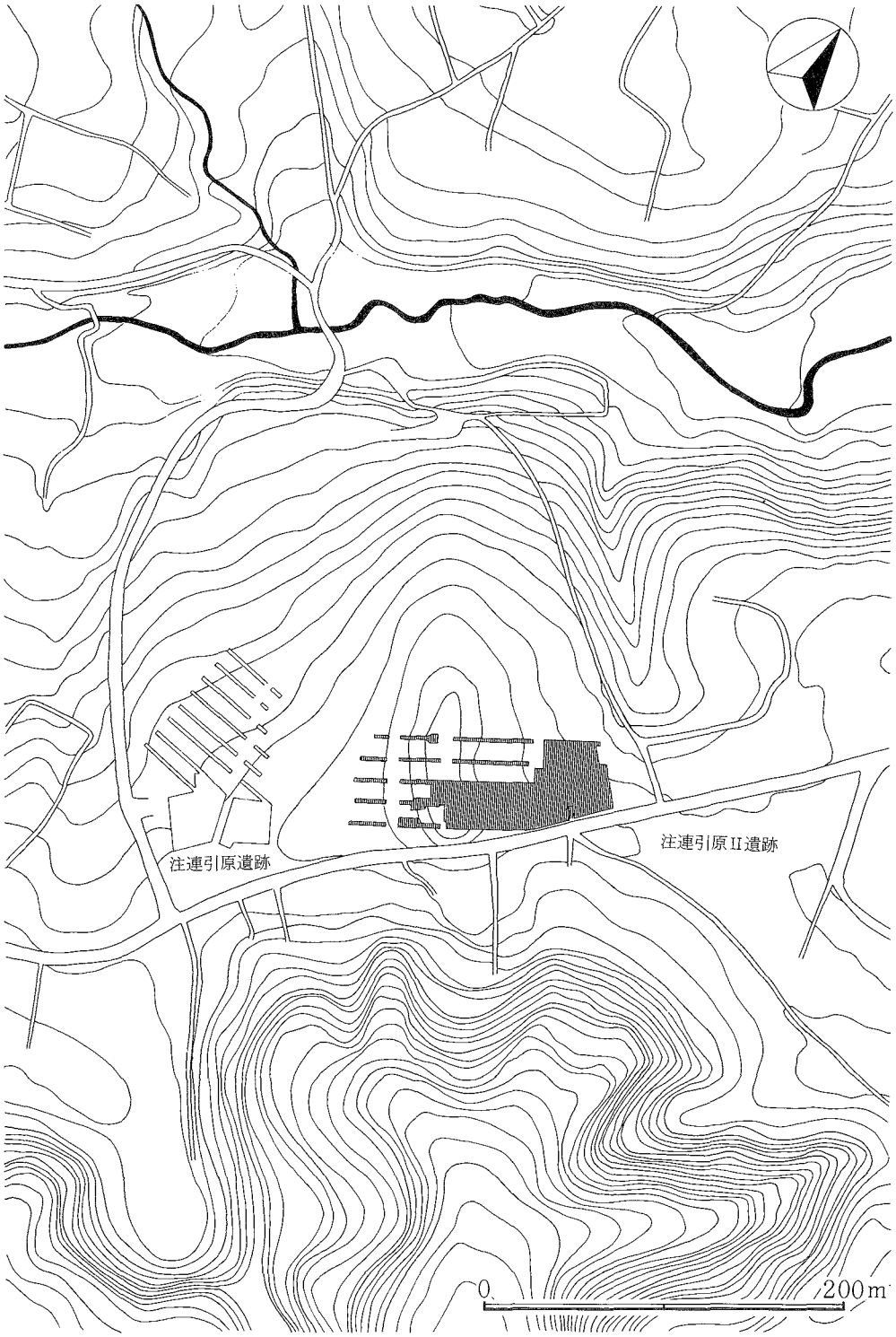




1．注連引原(Ⅱ)遺跡
2．注連引原遺跡
3．下原遺跡
4．中原遺跡
5．天神原遺跡
6．道前久保遺跡

第１図　注連引原Ⅱ遺跡位置図(1)

第２図　注連引原Ⅱ遺跡位置図(2)



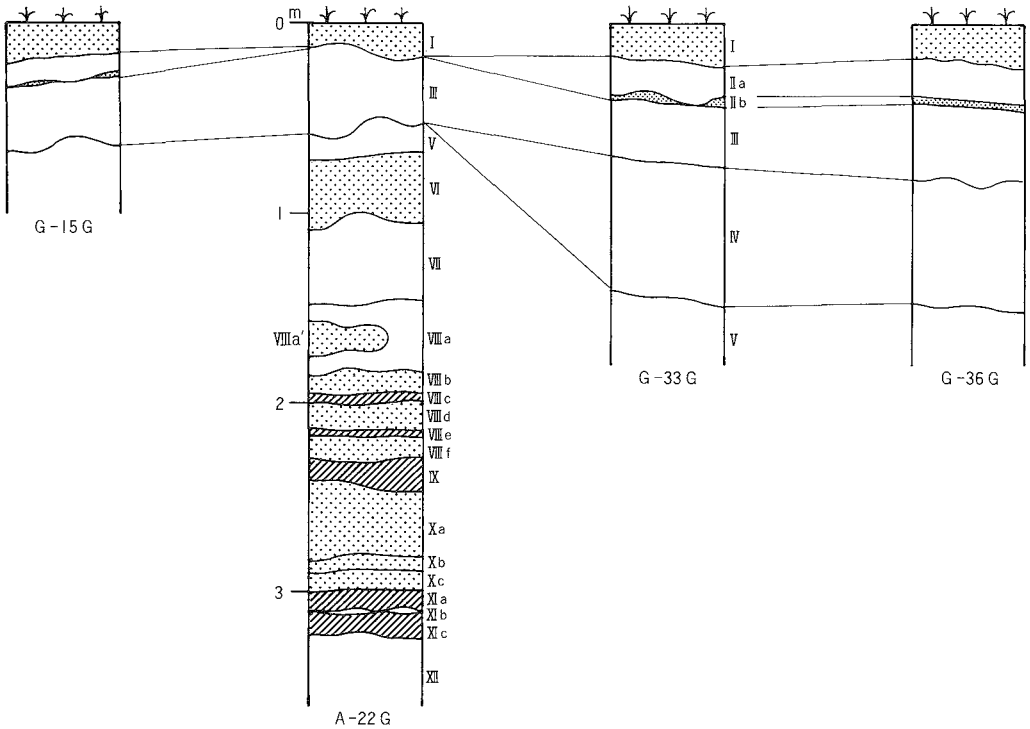
第3図　注連引原II遺跡周辺の地形

の位置にある。そして、やや離れて西方約3.7kmには**上人見遺跡**（松井田町）が、北東約4.5kmには**三本松遺跡**があり、それぞれ弥生時代中期前半期の遺物が検出されている。

V　層　　序

注連引原II遺跡の基本層序は第4図のとおりである。示準テフラはI層（As—A）、IIb層（As—B）、VI層（As—YP）、VII層（As—SP）、VIII_a層～X_c層（As—BP）、XI_b層（AT）に認められる。また、遺物包含層は平安時代ではII_a～III層上部、弥生時代ではIII層、縄文時代ではIII層～IV層中位である。以下、各層の特徴について述べることにする。

I層	灰白色軽石層	浅間A軽石（As—A　1783年）純層。地表近くは一部土壌化しているが、ほとんど耕作による攪乱を受けていない。層厚は平均20cmである。
II_a層	黒色土層	As—Bを多量混入する。粘性、しまりともない。
II_b層	灰褐色軽石層	浅間B軽石（As—B　1108年）純層。西斜面では部分的に存在する。山頂部ではほとんどみられない。東斜面部が最も厚く5～8cm程度堆積する。
III層	黒色土層	粘性はややあるが、しまりは弱い。As—Bは全く混入しない。弥生時代、縄文時代の遺構の覆土層に類似している。
IV層	褐色土層	III層より明るく、粘性、しまりともある。弥生時代の遺構の地山にあたる。縄文時代前期の遺物はこの層中に包含されている。山頂部には存在しない。
V層	黄褐色粘質土層	この層からローム層である。粘性は強く、しまりはややある。As—YPの粒子を若干混入する。いわゆるソフトローム層である。
VI層	黄色軽石層	板鼻黄色軽石（As—YP　1.3万年前）純層。しまり、粘性ともない。
VII層	明褐色粘質土層	VI層よりやや褐色で、粘性、しまりとも強い。いわゆるハードロームであり、乾くとクラックが発達する。As—SPを若干混入する。
$VIII_{a\sim f}$層	黄褐色軽石層群	板鼻褐色軽石（As—BP　1.6～2.1万年前）層群の上部にあたる。a′、b、d、fは軽石層で、aは黄褐色土層、c、eは褐色土層であり、土壌化した土層である。
IX層	暗褐色土層	As—BP層群中の厚い間層。しまり、粘性ともあり、暗色帯となっている。



第４図　基本層序柱状図

Ｘa～c層	黄褐色軽石層群	As－ＢＰ層群の下部にあたる。狭義では室田軽石層(As—ＭＰ　森山　1971）に相当する。
XIa～c層	暗褐色粘土層群	中部ローム最上位の黒色帯に相当する層である。XIb層は姶良 Tn火山灰（ＡＴ　2.1～2.2万年前）層の純層である。
XII層	礫　　層	基盤礫層で、安山岩の大きな円礫の層であり、間には灰色粘土が入る。

Ⅵ　遺構と遺物

１、注連引原遺跡の概要

注連引原遺跡は本遺跡の西に隣接する遺跡で、昭和58年に発掘調査が実施された(能登・洞口)。調査の結果については、すでに報告しているが（大工原・中島　1987)、本遺跡との関連性が強いので、ここで簡単に触れておくことにする。

注連引原遺跡は注連引原II遺跡が存在する丘陵の西裾部の傾斜のゆるやかな場所に位置する。この遺跡からは縄文時代前期から中期後半にかけての遺物と、弥生時代前期終末から中期初頭にかけての遺構と遺物が検出された。このうち、弥生時代の遺構では住居址１軒、住居址の可能性のあるピット群２箇所、住居址の可能性のある遺物集中部分２箇所が検出されている。

また、弥生時代の遺物についてみると、土器では条痕文系、浮線文系、大洞系、浮線文・大洞系の影響を受けた平行沈線文を施す土器群、三角連繋文を施す土器群が出土している。そして、石器では石鏃、石鍬等が出土している。

２、注連引原II遺跡の概要

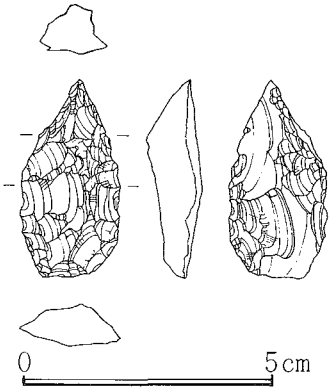
本遺跡からは旧石器時代、縄文時代前期前半から後期前半、弥生時代前期終末から中期前半、平安時代の遺構と遺物が検出された。

このうち主体となるのは、弥生時代の遺構と遺物であり、山頂部と東裾部を中心に分布する。東裾部では住居址１軒、土壙23基、多数のピット、集落を区画する濠等、集落の主要部分が検出された。また、住居址の可能性のある遺物集中部分が２箇所確認されている。濠の内側にはＹ－１号住居址があり、この住居址の北から西にかけて、土壙群が弧状に展開している。また、土壙群の西にはピット群が存在する。そして、濠の外側には再葬墓とみられる土壙が１基存在している。濠の中央には土橋と門址が検出されており、濠の外側には土塁状の遺構がみられる。一方、山頂部分には、土壙、ピット群が存在し、配石も確認されている。

遺物としては、土器では条痕文系、大洞系、三角連繋文を施す土器群が検出されている。また石器では石鏃、石鍬、有肩石斧、スクレイパー、砥石、独鋸石などが出土している。

３、旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物は１点M－１号濠中より検出された。第５図は槍先形尖頭器である。木葉形を呈し、基部は丸くなっている。左右対称であり、最大幅は中央基部寄りにくる。最大厚は先端寄りにあり、断面形は三角形を呈する。素材剥片の打点が横位にくるように用いて、半両面調整で仕上げている。先端部の調整は特に急角度である。長さ3.9cm、幅2.0cm、厚さ1.1cm、重さ6.6ｇである。石材は黒曜石を用いている。



第６図　旧石器時代遺物

こうした断面三角形を呈し、片面加工に近い調整を施す槍

先形尖頭器は比較的古い段階のものであると考えられる。

4、縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構と遺物分布状態（第5図、第7図）

縄文時代の遺構としては土壙2基とピット多数が検出されている。これらの遺構は30ラインから34ラインにかけて多くみられる。遺構内からは少量の遺物が検出されているだけで、性格については不明である。これらの遺構は検出される土器から前期と中期のものとみられる。

一方、土器の分布状態については第7図のとおりである。時期別にみると、山頂部から西斜面部（20～25ライン）にかけて中期後半の土器がまとまる傾向があり、東斜面部（30～36ライン）に前期と中期の土器がまとまる。また、東裾部ではＹ－１号住居址の北西部分に中期から後期にかけての土器が集中する傾向が認められる。石器については後で述べるが、縄文時代の石器と判断されるものは、これらの分布傾向とほぼ一致する。

これらのことから、縄文時代には本遺跡内での活動は活発なものではなく、断続的かつ局地的に生業が営まれたものと推定される。

(2) 土器（第8図、第9図）

１～17は、縄文時代前期前葉黒浜式に属する一群である。１は口縁部破片で、無節斜縄文が施されている。２、５、６、７、８、10、12、14、15、16、17は胴部破片で、単節斜縄文が施される。３は口縁部破片で、撚糸文が口唇部にまで施されている。４は胴部破片で、平行沈線と結節沈線が施される。９、13は胴部破片で、撚糸文が施されている。11は胴部破片で、直前段合撚の縄文が斜位に施されている。

18～28は、縄文時代前期後葉諸磯式に属する一群である。18、19は胴部破片で、櫛歯状施文具による波状文が縦位に施される。20は胴部破片で、浮線文が横位に施されている。21、22は底部破片で、同一個体と思われる。23、25は胴部破片で、浮線文、単節斜縄文が施される。24は口縁部破片で、浮線文、撚糸文が施されている。26は胴部破片で結節沈線が施される。27は胴部破片で、爪形文が施される。28は胴部破片で、櫛歯状施文具による平行沈線が施されている。

29～39は、縄文時代中期に属する一群である。29、30は胴部破片で、平行沈線と刺突が施される。31は胴部破片で、沈線が垂下し、単節斜縄文が施されている。32は胴部破片で、横位の沈線と単節縄文が施される。33は口縁部破片で、渦巻文、区画内に単節縄文が施されている。34は口縁部破片で、渦巻文が施されている。35は胴部破片で、沈線が弧状に施されている重弧文の土器

である。36は口縁部破片で、沈線により逆U字状に区画され、区画内に単節斜縄文が施されている。37は口縁部破片で、渦巻文、単節斜縄文が施される。38は胴部破片で、隆帯により区画され、区画内に円形刺突文が施されている。39は胴部破片で、垂下する沈線により区画がなされ、単節斜縄文、沈線によるワラビ手文が施される。

40〜43は、縄文時代後期に属する一群である。40は口縁部破片で、沈線により施文され、口縁部直下には矢羽根状の沈線文が施される。また、口唇部には橋状把手を持ち、縦位の沈線文が施されている。41は波状を呈する口縁部の破片で、口縁の波状に沿って、口唇部に2条の沈線文、竹管による刻みを持った隆帯が施文され、この隆帯から口唇部にかけて、縦位の沈線を施文した橋状把手が付けられている。また、隆帯下には平行沈線、沈線による鋸歯状文が施文される。42は胴部破片で、直線的な沈線により区画がなされ、区画内に単節斜縄文が施される。43は口縁部破片で、口辱部下に2条の刻を持つ隆帯と、沈線文が横位に施文されている。

ここで黒浜式土器についてみてゆきたい。資料数は少ないが、文様構成から5分類することができる。

1、無節斜縄文を施すもの。(1)

2、単節斜縄文を施すもの。(2、5、6、7、8、10、12、14、15、16、17)

3、撚糸文を施すもの。(3、9、13)

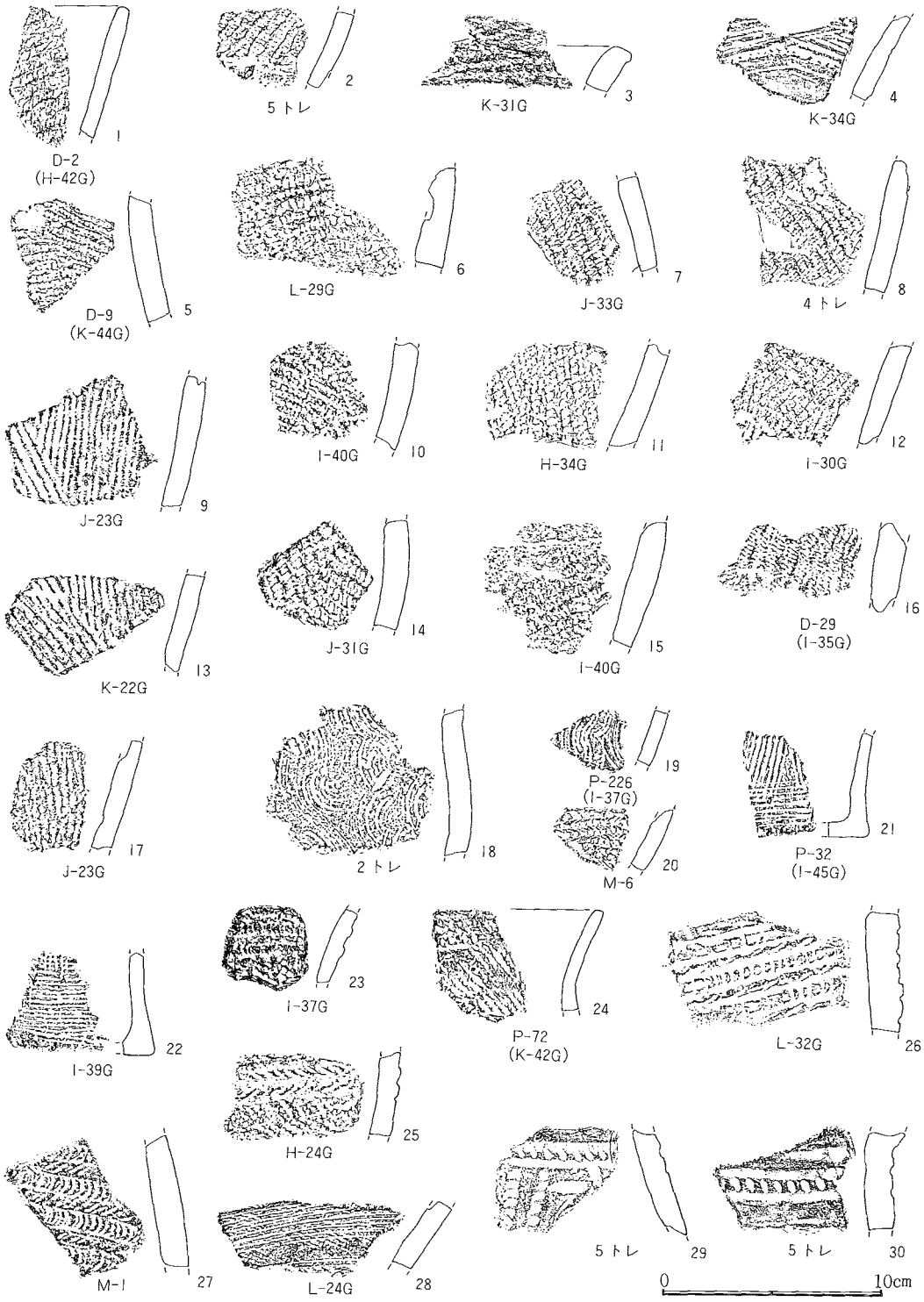
4、直前段合撚の縄文を施すもの。(11)

5、平行沈線、結節沈線を施すもの。(4)

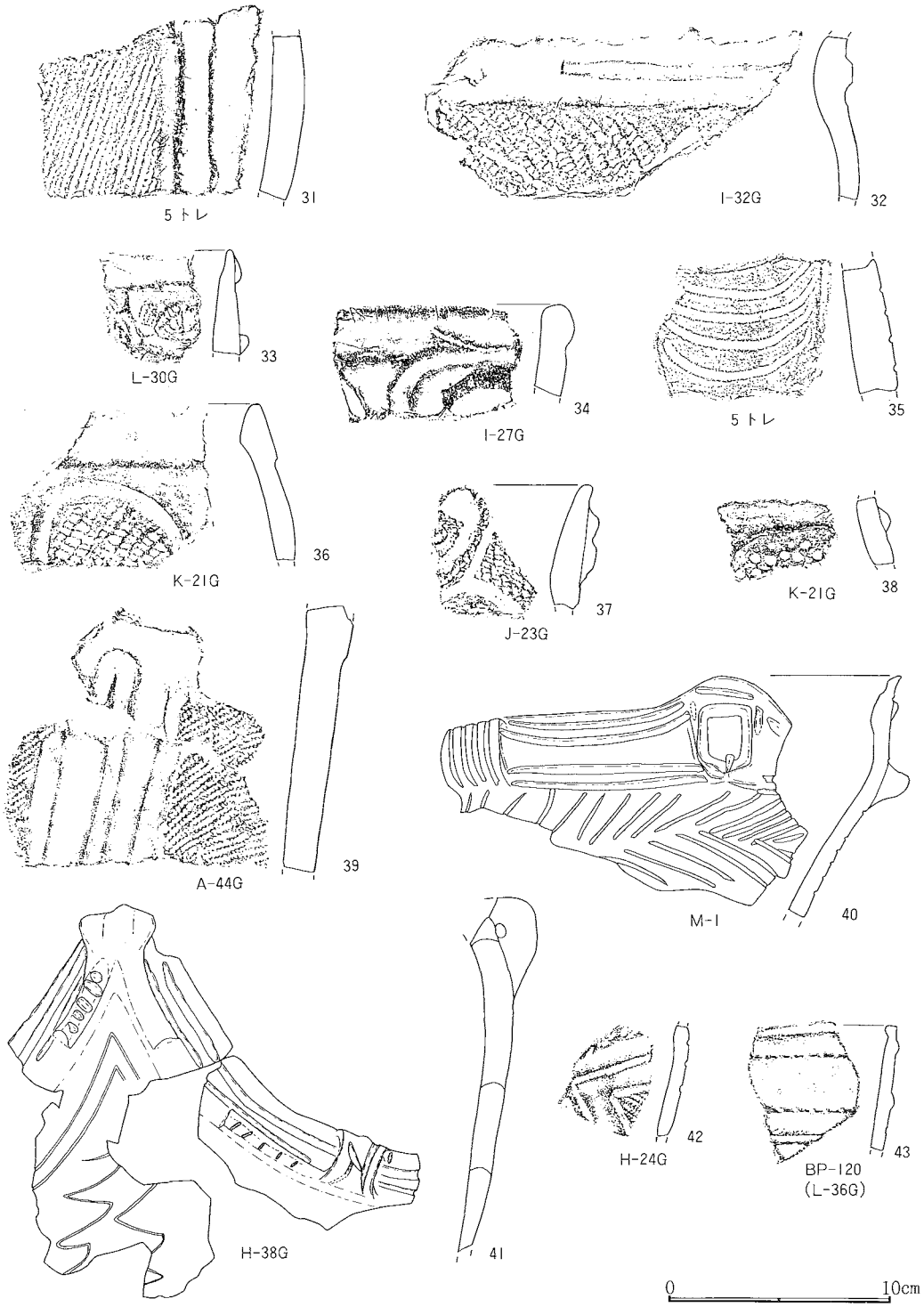
1〜4はいずれも黒浜式の中でも古い段階(第Ⅰ、第Ⅱ段階)に属する土器である。安中市内において、黒浜式土器が出土している下受地・十二遺跡、古城遺跡においても、ほとんどの土器が第Ⅰ、第Ⅱ段階に属する土器であり、木の葉文又は助骨文、磨消縄文を持つ第Ⅳ段階の土器は1点も検出されていない。なにぶん資料数が少ないので資料の増加をまたねばならないが、この点について今後注意深くみてゆく必要がある。

また、胎土に繊維を含むことが黒浜式土器の特徴の1つであるが、今回の資料については、胎土中の繊維が非常に少ないことがあげられる。5、10、14などは、単節斜縄文により羽状縄文が施され、有尾系土器を思わせる。しかし、胴部の小破片であり、黒浜系か有尾系か明確にはできない。この地域の有尾系土器(註1)については、今後の資料の増加をまちたい。

註1　群馬県内の有尾系土器については、「群馬県における神の木・有尾式土器について」(秋池武、新井順二1983)等により論考されている。


1
D-2
(H-42G)
2
5トレ
3
K-31G
4
K-34G
5
D-9
(K-44G)
6
L-29G
7
J-33G
8
4トレ
9
J-23G
10
I-40G
11
H-34G
12
I-30G
13
K-22G
14
J-31G
15
I-40G
16
D-29
(I-35G)
17
J-23G
18
2トレ
19
P-226
(I-37G)
20
M-6
21
P-32
(I-45G)
22
I-39G
23
I-37G
24
P-72
(K-42G)
26
L-32G
25
H-24G
27
M-1
28
L-24G
29
5トレ
30
5トレ
0
10cm

第8図　縄文土器(1)


5トレ
31
I-32G
32
L-30G
33
I-27G
34
5トレ
35
K-21G
36
J-23G
37
K-21G
38
A-44G
39
M-I
40
H-38G
41
H-24G
42
BP-120
(L-36G)
43
0
10cm

第9図　縄文土器(2)

5、弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺　構

a、住居址（第10図）

Y－1号住居址　この住居址は、Ｉ－40グリッドを中心に、Ｉ－41、Ｊ－40・41グリッドに位置する。平面形は隅円方形ないしは不正円形を呈し、規模は3.5m×3.5mである。掘り込みは非常に浅い。これは確認面がⅢ層（黒色土層）中であり、確認が困難であったばかりではなく、作られた当初からほとんど掘り込まれていなかったものと判断される。柱穴は壁に沿って壁柱穴が並ぶほかは、不規則に多数存在し、主柱穴を特定することはできない。炉址は中央よりやや北西寄りに位置する。80cm×50cmの楕円形を呈する地床炉で、東側に１個約50cm×30cmの偏平な河原石が枕石として設置されていた。炉址の内部からは多数の黒曜石の剝片、砕片や検出された。

この住居址の場合は最初にブロック状に遺物が集中することが確認され、精査を進めてゆくうちに住居のプランが判明した。遺物包含層はⅢ層と等質の土層であり、区別することはできない。また、遺物包含層は薄く、出土レベルもほぼ同じであり、遺物出土状態からは遺物を分けることはできないので、この部分から検出された遺物は原則として、Ｙ－１号住居址に所属するものと考えられる。

遺物は全体から出土しており、偏在性は認められない。土器は壺、甕の破片が多量出土しているが、完形のものはない。石器としては石鏃５点、打製石斧１点、打製石斧刃部再生剝片１点、スクレイパーＢ類３点、凹石１点、磨石３点、敲石２点、砥石２点が検出されているほかに、石核Ｂ類が６点まとまって出土しており、剝片Ａ類、Ｂ類も多量出土している。

土壙No.	土器	石器	土壙No.	土器	石器
1	◎完形	○△	16	◎	○
2	○	○	17	○	○
3	◎	○△	18	○	○
4	○	△	19	○	○△
5	○		20	◎	○
6	○	○	21	○	
7			22	○	○
8	○		23	○	○
9			24	◎	○△
10	○	○	25	○	○
11	○		26	○	
12	◎	○△	27	○	○
13	◎	○△	28	○	○△
14	◎	○△	29	縄文	○
15	○	○△	30	縄文	

◎多量（20点以上）　△狭義の石器

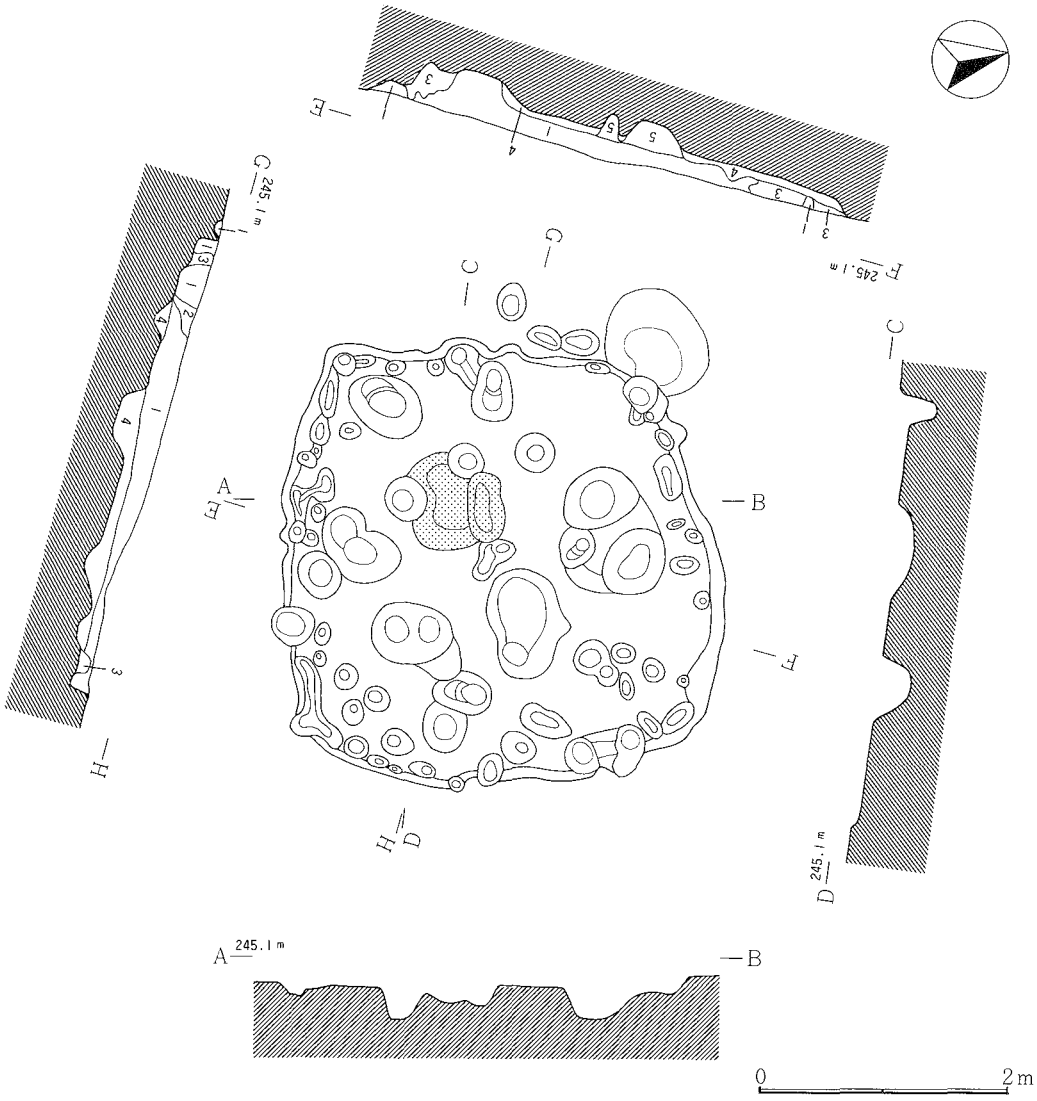
第１表　土壙遺物出土状況一覧表

b、土壙（第11図、第12図）

土壙は30基検出された。これらの土壙は単独で存在するものと、土壙群を形成するものに分けられる。単独で存在するものとしてはＤ－１、７、29、30がある。このうちＤ－29、30は縄文時

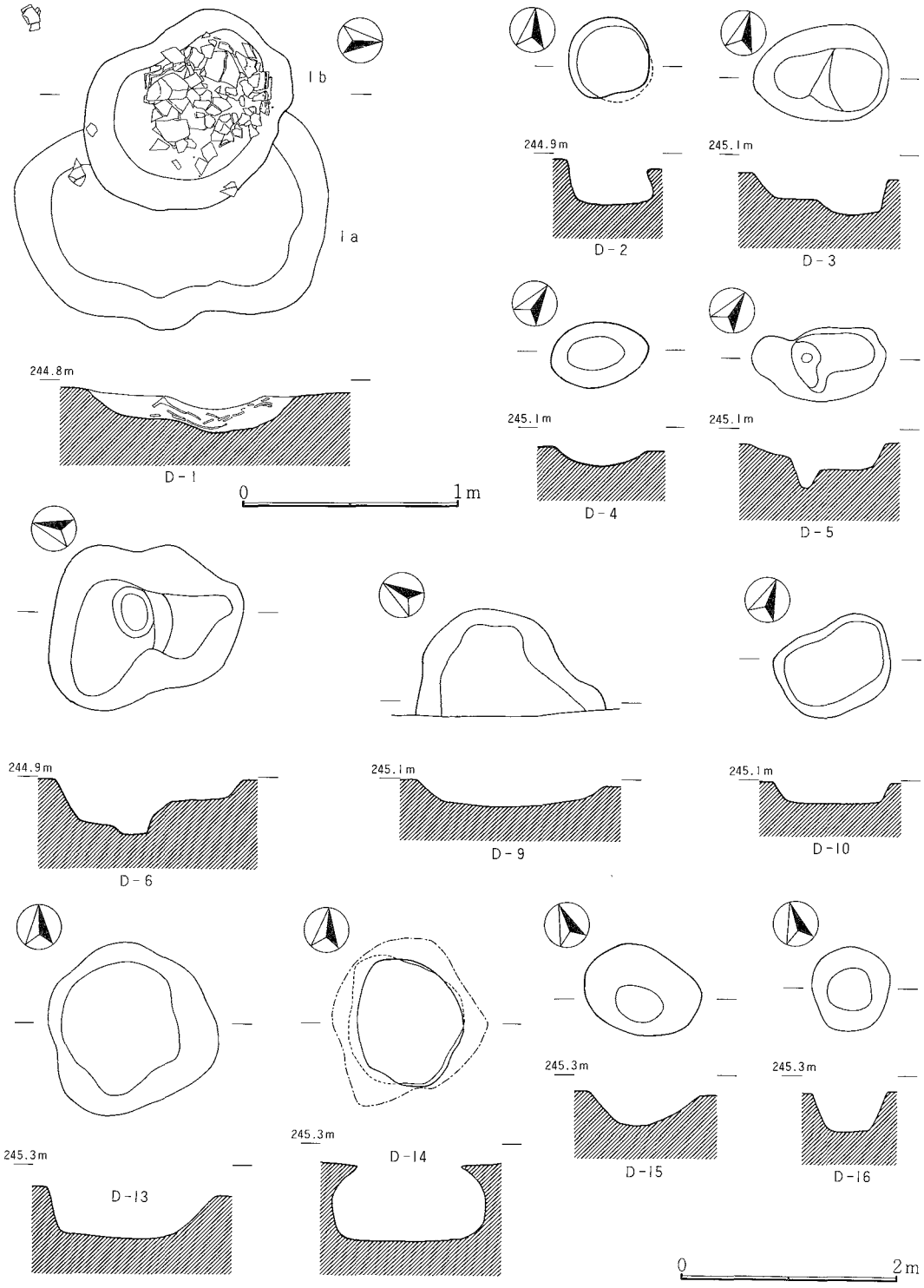
代のものである。

また、土壙群を形成するものは、Y－1号住居址の北東（H—43グリッド）から北西（I—39グリッド）を経て、南方（L—39グリッド）にかけて弧状に展開している。そして、この土壙域



（①粘　性　　②しまり　③混入物）
1 黒褐色土層　①あまりない②ややあり③ローム粒子若干、白色粒子少量
2 褐色土層　①1よりあり②ややあり③白色粒子若干
3 褐色土層　①ややあり②ややあり③白色粒子若干
4 褐色土層　①ややあり②ややあり③白色粒子若干、Ⅳ層に類似

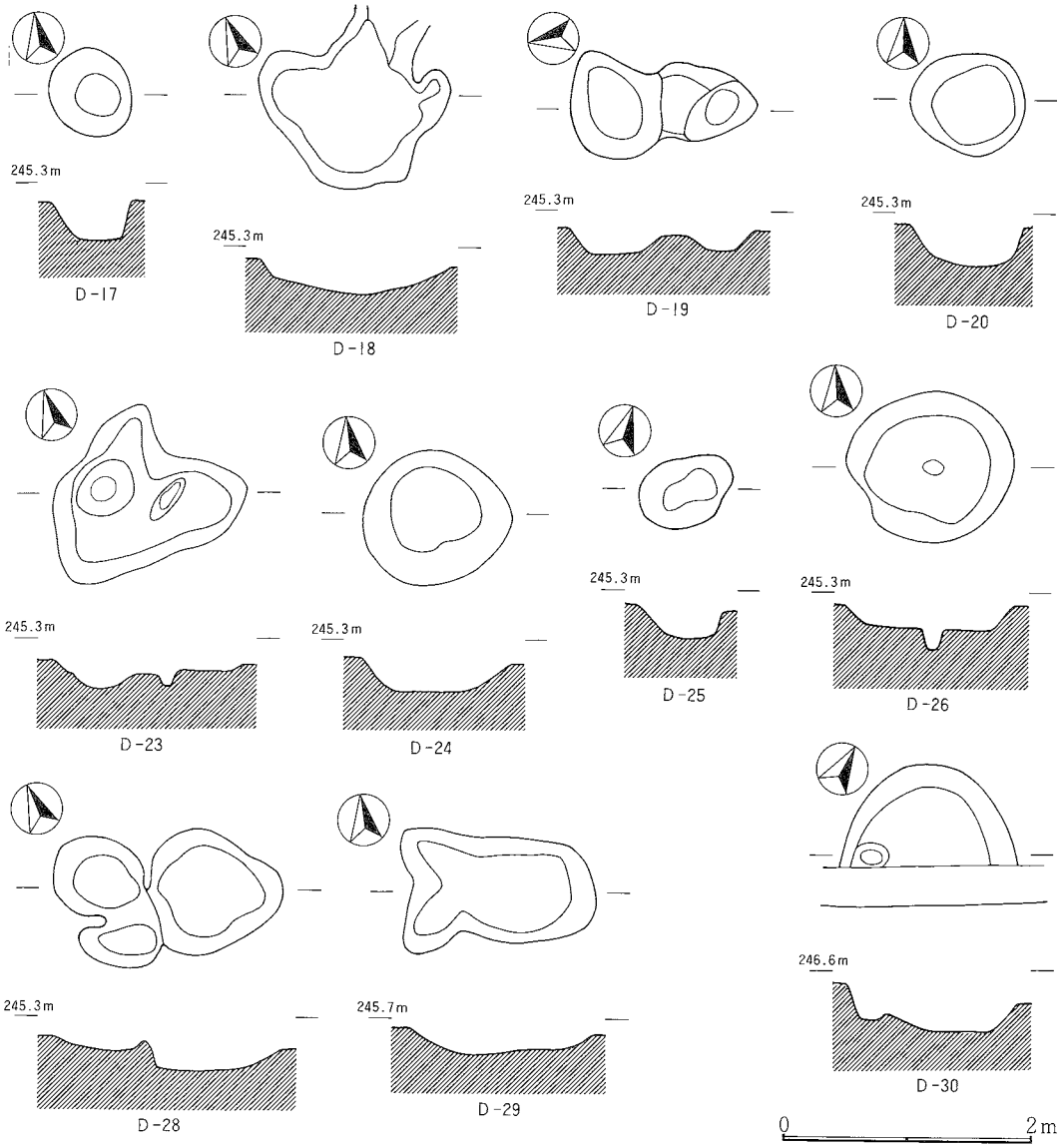
第10図　Y-1号住居址実測図


Ib
Ia
244.8m
D-1
0
1m
244.9m
D-2
245.1m
D-3
245.1m
D-4
245.1m
D-5
244.9m
D-6
245.1m
D-9
245.1m
D-10
245.3m
D-13
245.3m
D-14
245.3m
D-15
245.3m
D-16
0
2m

第11図　土壙実測図(1)

にはピットも集中して存在する。

この土壙群は配置から、さらに３つの群に分けられる。Ａ群はＹ－１号住居址の北東部分にまとまるもので、Ｄ－２、３、４、５の４基がこれに該当する。Ｂ群は住居址の北西から南東にかけて集中するもので、Ｄ－10、12～28の18基が存在する。また、Ｃ群は住居址の南方に存在するもので、Ｄ－６、８の２基がこれにあたる。この土壙群中、Ｄ－２、14は袋状土壙であり、Ｄ－３、13もその可能性が高い。



第12図　土壙実測図(2)

また、各土壙の遺物出土状況は第１表のとおりであり、Ｂ群の土壙が比較的遺物が多い。以下代表的な土壙について述べることにする。

Ｄ－１　この土壙はＭ－１号濠の東、Ｊ－43グリッドに存在する。２基の土壙が重複しており、Ｄ－1aは1.4×0.9mの楕円形を呈する。掘り込みは非常に浅く５～10cm程度である。この土壙中からは甕（第19図58～61）が出土している。また、Ｄ－1bは1.0×0.8mの楕円形を呈し、深さは20cmである。土壙内からは完形の壺（第19図57）が口縁を北にして、横位の状態で検出された。この壺はバックホーの重みで破損したとみられ、調査以前は中空の状態であったと推定される。内部からは何も検出されなかった。また、この土壙からはスクレイパーＢ類（第32図45）、剝片Ｂ類４点が出土している。

Ｄ－２　この土壙はＡ群に属する。直径0.8mの円形で袋状を呈している。深さは40cmである。

Ｄ－３　Ａ群に属するもので、1.2×0.8mの楕円形を呈する。２基の土壙が重複しており、深い方の土壙は深さ35cmで、本来は袋状を呈していたと推定される。遺物は多く、土器片のほか、石鏃、砥石、剝片Ａ、Ｂ類が検出されている。

Ｄ－13　Ｂ群に属し、直径1.5mの不整円形を呈する。深さは50cmである。この土壙も本来は袋状であったと推定される。遺物は多数の土器片と石鏃、磨石、剝片Ａ類、Ｂ類が出土している。

Ｄ－14　Ｂ群に属する袋状土壙である。口径1.0m、底径1.5m、深さ70cmである。多量の土器片と石鏃、スクレイパーＢ類、打製石斧刃部再生剝片、磨石、剝片Ａ、Ｂ類が出土しており、遺物量は最も多い。

Ｃ、ピット

ピットは約760基検出された。このうち、東斜面（30～35ライン）に存在するものは縄文時代のものである可能性が高い。また、山頂部分（22～27ライン）は、各時代のものが混在しており、弥生時代のピットのみを抽出することはできないが、弥生時代のピットも存在していると考えられる。一方、東裾部（35～47ライン）のピットは、遺物分布状態からみて、大部分は弥生時代のものであると推定される。

これらのピットは土壙域に集中して存在するほか、土壙域の西側（35～38ライン）に集中部分が認められる。しかし、規則性のある配列を抽出することができず、こうしたピット群の性格については不明である。

ｄ、濠（第13図）

Ｍ－１号濠　この濠は調査区の東部、Ａ－43グリッドからＬ－42グリッドにかけて検出された。丘陵が最も細くくびれた部分を南北に切断するように存在しており、ほぼ一直線に走る。また、

中央部には土橋が存在する。

断面形は箱薬研状を呈し、上幅1.5～3.0m、下幅0.7～1.3m、深さ0.7～1.3mである。最大幅をもつ部分及び、最深部は土橋の両脇である。この濠に付随して検出された遺構には土橋の西側に門址とみられる柱穴がある。また、濠の側面及び底面には多数の柱穴が存在する。これらの柱穴のうち、側面にあるものの中には、両側に対となって存在するものもある。

一方、土層堆積状況をみると、基本的にはレンズ状に堆積しており、自然堆積とみられる。また、土砂の流入方向について観察すると、基本的には地形の傾斜のとおり、西側から流入しているが、一部これとは逆に、東から流入する土層が認められる(第13図１)。そして、濠を掘った土砂は濠の東側に排出しており、土塁状に堆積していたことが観察される(第13図５)。これらのことから、濠の東側に土塁状の遺構が存在していた可能性がある。さらに、覆土最上層（１層）中には平安時代の遺物が含まれており、平安時代までこの濠が完全に埋没せずに存在していたと推定される。また、土塁状遺構の上部はこの面で削平されていることも観察される。

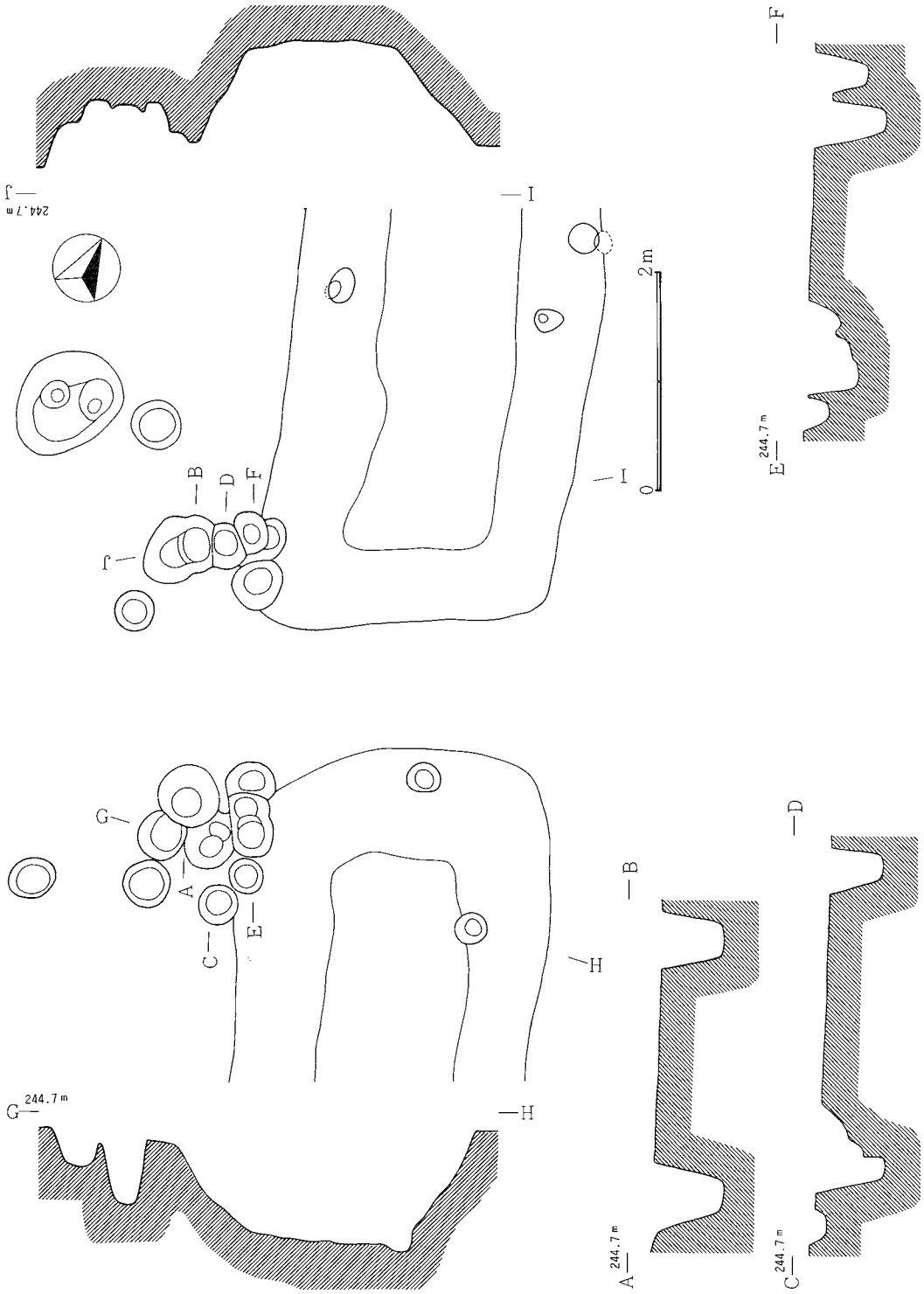
遺物出土状況をみると、土橋より南側に偏在している。土橋の北側では、土橋付近は比較的多量の遺物が出土しているが、これより北へゆくにつれて遺物は少なくなる。また、出土層位については、覆土上層では平安時代の遺物が多く、中層から下層にかけて弥生時代の遺物が出土している。中層と下層の遺物の量比は７：３であり、濠が造られた直後のものより、二次的に濠へ流入したものが多い。また、少量ではあるが、縄文時代の遺物も混入している。

出土した遺物は、土器では壺、甕等の小破片が多いが、小型台付鉢（第22図145）も出土している。また、石器では石鏃４点、スクレイパーＡ類１点、リタッチド・フレイクＡ類２点、有肩石斧１点、打製石斧４点、石鍬４点、打製石斧刃部再生剝片６点、スクレイパーＢ類６点、リタッチド・フレイクＢ類４点、凹石１点、磨石２点、敲石３点、砥石１点、台石１点とほぼ全器種が出土している。そして、多数の剝片Ａ、Ｂ類と石核Ａ類４点、石核Ｂ類５点が出土している。

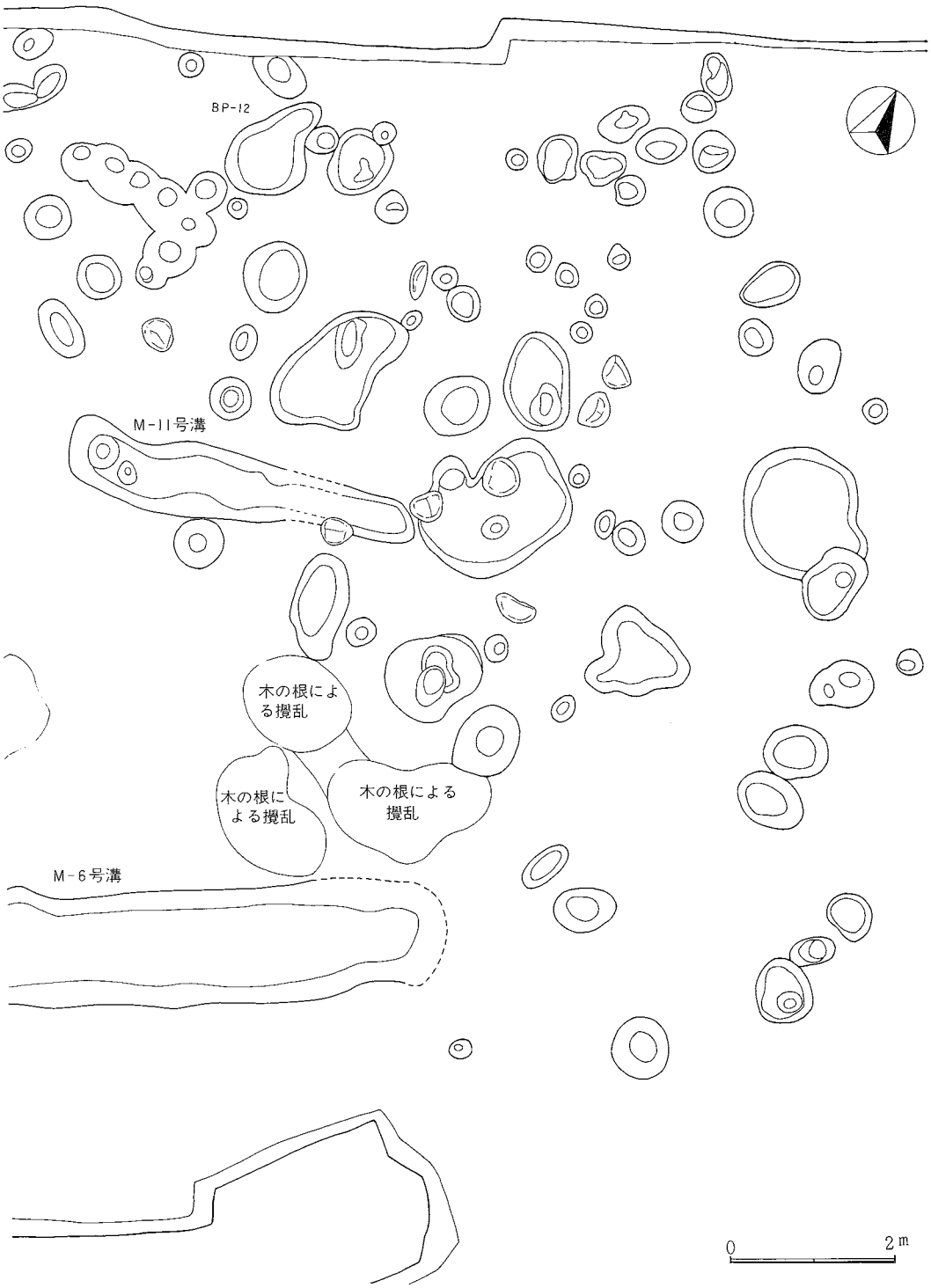
Ｍ―１号濠は長さ45mにわたって検出されたが、さらに南北へ延びている。南側では農免農道を挟んで存在する農道と濠の延長が一致しており、この部分に濠が延びていることが推定される。

土橋・門址（第14図）これらはＭ―１号濠に付随するものである。土橋はＧ―43グリッドに位置する。上幅1.1～1.4m、長さ2.7mであり、濠を掘り残す形で造られている。

門址は土橋の西側に存在する。柱穴が重複しつつ南北２列に並び、東端部で内側へ鉤の手に折れ曲がるように配列されている。柱穴は南側で７～10基、北側で７基である。柱穴列間は2.7mであり、東端部で1.8mである(いずれも中心距離)。柱穴内からは弥生土器片、剝片Ｂ類等が検出されている。



第14図　土橋門址実測図



第15図　山頂部実測図

e、山頂部分（第15図）

山頂部からは多数のピットと溝、配石が検出された。このうち、溝は平安時代のものである。他の遺構は縄文時代、弥生時代、平安時代のものが混在しているとみられるが、土層の堆積が薄く、遺物が伴うものも少ないので、明確に分けることができない。しかし、弥生時代の遺物も多く出土しており、弥生時代にも使用された「場」であると考えられる。

ピットは浅いものが多く、規則性を見い出せない。また土壙状のものは浅く、不定形のものが多く、遺物も少ないので、性格は不明である。このうち、ＢＰ－12からは石鏃（第30図21）が出土している。また、配石が存在するが時期は不明である。

(2) 土　器

a、分布状態（第16図）

本遺跡では、弥生時代の土器群は小破片が多く、器種・系統等を特定することが困難なものが多いため、文様による分類を行い、それにより分布状態について検討を行った。また、図示するにあたっては、土器の分布傾向を明確にするため、出土時の破片数によった。

土器群は調査区全域から均一に出土するのではなく、密な部分と疎な部分が認められる。ブロック状に集中する部分は大きくみると、山頂部（22～30ライン）、東斜面部（31～34ライン）、東裾部（34～44ライン）に存在する。

山頂部は分布密度がやや低く、東斜面へ流れるように延びる傾向が認められる。また、文様別では無文が多く、縄文が少ない。

東斜面部は東裾部とはっきり分離することはできないが、分布密度から34ラインで一線を画することができる。この部分の弥生土器の分布は疎であり、文様別では縄文、沈線はほとんど存在しない。この部分は縄文土器の分布が密であり、弥生時代の生業活動は低調であったとみられる。

東裾部は弥生土器が密集する部分である。しかし、詳細にみると、さらに幾つかの部分に分けることができる。34～37ラインにかけての部分は、ピット群と分布域が一致する。この部分の密度は比較的疎であり、文様別にみると、条痕、縄文の比率が低い傾向にある。また、37～40ラインにかけての部分であるが、この部分は土壙Ｂ群、Ｃ群と分布域が一致する。分布密度は高い。文様別ではＩ－39グリッド周辺に縄文が集中し、条痕、条線は南部が多い傾向が認められる。

次にＩ－40グリッド及び周辺部分であるが、ここはＹ－１号住居址とその北側にあたる。この部分は最も密度が高い部分であり、各文様が揃って多い。これらの土器群はＹ－１号住居址に密接に関係していると判断することができる。また、Ｋ、Ｌ－40、41グリッドを中心とする部分に集中部が存在する（１号遺物集中部）。また、Ｆ・Ｇ－40・41グリッドにも弱い集中部が存在する（２号遺物集中部）。これらの集中部分にはピット以外には遺構は存在しない。しかし、遺物は集

中傾向を示しており、Y－1号住居址の場合もほとんど掘り込みがないことから、住居址等の存在していた可能性もある。特に1号遺物集中部は、さらに南へ分布域が延びており、その可能性が高い。

また、H－41、42グリッドの集中域は、土壙A群と分布が重なる。この部分では文様別にみると、縄文が少ない傾向がある。こうした傾向はすぐ東にあたるM－1号濠と共通する。M－1号濠の遺物は二次的に流入したのが多いことから、本来はこの周辺に存在していたものも多いと推定される。このほか、土橋の東にあたるG－44グリッドにも弱い集中部分が認められる。この部分でも縄文はほとんど存在しない。

b、土　器

Y－1号住居址出土の弥生土器（第17・18図）

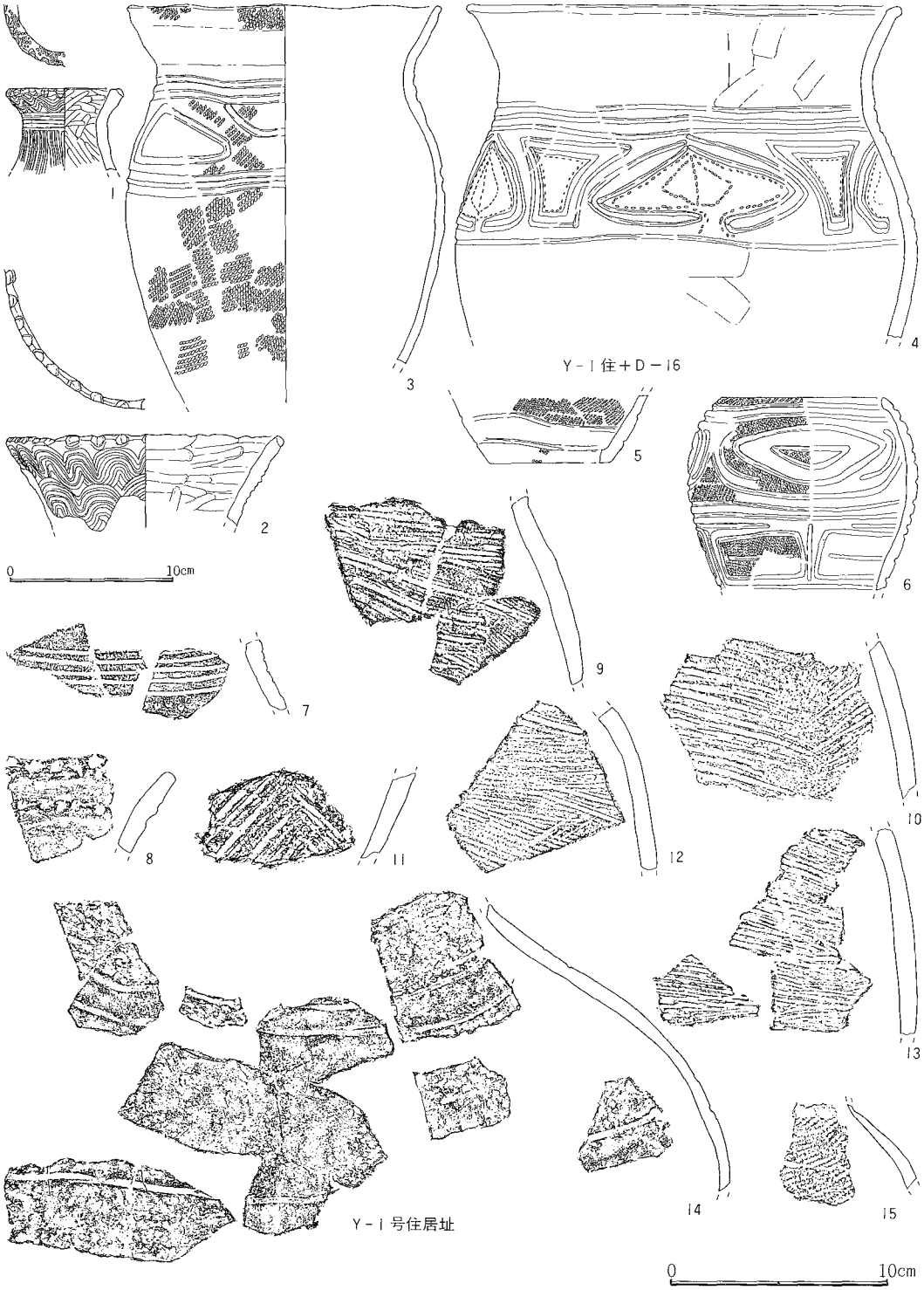
壺（1・2・7～15）　条痕文系（1・2・9～13）いずれも在地で生成された条痕文系の壺形土器である。1は小型で、口縁に櫛歯状工具による波状文、頸部に横位の平行線文、以下に縦位の平行線文を施す。口唇部には同様の工具により押圧を行い、口唇上面には縄文を付けている。頸部施文の在り方は丸子式の手法に類似する部分がある。2はやや大型であるが、1と同様の施文構造を持ち、口縁部に波状文を2段施し、口唇部には押圧を行っている。8は、口唇に押圧を行った後、口縁下に削り出しにより低い突帯を作出し、押圧を施している。他は胴部破片であり、11・12は横位羽状の条痕整形である。8は突帯作り出しと突帯貼付という技法差はあるものの、突帯を持つ点で東海地方の手法を意識する。一方、1・2は、通常頸部あるいは胴上部の文様素である波状文が、口縁に充当されており、より在地的である。

畿内系（7）本遺跡でも7のみである。壺形土器の頸部下端と思われる位置に5条の篦描平行線文を施し、その下に竹管による刺突文を連続させるものである。胎土は他の土器に比べ夾雑物の混和が極めて少なく、白色に近い淡褐色を呈して異質である。畿内第Ⅰ様式新段階に平行するものであろうか。

その他の壺としては14・15がある。14は淡褐色で薄く、地紋に無節の縄文を施し、平行沈線間を磨り消すもの。15は単節縄文を施す小型壺である。

甕（3・4・16～25）　浮線文系の甕の形態に、大洞系の簡略化した文様を付す有文の甕は、当地域の特徴的な類型であり、3・4をはじめこの類型が多い。16は頸部に1条の沈線を施すのみの無文甕である。

深鉢（6・26～29）　大洞系（6）口縁が内彎する器形で、胴中位の平行沈線帯によって文様帯を2分割し、上段には逆三角形を、下段には四角形を連繋させ、磨り消し手法を用いる。赤彩の



第17図　Y-1号住居址出土の弥生土器(1)

痕跡を残す。南東北の大洞A′直後の土器群に形態的類例を求めることができる。

他については系譜を明らかにし難いものが多いが、26は条痕文系と言えよう。

浅鉢（30～34）　31・32は太い沈線文による装飾で、大洞系と言える。33の無文の浅鉢については、浮線文系に類例が散見される。

遺物集中部出土の弥生土器（第18図・1～53）

1号遺物集中部（K・L—40・41グリッド）

壺（41・46）　口縁端を薄い突帯で肥厚させ、口唇部に押圧を施すものである。突帯上は無文であるが、手法的に条痕文系に連なるものであろう。46は太い沈線による施文で、大洞系とみられる。

甕（42～45）　41・44・45は在地系の有文甕である。

深鉢（48）浅鉢（49～52）　48・49は、大洞系の浅鉢、50は口縁端に1条の沈線を施すもので、浮線文系に類例のあるものである。

2号土器集中部（F・G—40・41グリッド）（第18図・54～56）

この集中部は破片点数は多かったものの、特徴的なものはほとんど見られなかった。54は無節の縄文を地紋とする壺、55は条痕文系壺、56は深鉢である。

D—1号土壙出土の弥生土器（第19図）

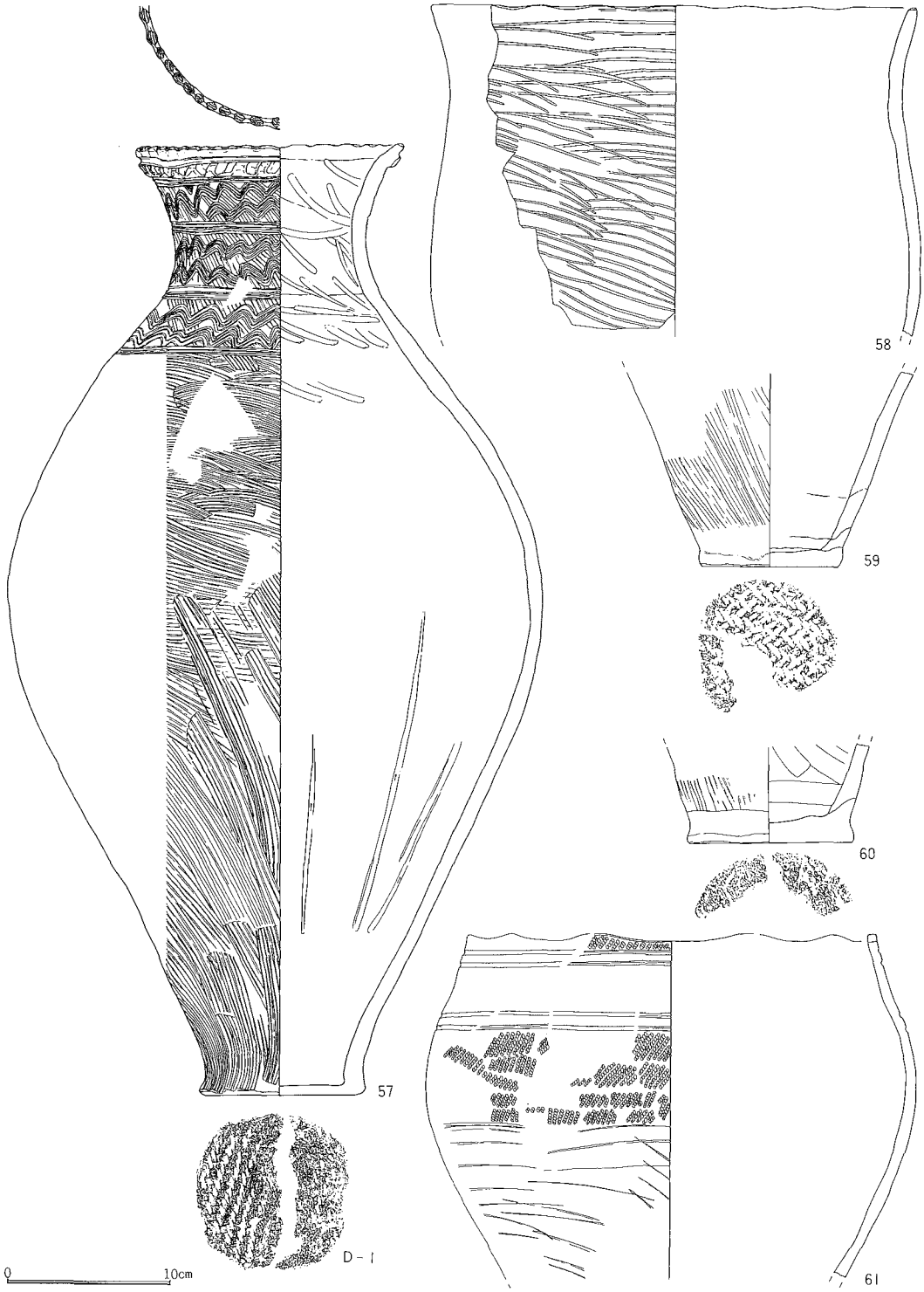
壺（57）　非常に大型・長胴の形態を呈す条痕文系の壺である。口縁部下に突帯を付し、口唇及び突帯上を押圧する。突帯と口唇間には沈線を施す。頸部は斜位・胴上は横位・胴下は斜位の条痕整形後施文を行なう。口～頸部に上から下の順で、櫛状工具による平行沈線帯・波状文を交互に描く。工具は4本歯、回転は右回りである。やはりY—1の例と同じで文様帯が上位に位置する傾向がある。突帯の在り方や形態、口縁端の沈線等に着目すれば、沖II遺跡に類例があり、頸部文様のみでみれば岩櫃山遺跡など一様式時期の降る段階に類似の物が多い。

甕（58～61）　58は条痕文系の影響下にある甕で、口縁は小波状、整形は箆ナデであるが、箆の突出した部分が3条単位の粗い条痕風の効果となっている。59・60は甕ないし深鉢の底部である。61は上部は大きく内傾斜し、小波状の口縁となる。上半の地紋は単節縄文、過半の整形は粗い条痕整形である。口縁下には2条単位の2帯の平行沈線を描き、その間は無文帯となる。文様構成の意識は有文甕と同一である。

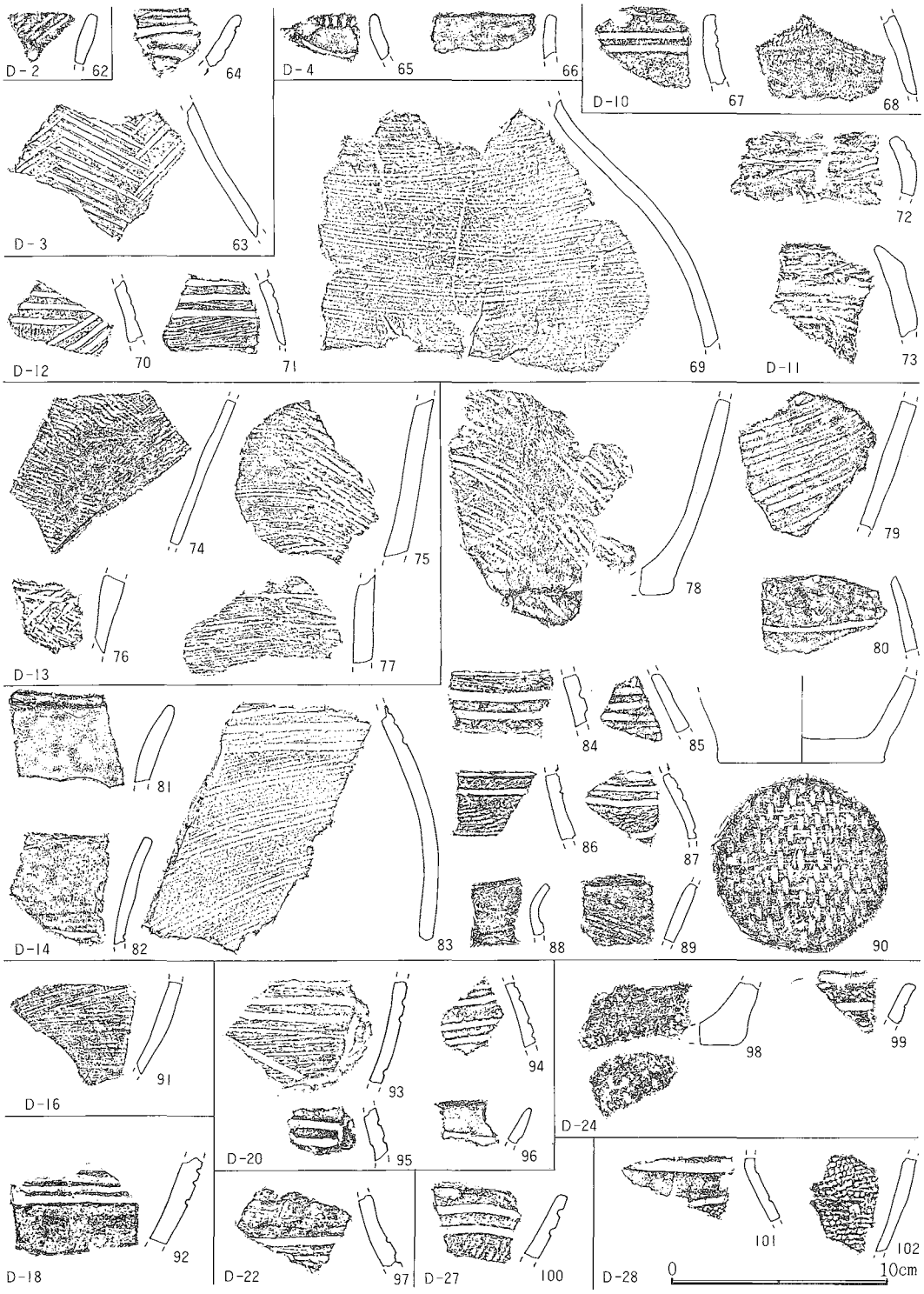
土壙出土の弥生土器（第20図）

壺（63・69・74～80・83・101）　101が磨り消し縄文施文を行なう以外は、全て条痕文系の壺で

第18図　Y-1号住居址(2)、1号遺物集中部、
2号遺物集中部出土の弥生土器



第19図　土壙出土の弥生土器(1)



第20図　土壙出土の弥生土器(2)

ある。63に櫛歯状工具による横位羽状文が見られる。

甕（67・70・71・81～88・92～95・97）　在地の有文甕と見られる物が多い。70・87・93は三角連繋文で、群馬県西部における典型的な文様構成である。

深鉢（62・66・72・73・89）浅鉢（64・99・100）　大洞系と思われるものが主体を占める。

土壙周辺出土の弥生土器（第21図）

壺（103～112・114～116）　103～106は条痕文系である。102は口縁端部に突帯を付し、押圧を行う。103は羽状条痕、以下は胴部破片である。107・108は口縁端に縄文を施文する一群、前者は沈線を組み合わせ、後者は肥厚させた上に縄文を付すものである。112・114～116は縄文を地紋とする一群である。

甕（113・117～123）　有文甕で占められる。113は胴上半に横位の綾杉状の沈線文が特徴的である。121・122は三角連繋文モチーフが判明する例である。

深鉢（125・126）浅鉢（126～130）　いずれも大洞系、特に128～130は一般的文様構成である。126は縄文を地紋とし、127は細沈線による四角形モチーフでやや特異である。

M－1号濠出土の弥生土器（第22図・136～145）

資料点数は少ない。条痕文系の壺（136～138）のほか、磨り消し縄文の工字状モチーフを持つ壺（139）、有文甕（140・142）、胴部条痕整形・口縁無文の甕（141）、大洞系浅鉢（143・144）、大洞系小型台付鉢（145）が認められる。

山頂部出土の弥生土器（第22図・146～153）

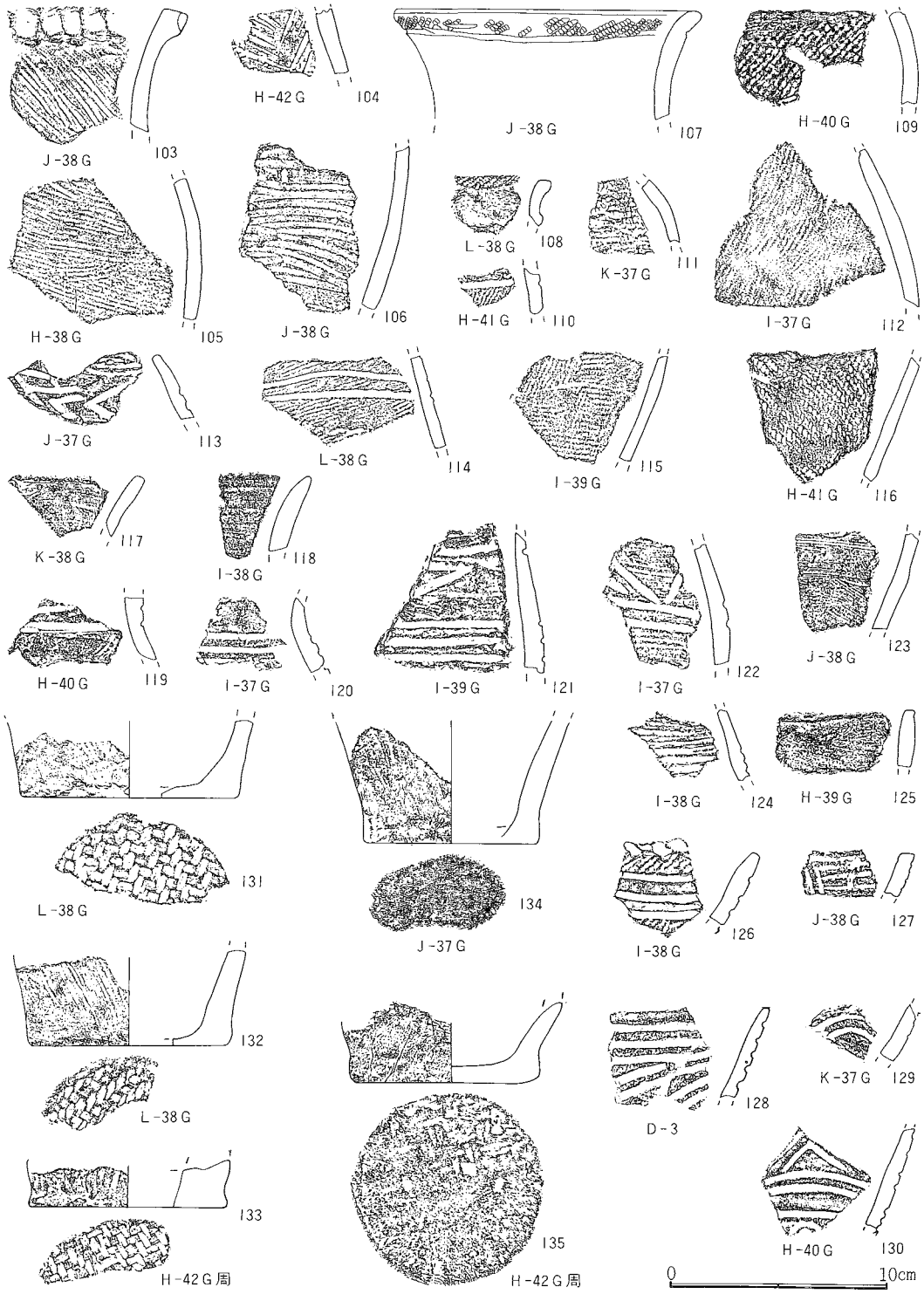
条痕整形の壺（146・147）、口縁を肥厚させ縄文と沈線を施す壺（148）・須和田式の壺（151）などがある。

グリッド出土の弥生土器（第22図・154～167）

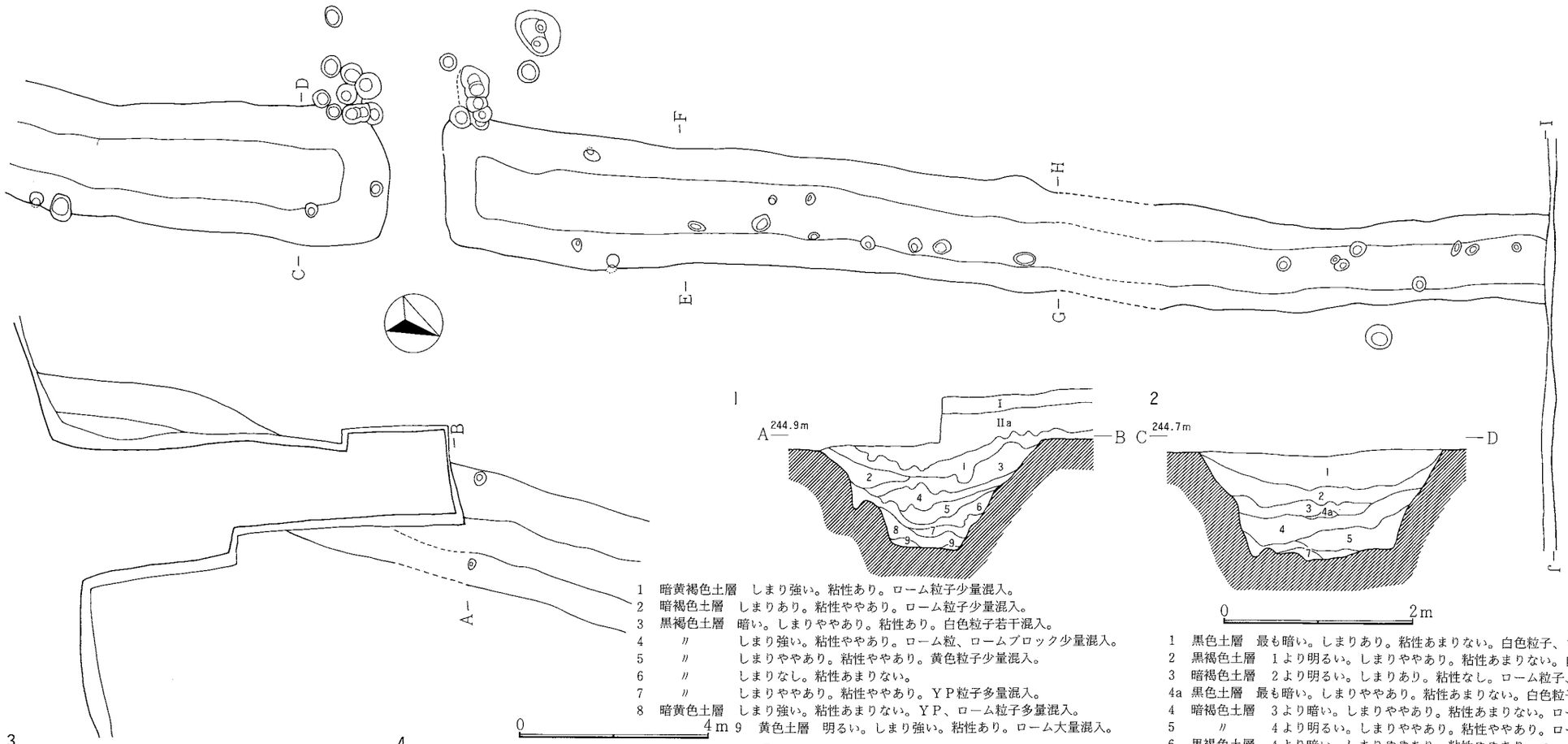
条痕文系の壺（154）、甕（157～162）、無文と平行沈線帯を有する深鉢（163・164）、大洞系浅鉢（165・166）特に後者は典型的文様である。167は無文の浅鉢で浮線文系か？。

試掘等出土の弥生土器（第22図・168～172）

試掘等で検出し、原位置の特定できない遺物である。特徴的なのは169の鉢であり、浮線文を施すものでは注連引原II遺跡唯一の資料である。

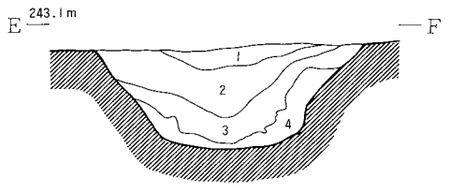


第21図　土壙群周辺出土の弥生土器

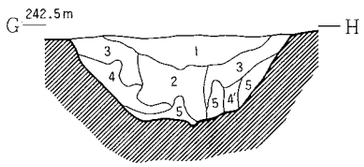


1　暗黄褐色土層　しまり強い。粘性あり。ローム粒子少量混入。
2　暗褐色土層　しまりあり。粘性ややあり。ローム粒子少量混入。
3　黒褐色土層　暗い。しまりややあり。粘性あり。白色粒子若干混入。
4　〃　しまり強い。粘性ややあり。ローム粒、ロームブロック少量混入。
5　〃　しまりややあり。粘性ややあり。黄色粒子少量混入。
6　〃　しまりなし。粘性あまりない。
7　〃　しまりややあり。粘性ややあり。ＹＰ粒子多量混入。
8　暗黄色土層　しまり強い。粘性あまりない。ＹＰ、ローム粒子多量混入。
9　黄色土層　明るい。しまり強い。粘性あり。ローム大量混入。

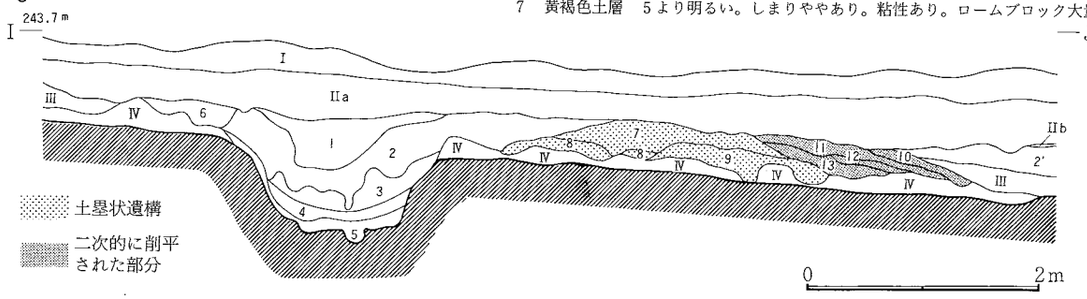
1　黒色土層　最も暗い。しまりあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム粒子若干混入。
2　黒褐色土層　1より明るい。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム粒子、砂少量混入。
3　暗褐色土層　2より明るい。しまりあり。粘性なし。ローム粒子、ＹＰ粒子多少、褐色砂粒多量混入。
4a　黒色土層　最も暗い。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子若干混入。
4　暗褐色土層　3より暗い。しまりややあり。粘性あまりない。ローム粒子、ブロック多量、白色粒子少量混入。
5　〃　4より明るい。しまりややあり。粘性ややあり。ロームブロック、粒子多量混入。
6　黒褐色土層　4より暗い。しまりややあり。粘性ややあり。ロームブロック、粒子多量混入。
7　黄褐色土層　5より明るい。しまりややあり。粘性あり。ロームブロック大量混入。



1　黒色土層　暗い。しまりあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム、ＹＰを若干混入。
2　黒褐色土層　1より明るい。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子若干、ローム、ＹＰ少量混入。
3　黒褐色土層　2より明るい。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム粒子若干混入。
4　暗褐色土層　3より明るい。しまりあり。粘性あまりない。ローム、スリッコ、ＹＰ少量混入。

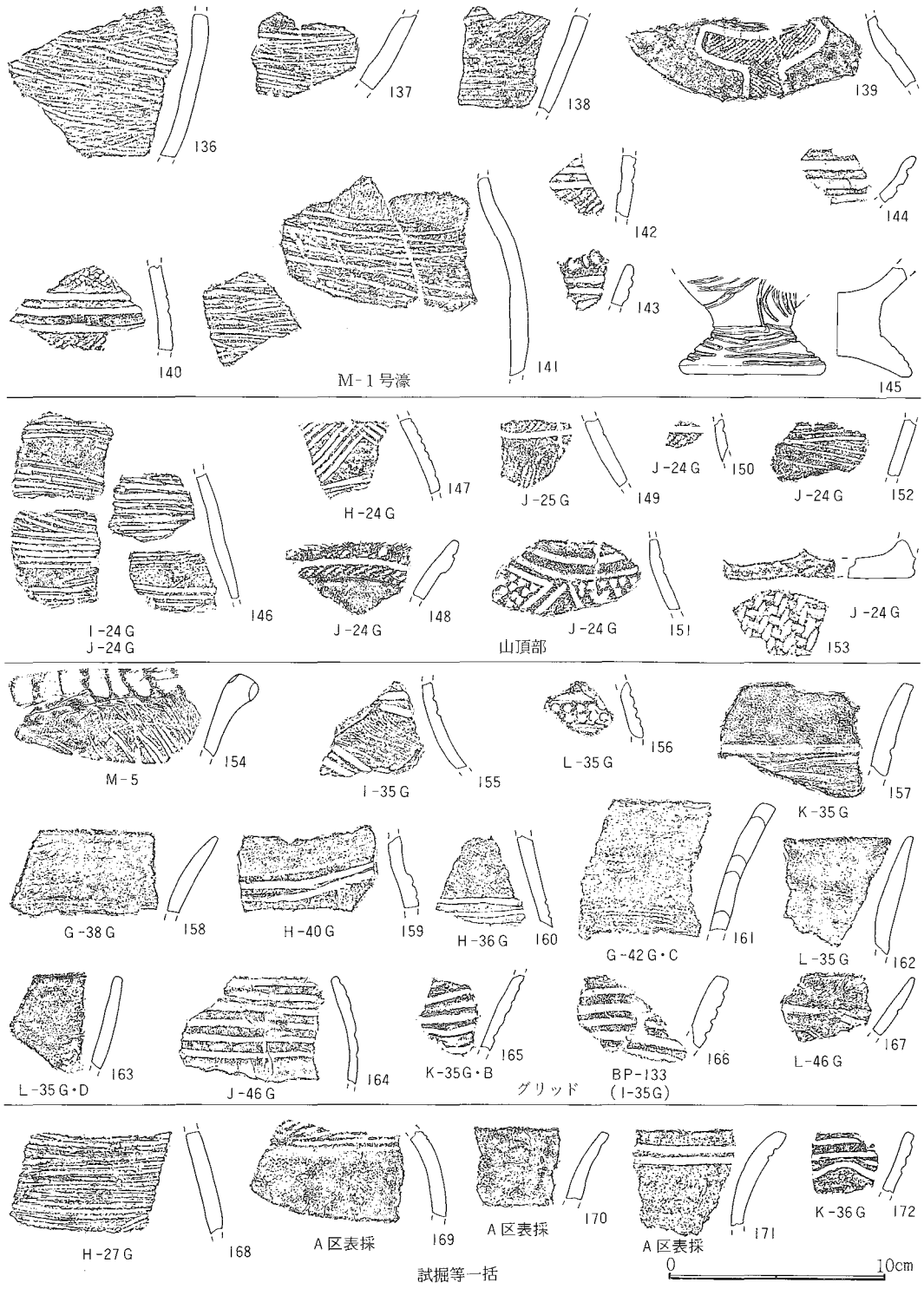


1　黒褐色土層　暗い。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子、黄色粒子少量混入。
2　黒褐色土層　しまりあり。粘性あり。白色粒子、黄色粒子少量混入。
3　黒褐色土層　しまりあまりない。粘性あまりない。白色パミス少量混入。
4　暗褐色土層　3より明るい。しまりあり。粘性ややあり。ローム粒子、白色粒子少量混入。
4′　暗褐色土層　3より明るい。しまりややあり。粘性ややあり。ロームやや多い。
5　暗黄褐色土層　4より明るい。しまりあまりない。粘性ややあり。ローム細粒、ＹＰ多量混入。



1　黒褐色土層　暗い。しまりややあり。あまりない。白色粒子少量混入。
2　暗褐色土層　1より明るい。しまりあり。粘性あり。白色粒子少量混入。
2′　黒褐色土層　しまりなし。粘性なし。As-Bを多量混入。
3　暗黄褐色土層　2より明るい。しまりややあり。あまりない。淡褐色粒のブロック多量混入。
4　〃　しまりあり。粘性ややあり。ＹＰをやや多量混入。
5　黄色土層　しまりあり。粘性あり。ＹＰ、ロームを主体とし、黒褐色土をブロック状に含む。
6　暗灰色土層　しまりあまりない。粘性あまりない。As-B、白色パミス少量混入。
7　黒褐色土層　暗い。ややあり。粘性なし。白色粒子、ローム粒子多量混入。
8　茶褐色土層　7より明るい。ローム粒子を多量混入。
9　黒褐色土層　しまりややあり。粘性なし。白色粒子ほとんどない。
10　黒褐色土層　しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子を多量混入。
11　暗黄褐色土層　10より明るい。しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム粒子多量混入。
12　黒褐色土層　しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子を多少混入。
13　暗黄褐色土層　しまりややあり。粘性あまりない。白色粒子、ローム粒子多量混入。

第13図　M-1号濠実測図



第22図　M-1号濠、山頂部、グリッド等出土の弥生土器

6、縄文時代・弥生時代の石器

(1) 石器群の分析方法

石器は調査区全体から多量検出されている。しかし、石器の器種、形態のみで、縄文時代のものと、弥生時代のものを分離することは困難である。そこで、石器の分布状態を考慮しつつ、各器種の所属時期について検討してゆくことにする。

また、石器の分類については、製作技術、素材獲得手段、機能、用途等を総合的に考慮して、大まかな石材の差違により大別し、さらに器種別に細分することにする。こうした方法は注連引原遺跡においても行っているが（大工原1987)、石器群から集落内外での人間の動態を解明してゆくのに有効な分析方法であると考える。

種別	石材名	石材の特徴	器種
A類	黒曜石 チャート 硬質頁岩 めのう 玉髄	硬質で鋭利な割れ口をもつ石材	石鏃　石槍 有肩石斧 円盤状石器 スクレイパー リタッチド・フレイク
B類	(黒色)頁岩 黒色安山岩 安山岩系 硬砂岩等	やや軟質でやや粘度をもつ石材	打製石斧　石鍬 スクレイパー　石匙 リタッチド・フレイク その他の打製石器
C類	安山岩系 砂岩等 (結晶片岩)	粘度があり粗面な剝片剝離に適さない石材	凹石　磨石 敲石　砥石 石皿　台石
D類	結晶片岩系 滑石	節理の発達した石材等	垂飾
E類	玄武岩系	硬質で緻密な石材	磨製石斧 独鈷石

第2表　石器分類表

(2) 石器の分布状態（第24図～第28図）

石器全体の分布状態は第24図のとおりであり、西斜面上部から東裾部にかけて分布する。そして、均一な分布状態を示すのではなく、疎密の偏在性をもっていることがわかる。こうした偏在性から本遺跡の石器群は次の3区域に分けることができる。

① 西斜面上部から山頂部（19～28ライン）

② 東斜面部（28～35ライン）

③ 東裾部（35～48ライン）

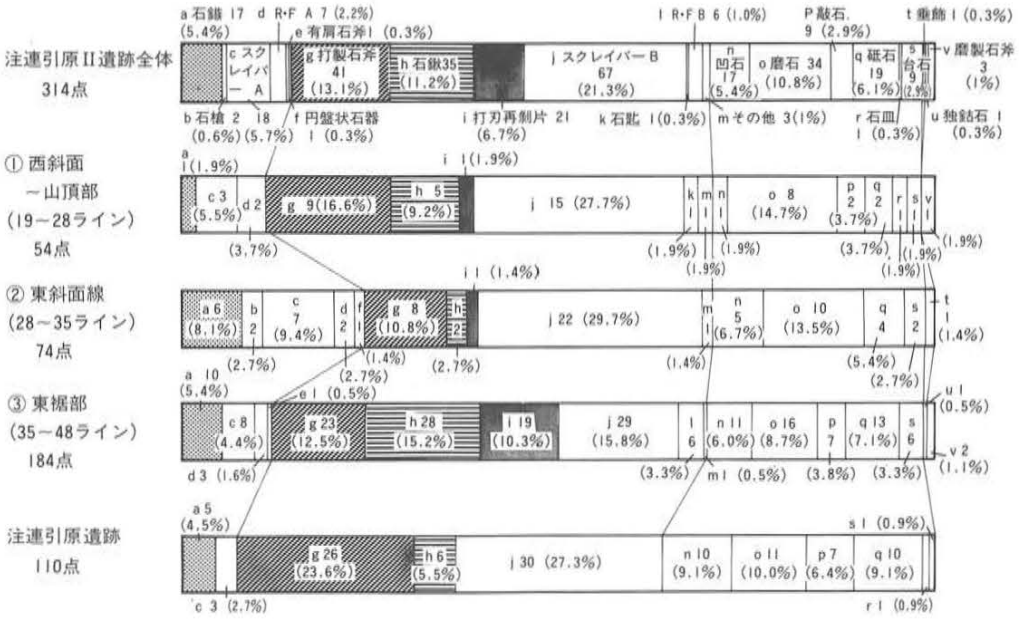
そして、縄文土器、弥生土器の分布状態と合わせてこれをみると、①は縄文時代中期後半と弥生時代の土器群が多い部分にあたる。また、②は縄文時代前期、中期の多い部分であり、③は弥生時代の圧倒的に多い部分である(一部縄文時代後期の集中部が存在する)。したがって、これらの区域から検出された石器は、それぞれの時期の所産であるものが多く含まれているとみられる。

これを石器組成としてみたのが第23図である。全体の石器組成ではB類が55.4％と過半数を占め、C類28.3％、A類14.7％、E類1.3％、D類0.3％であるが、①ではA類が11.1％と少なく、B類が59.2％と多い傾向がある。③もA類12.1％、B類58.1％と①とほぼ同じ傾向を示す。しかし、②ではA類が23.6％と比較的多く、B類が44.7％とやや低率となる。また、C類はどの部分でもほぼ同じ割合を示している。

さらに、細かく器種別にみると、①では石鏃、凹石が特に少なく、打製石斧、スクレイパーB類が多い傾向がある。また、②では石鏃、スクレイパーA類、B類が多く、石鍬が少ない傾向が認められる。そして、③では石鍬、打製石斧（石鍬）刃部再生剥片が多く、スクレイパーB類、砥石が多い傾向がある。こうした傾向は①、②、③の石器の属する時期が異なっていることによると考えられる。ただし、①～③の部分では地形条件も異なっていることから、「場」の機能差についても考慮する必要がある。しかし、こうした条件を差し引いても、縄文時代と弥生時代の石器組成の差が分布域の差として現れていると考えられる。

次に、種別毎の偏在性についてみると、A類は全体的に多く存在するが、②に多い。また、B類も全体的に多いが、剥片の量が多いのは②であり、③では石器(狭差)、石核の割合が高い。特に、石核はY－1号住居址周辺、M－1号濠に集中する傾向がある。D類は②に集中する。これらはほとんど剥片であり、石器は1点のみである。一方、C類、E類では偏在性はみられない。

また、石材別にみると、第25図、第26図のとおりである。A類では石材毎に局地的な集中部分



第23図　石器組成図

が存在する。黒曜石は③のY－1号住居址、チャートは①の西斜面上部、硬質頁岩は②のI－31グリッドを中心とする部分と、③のM－1号濠にそれぞれ集中している。また、D類については前述のとおり②に結晶片岩が集中する。しかし、それ以外の石材では、偏在性は認められない。

各器種別の分布状態は第27図、第28図のとおりである。また、形態毎に分布状態が異なるものも存在している。代表的な器種の分布状態は次のとおりである。

石鏃　②と③に多い。②ではすべて凹基無茎鏃である。しかし、③では平基鏃が6点と多く、有茎鏃が3点で、凹基無茎鏃は1点のみである。こうした差異は②と③の時期差によるものと考えられる。

スクレイパーA類　②に多く、I－33グリッド周辺に弱いまとまりをもつ。また、③では土橋付近にややまとまりをもつ。石材別では②は黒曜石、①、③ではチャート、硬質頁岩が多い。

打製石斧　全体的に多く存在する。①では調査区南部に多い傾向があり、短冊形が5点と多い。撥形、分銅形も各1点存在する。②では全体に散漫に分布し、短冊形が5点と多く、分銅形が2点存在する。③では石器集中部分の縁辺部に多く存在する傾向があり、Y－1号住居址周辺は少ない。また、形態についてみると、短冊形7点、分銅形1点であり、残り15点は欠損しており形態不明である。また、この中には石鍬の可能性のあるものが5点存在する。

石鍬　③に多数存在し、①にも存在するが、②にはほとんど存在しない。①ではH－24グリッド周辺に集中する。すべてI形態（大型円匙形）である。②では③との境界（35ライン）に2点存在する。欠損しており2点とも形態不明である。③ではY－1号住居址周辺、土壙B群、M－1号濠に集中している。形態別にみると、II形態（中型剣先形）2点、III形態（中型短冊形）6点、IV形態（小型撥形）3点、不明17点である。住居址ではII、III形態、土壙群ではIII形態が多い傾向がある。

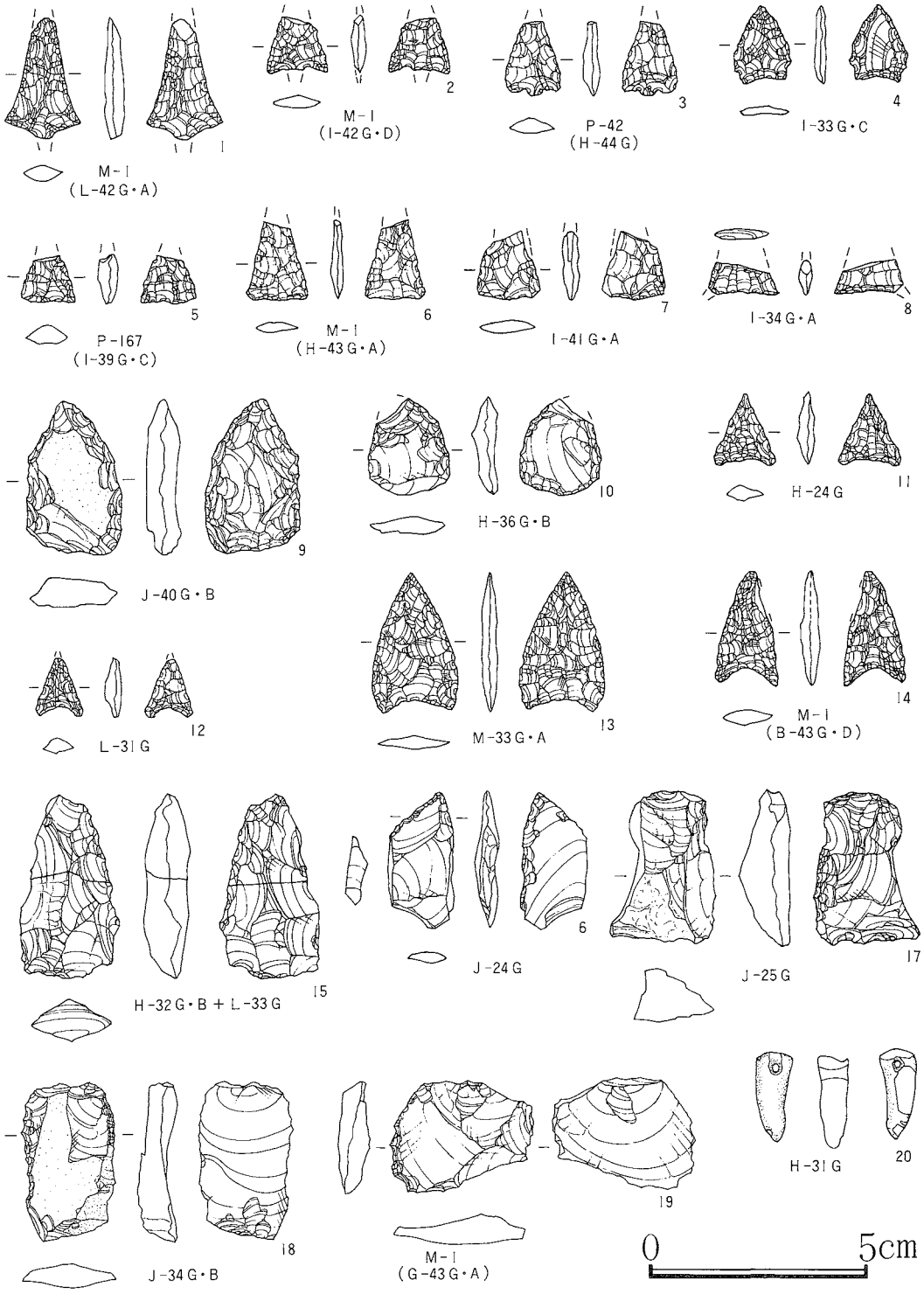
打製石斧（石鍬）刃部再生剝片　①、②には各1点ずつ存在するのみで、残りはすべて③に存在する。M－1号濠より7点、D－14より4点がまとまって検出されている。

スクレイパーB類　全体的に多く存在し、①、②では偏在性は認められない。しかし、③では土橋周辺からその東の部分に弱い集中が認められる。これはスクレイパーA類と同じ傾向である。また、形態別にみると、①、②では片面調整のものが卓越しているのに対し、③では両面調整のものが約半数を占めており、各区間で差違が存在する。

リタッチド・フレイクB類　③のみに存在する。しかもM－1号濠土橋南部に集中している。

凹石　②では調査区南部に多い傾向がある。また、③では土壙A群南側、土橋付近に弱いまとまりをもつ。

磨石　全体的に多い器種であり、①では全域に散漫に分布するが、②では調査区北側にまとまる。②では凹石と分布域を異にしている。③では土壙A群南部、Y－1号住居址、土橋北側から東側


M-I
(L-42G・A)
1
M-I
(I-42G・D)
2
P-42
(H-44G)
3
I-33G・C
4
P-167
(I-39G・C)
5
M-I
(H-43G・A)
6
I-41G・A
7
I-34G・A
8
J-40G・B
9
H-36G・B
10
H-24G
11
L-31G
12
M-33G・A
13
M-I
(B-43G・D)
14
H-32G・B＋L-33G
15
J-24G
16
J-25G
17
J-34G・B
18
M-I
(G-43G・A)
19
H-31G
20
0
5cm

第29図　石器実測図(1)

にかけての部分にまとまる傾向がある。③では凹石と分布域が重なっている。

敲石　①と③のみに存在し、②にはない。③ではＹ－１号住居址、Ｍ－１号濠にまとまっている。

砥石　③に多く存在する。②では③との境界であるＨ－34グリッド周辺にまとまる。③ではＹ－１号住居址付近に集中する。

台石　③に偏在する。特にＭ－１号濠に集中している。

(3)　石　器

ａ、Ａ類石器（第29図、第32図42）

石鏃（１～14）　全部で17点検出されている。形態は有茎（１～３）、平基（５～10）、凹基無茎（４、11～14）に大きく分けられる。有茎鏃には凸基（１）と凹基（２、３）がある。３は茎部が痕跡的に存在するものであり、茎部の本来的な機能が失われたものと推定される。また、平基鏃の中には９、10のように未成品の可能性のある粗雑なものが存在する。凹基無茎鏃のうち４は両側縁に突起を有するものであり、五角形鏃、飛行機鏃との関連性がうかがわれる。

石材は有茎鏃、平基鏃では黒曜石（２、５）、チャート（３、８～10）、硬質頁岩（６）、頁岩（７）と多様であるのに対し、凹基無茎鏃は全て黒曜石である。このように、有茎鏃、平基鏃と凹基無茎鏃は分布の上からだけでなく、石材も異なっており、前者は弥生時代、後者は縄文時代(前期)のものが多いと判断される。

石槍（15）　２点が接合したものであり、先端部はＨ－32、基部はＬ－33グリッドより検出された。調整は粗く、先端はやや丸味を帯びる。石材はチャートである。

スクレイパーＡ類（16～19）　全部で18点検出されている。石材ではチャートが８点と多く（16、17）、黒曜石５点（18）、硬質頁岩４（19）、流紋岩１点である。また、調整についてみると、片面調整10点（17～19）、両面調整８点（16）であり、石材との相関関係は認められない。

リタッチド・フレイクＡ類　全部で７点検出されている。微細な剥離が縁辺部に観察される剥片である。石材は黒曜石３点、チャート２点、硬質頁岩１点である。

有肩石斧（第32図42）　大形の剥片を素材とし、基部を中心に入念に調整することにより、凸字形に整形している。刃部は幅広く、本来は直刃であったとみられるが、一部欠損している。欠損面には使用によるとみられる剥離痕が観察される。しかし、使用による磨耗痕は全く認められない。石材は硬質頁岩である。使用痕からみて、比較的硬い対象物に対して用いられたものと推定される。類似したものは長野県権現堂前（矢口他1971）などに存在し、弥生時代の石器として注意されているが(神村1985等)、時期が異なることや、大きさ、石材から一概に同一の器種と言えず、検討を要する石器である。

円盤状石器　円盤状に調整された石核石器である。１点検出されており、硬質頁岩製である。

b、B類石器

石鍬（第30図、第31図28～32）　石鍬としたものは打製石斧の範疇に含まれるものであるが、これまで弥生時代の遺跡よりしばしば検出されている大型の打製石斧について、縄文時代の「打製石斧」とは区別して、「石鍬」と呼称することにした。ここで石鍬としたものは、比較的大形で幅広で、分銅形以外の形態を呈しているものであり、次の4形態に分類される。

Ⅰ形態　大型で刃部が円匙形を呈するもの（21～24）。

Ⅱ形態　Ⅰ形態より小さく、中型で刃部が剣先形を呈するもの（25～27）。

Ⅲ形態　Ⅱ形態よりひと回り小さく、中型で幅広の短冊形を呈するもの(28～31)。やや刃部が広くなる傾向がある。

Ⅳ形態　Ⅲ形態よりさらに小さく、小型で撥形を呈するもの（32）。

ここでの大型、中型、小型は石鍬の中での相対的なものであり、一般的な打製石斧と比較した場合は、すべて〈比較的大型〉の部類のものである。以下、各形態の特徴を述べることにする。

Ⅰ形態は5点検出されている。すべて粗面な安山岩を用いている。また、磨耗痕はほとんど観察されない。この形態は山頂部に集中する、剝片剝離に適さない石材である、使用痕が認められないといったことから、実用品的色彩が薄く、非実用品であったことが推定される。

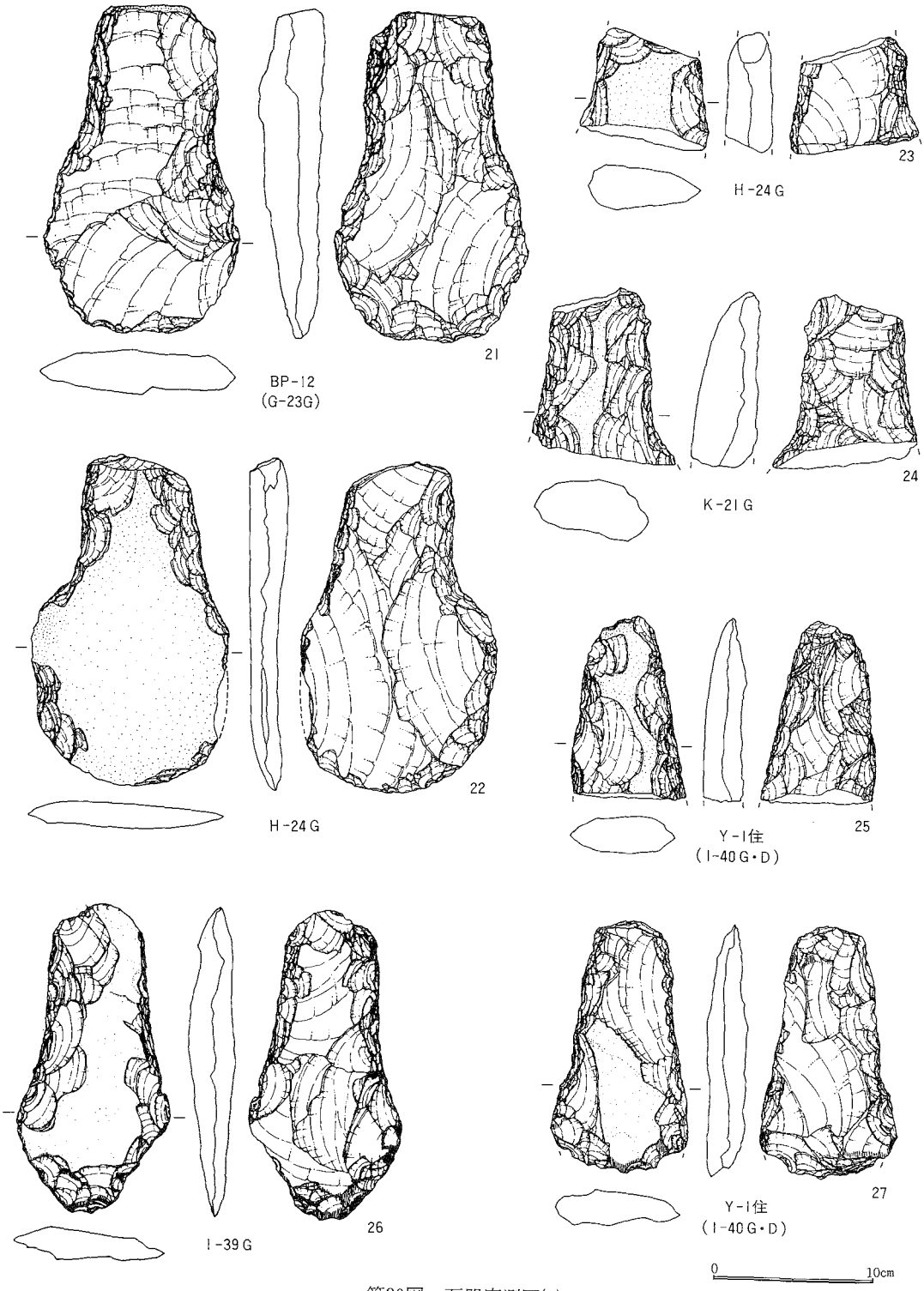
Ⅱ形態は3点出土している。基部がⅢ形態に比べ丸味を帯びている。刃部に顕著な磨耗痕の認められているもの（27）や、刃部再生により形状の変化したもの（28）が存在する。すべて頁岩製である。

Ⅲ形態は4点出土している。Ⅱ形態より基部が角張っている。刃部にはすべて磨耗痕が観察される。石材は頁岩（29～31）と安山岩（28）である。このほか、Ⅱ形態かⅢ形態か識別することの困難な欠損品が20点存在するが、これらの多くはⅢ形態であると推定され、石鍬の中で最も使用頻度の高い形態と考えられる。

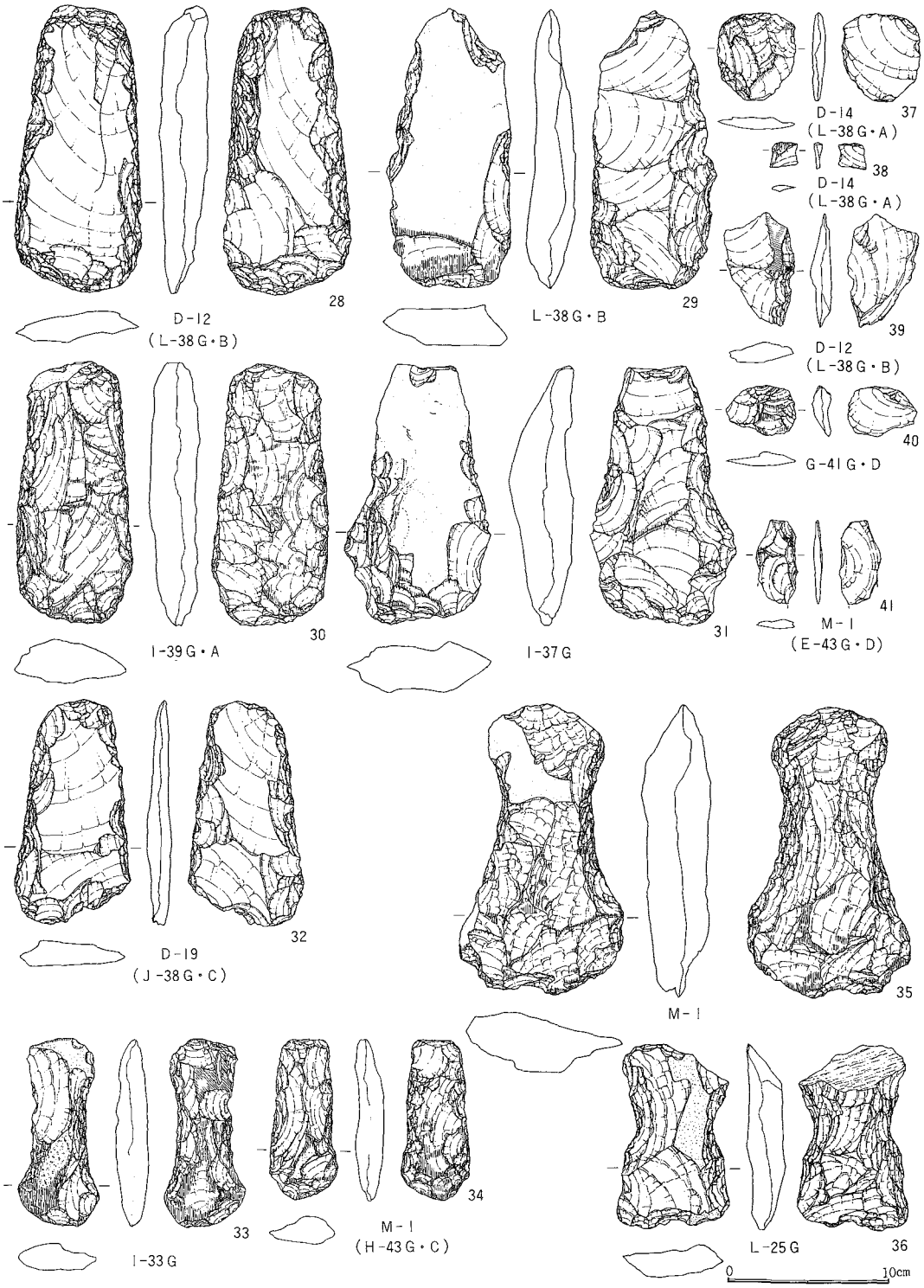
Ⅳ形態は3点出土している。この形態は他の形態に比べて画一性に欠けており、個体差がある。また、刃部には磨耗痕は認められない。石材は頁岩2点、安山岩1点（29）である。

このように、石鍬はⅣ形態を除けば形態がはっきり分化しており、機能、用途による使い分けが行われていたことが推定される。また、石鍬を製作した形跡は遺跡内では認められず、遺跡外で製作されたものが移入されたとみられる。そして、遺跡内においては刃部再生程度の作業が行われていたものと考えられる。

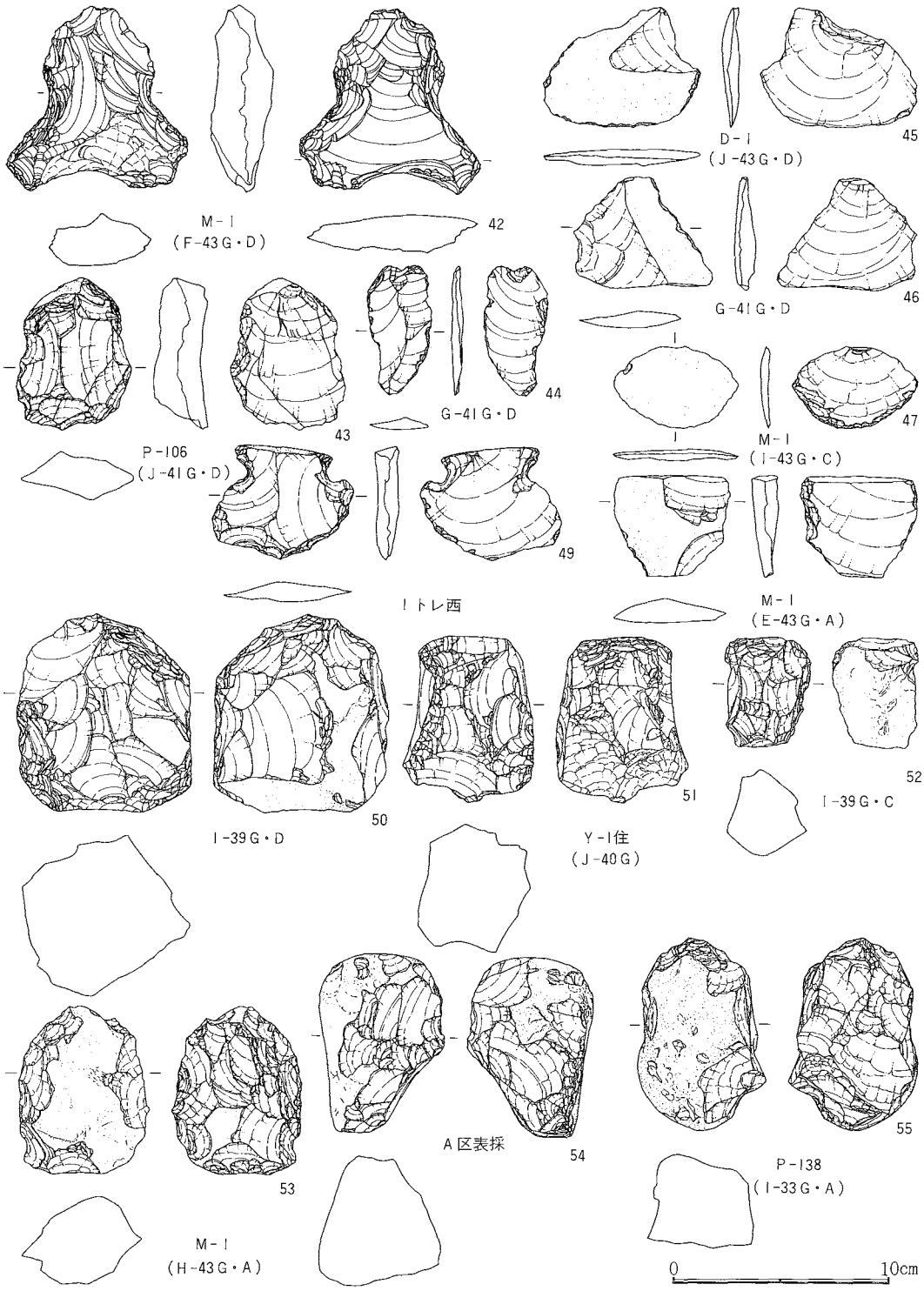
打製石斧（第31図33～36）　全部で41点出土している。形態別にみると、撥形1点、短冊形16点（33、34）、分銅形5点（35、36）、不明19点である。このうち不明としたものの多くは短冊形と推定され、短冊形が圧倒的に多い。石材では頁岩が33点と多く(33～36)、安山岩6点、黒色安山岩、硬砂岩各1点である。これらの打製石斧の中には弥生時代の石鍬の可能性のあるものが5点


21
BP-12
(G-23G)
23
H-24G
24
K-21G
22
H-24G
25
Y-1住
(I-40G・D)
26
I-39G
27
Y-1住
(I-40G・D)
0
10cm

第30図　石器実測図(2)


D-12
(L-38G・B)
28
L-38G・B
29
D-14
(L-38G・A)
37
38
D-14
(L-38G・A)
39
D-12
(L-38G・B)
40
G-41G・D
41
M-1
(E-43G・D)
I-39G・A
30
I-37G
31
D-19
(J-38G・C)
32
M-1
35
I-33G
33
M-1
(H-43G・C)
34
L-25G
36
0
10cm

第31図　石器実測図(3)


M-I
(F-43G・D)
42
D-I
(J-43G・D)
45
G-41G・D
46
P-106
(J-41G・D)
43
G-41G・D
44
M-I
(I-43G・C)
47
I トレ西
49
M-I
(E-43G・A)
I-39G・D
50
Y-I住
(J-40G)
51
I-39G・C
52
A区表採
54
P-138
(I-33G・A)
55
53
M-I
(H-43G・A)
0
10cm

第32図　石器実測図(4)

含まれているが、形態、分布からみて縄文時代のものが多く、撥形は前期、短冊形は前期～中期、分銅形は後期のものである可能性が高い。

打製石斧（石鍬）刃部再生剝片（第31図28～41）　剝片の表面に使用による磨耗痕が観察されるもので、21点出土している。石材別にみると、頁岩19点、安山岩２点である。また、中には37のように調整が施され、スクレイパーＢ類となっているもの（37）もある。石鍬に刃部再生が施されているものが多く、分布域も③に集中することからこれらの刃部再生剝片は弥生時代のものであると判断される。

スクレイパーＢ類（第31図37、第32図43～48）　全部で67点出土している。形態別にみると大きく片面調整（43、45～47）と両面（37、48）に分けられる。片面調整のものは掻器（43）と削器に細分することができ、前者は５点、後者は40点である。また、両面調整のものはすべて削器である。そして、削器の刃部形状をみると片面調整、両面調整とも凸刃(曲刃)、直刃が多く、抉入部をもつものや鋸歯状のものは片面調整のものに集中する。刃部は厚く急角度の調整が施されるものと、薄く縁辺部に浅い調整が施されるものがあるが、①、②では前者が多いのに対し、③では後者が多い。また、石材別にみると、頁岩56点、黒色安山岩９点、安山岩２点であり、黒色安山岩は片面調整のものに多用されている。

スクレイパーＢ類では片面調整で厚刃のものは縄文時代（前期）に属するものが多く、両面調整で薄刃のものは弥生時代のものが多い。そして、片面調整であっても薄刃で縁辺部に浅い調整が施されるものは分布上からみて、弥生時代に属するものが多いと推定される。

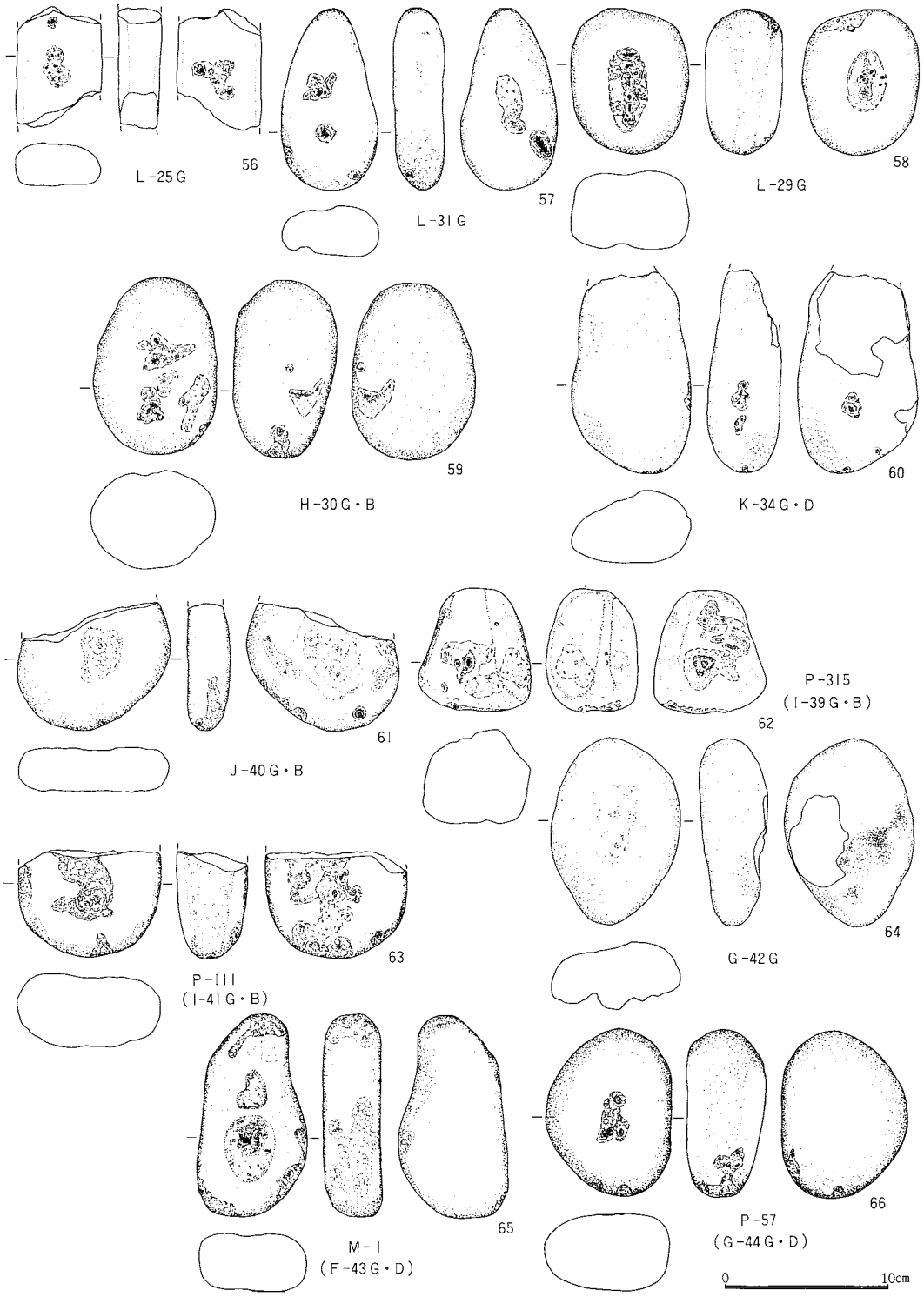
石匙（第32図49）　１点のみ検出されている。基本的には片面調整により刃部を作出している。頁岩製である。

リタッチド・フレイクＢ類　剝片の縁辺に微細な剝離が認められるものである。６点出土しており、５点が頁岩、１点が黒色安山岩である。弥生時代のものが多いとみられる。

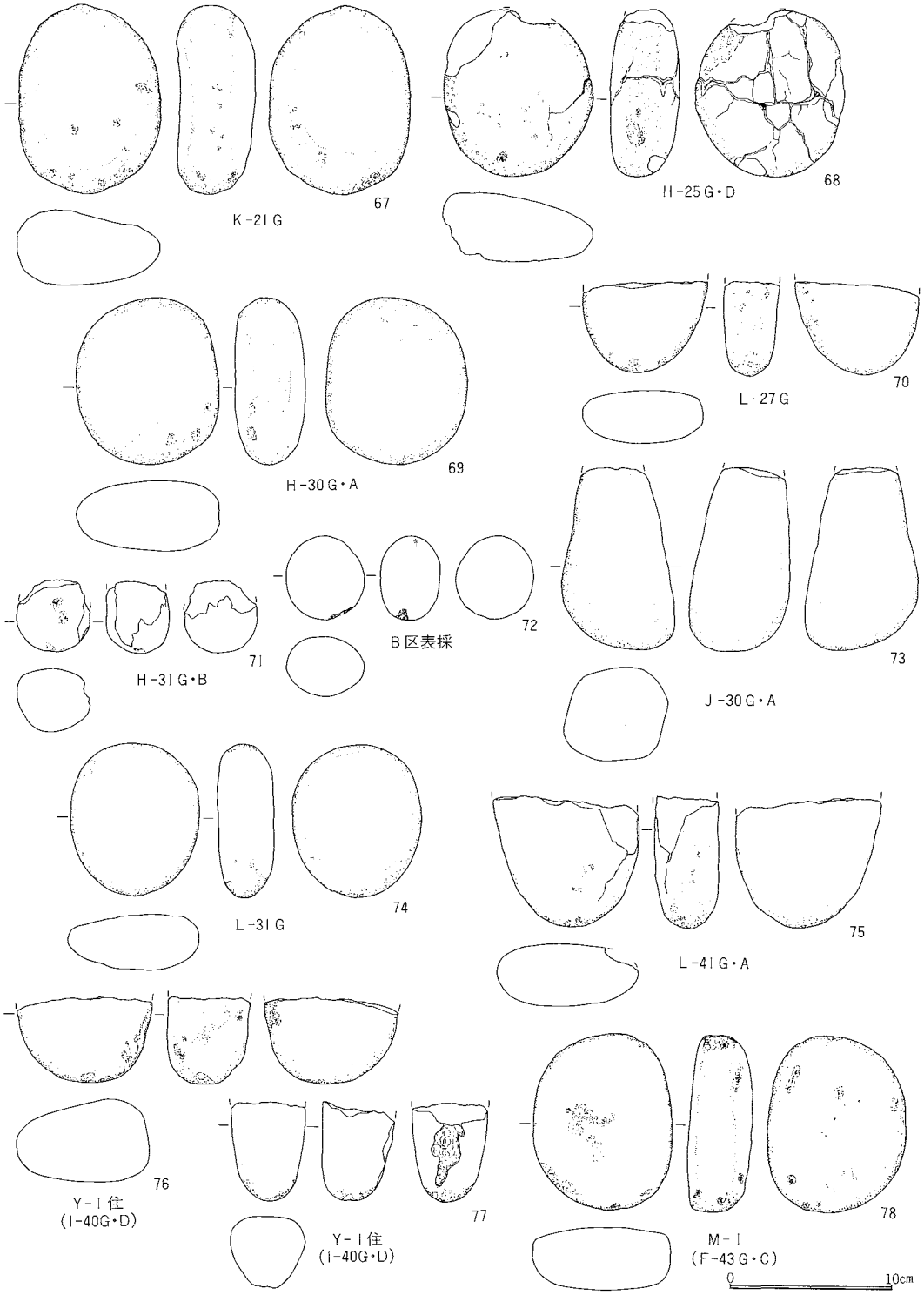
その他の打製石器　不定形な石器であり、分類の困難なものである。３点出土している。

石核Ｂ類（第32図50～55）　全部で33点出土している。50～55のように拳状を呈するものが多い。これらの石核は求心状剝離によるもので、すべてのものが原礫面を残しており、剝片剝離作業があまり進行していないうちに剝離の限界点に達している。したがって、作出される剝片は長幅比のほぼ等しい幅広剝片であり、表面に原礫面を大きく残すものが多い。そして、こうした剝片はスクレイパーＢ類、リタッチド・フレイクＢ類の素材となっている。また、剝離の限界点に到達するのが早いため、１個の石核から作出される剝片量は少なく、作業効率は非常に悪い。

このほかに偏平なもの（２点）、円盤状のもの（６点）も存在するが量的には少ない。また、石材別では頁岩17点、黒色安山岩15点、安山岩１点であり、拳状を呈するものは黒色安山岩に多い。これはスクレイパーＢ類、リタッチド・フレイクＢ類とは傾向を異にしており、黒色安山岩の石


L-25G
56
L-31G
57
L-29G
58
H-30G・B
59
K-34G・D
60
J-40G・B
61
P-315
(I-39G・B)
62
P-111
(I-41G・B)
63
G-42G
64
M-I
(F-43G・D)
65
P-57
(G-44G・D)
66
0
10cm

第33図　石器実測図(5)


K-21G
67
H-25G・D
68
H-30G・A
69
L-27G
70
H-31G・B
71
B区表採
72
J-30G・A
73
L-31G
74
L-41G・A
75
Y-1住
(I-40G・D)
76
Y-1住
(I-40G・D)
77
M-1
(F-43G・C)
78
0
10cm

第34図　石器実測図(6)

核から作出された剝片はそのまま利器として用いられているものが多いと推定される。その傍証として、スクレイパーB類では縁辺に浅い調整を施すものが多いことや、微細な剝離のあるリタッチド・フレイクB類の存在をあげることができる。また、分布上からも石核B類は③に集中することから、こうした石器製作システムは後述するように弥生時代の所産であると考えられる。

c、C類石器

凹石（第33図）　凹石、磨石の区分については、以前にも述べたとおりであり（大工原　1982、1987a）、凹の有無を優先し、凹を有するものを凹石とした。全部で17点出土している。凹石は凹の形状から、明確な凹を有するもの（A種）と痕跡程度にわずかに凹を有するもの（B種）に分けることができる。A種は11点であり(56～59、62、63、65、66)、このうち4点が欠損している。一方、B種は6点あり(60、61、64)、4点が欠損しており、B種の方が欠損率が高い。また、磨面の有無についてみると、A種では9点にあるが、B種では3点にあるのみである。このように両者には幾つかの差異が認められる。そして、分布状態をみるとB種は③に4点が存在し、①、②では少ないことから、B種は弥生時代に多いものと考えられる。しかし、A種は全体に存在しており、時期を限定することはできない。石材はすべて安山岩系である。

磨石（第34図）　磨石は34点出土している。このうち17点が欠損している。また、被熱しているものは3点存在する(68、71)。形態は円、楕円形のものが大部分であるが、中には小型のもの(71、72）も存在する。73は特殊磨石であり、縄文時代前期のものとみられる。しかし、それ以外のものについては、形態から時期を決定することはできない。すべて安山岩系である。

敲石（第35図79～84）　敲石は9点出土している。すべて安山岩系である。形態は様々であり、規格性は認められない。9点中8点が欠損している。石材はすべて安山岩である。分布状態からみると、弥生時代のものと考えられる。

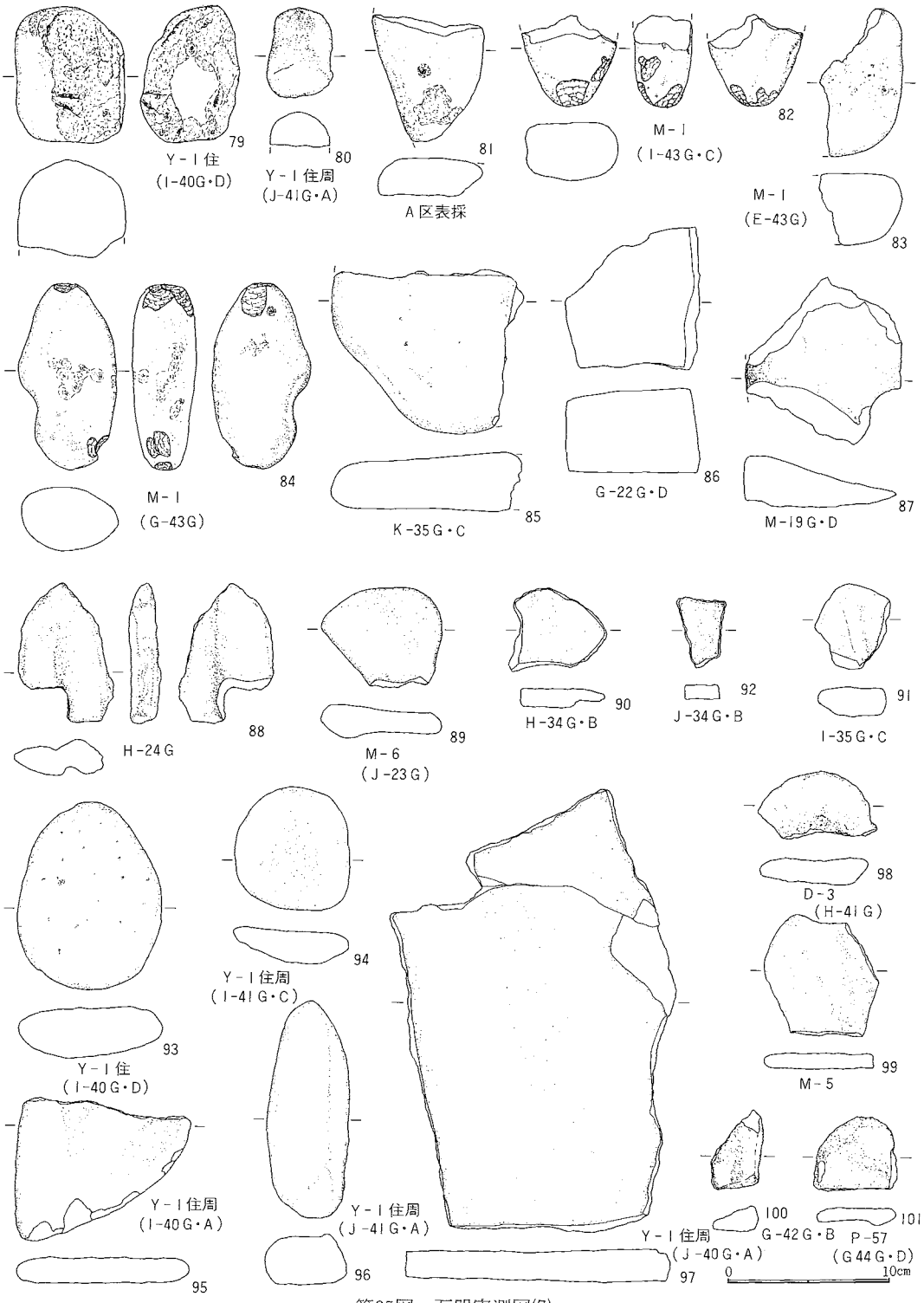
台石（第35図85、86）　台石は9点出土している。すべて安山岩である。このうち5点は欠損している。台石の中には凹が少数存在するものもある。多くは弥生時代とみられる。

石皿（第35図87）　1点のみ出土している。小破片であり、結晶片岩製である。

砥石（第35図85～101）　全部で19点出土している。荒砥が15点（88～91、93～96、98～101)、仕上砥が4点（92、97）である。荒砥はすべて牛伏砂岩である。有溝のもの（88）も存在するが、大部分は平坦面を有するものである。仕上砥は安山岩であり、すべて平坦面を有するものである。砥石は分布状態から大部分は弥生時代のものと考えられる。

d、D類石器

垂飾（第29図20）　1点出土している。犬歯状を呈し、基部に穿孔されている。滑石製である。

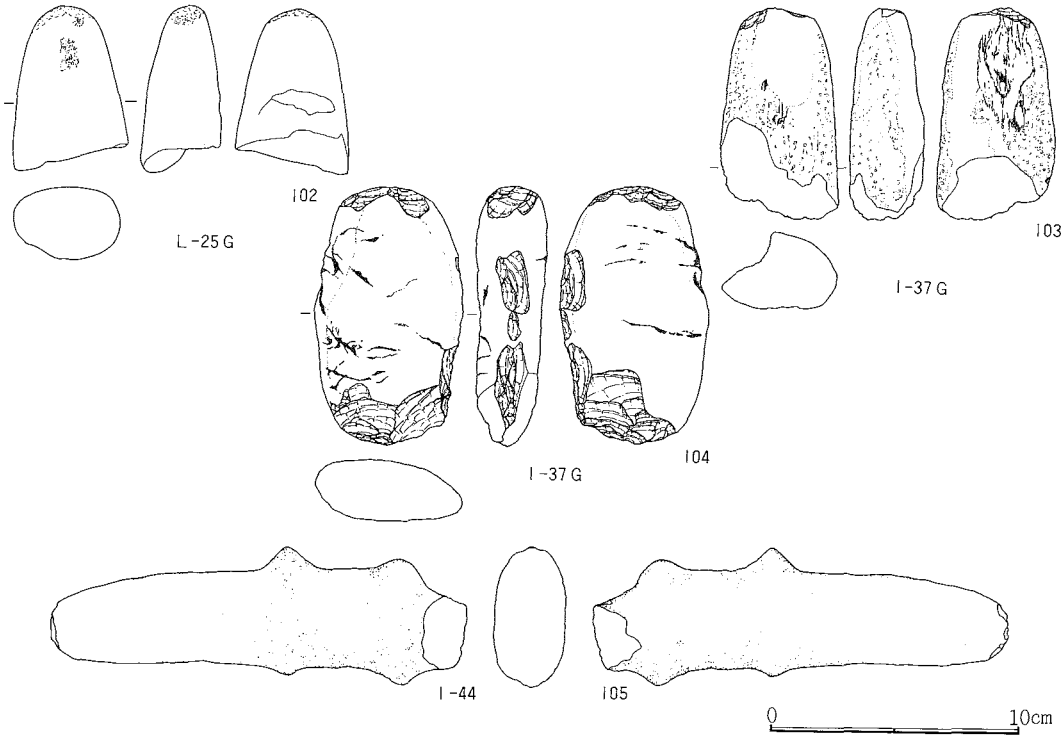

79
Y－1住
(I-40G・D)
80
Y－1住周
(J-41G・A)
81
A区表採
M－1
(I-43G・C)
82
M－1
(E-43G)
83
M－1
(G-43G)
84
K-35G・C
85
G-22G・D
86
M-19G・D
87
H-24G
88
M－6
(J-23G)
89
H-34G・B
90
J-34G・B
92
I-35G・C
91
93
Y－1住
(I-40G・D)
94
Y－1住周
(I-41G・C)
Y－1住周
(I-40G・A)
95
Y－1住周
(J-41G・A)
96
Y－1住周
(J-40G・A)
97
98
D-3
(H-41G)
99
M－5
100
G-42G・B
101
P-57
(G44G・D)
0
10cm

第35図　石器実測図(7)

e、E類石器

磨製石斧（第36図102～104）　3点出土している。すべて欠損している。形態は乳棒状を呈するもの（102、103）と、礫の先端に刃部を作出したもの（104）が存在する。石材は輝緑岩である。

独鈷石（第36図105）　1点出土している。一方の刃部を欠損している。石材は輝緑岩である。単独で出土しているが、弥生時代のものであると考えられる。



第36図　石器実測図(8)

7、平安時代の遺構と遺物

(1)　遺構（第5図）

平安時代の遺構としては溝とピットが検出された。溝は11条検出された。これらの溝は調査区の南西から北東にかけて、ほぼ平行するように走っている。幅0.5～2m、深さ10～30cm程度であり、As－Bはこの溝の覆土の直上を覆う。覆土はすべて同一であり、Ⅲ層に類似するが、非常にかたくしまった部分が存在する。また、弥生時代のM－1号濠は平安時代には完全に埋没しておらず、溝として利用されていたとみられる。これらの溝の性格については不明である。そして、ピットは弥生時代のものと識別が困難なものが多いが、山頂部と東斜面下部にややまとまりをもつ。

(2) 遺　物

a、遺物分布状態（第37図）

土師器坏は山頂部南側に粉々に砕かれた状態でブロック状に検出された。非常に細かく砕かれていたため復元することができない。また、K—34グリッドにおいても土師器坏が粉々に砕かれた状態で検出された。これらの坏の個体数は数点であるとみられる。

須恵器では、M—1号濠覆土上層より墨書のある埦（1）が粉々に砕かれた状態で検出された。また、H—34、I—34グリッド周辺では横瓶（2）が粉々に砕かれた状態で検出された。そして、鉄製刀子（3）はM—1号濠覆土上層より検出されている。

こうした遺物の出土状態は特異なものであり、日常的な生活の場ではなく、祭祀等特殊な行為が行われていた場所であった可能性が高い。（註1）

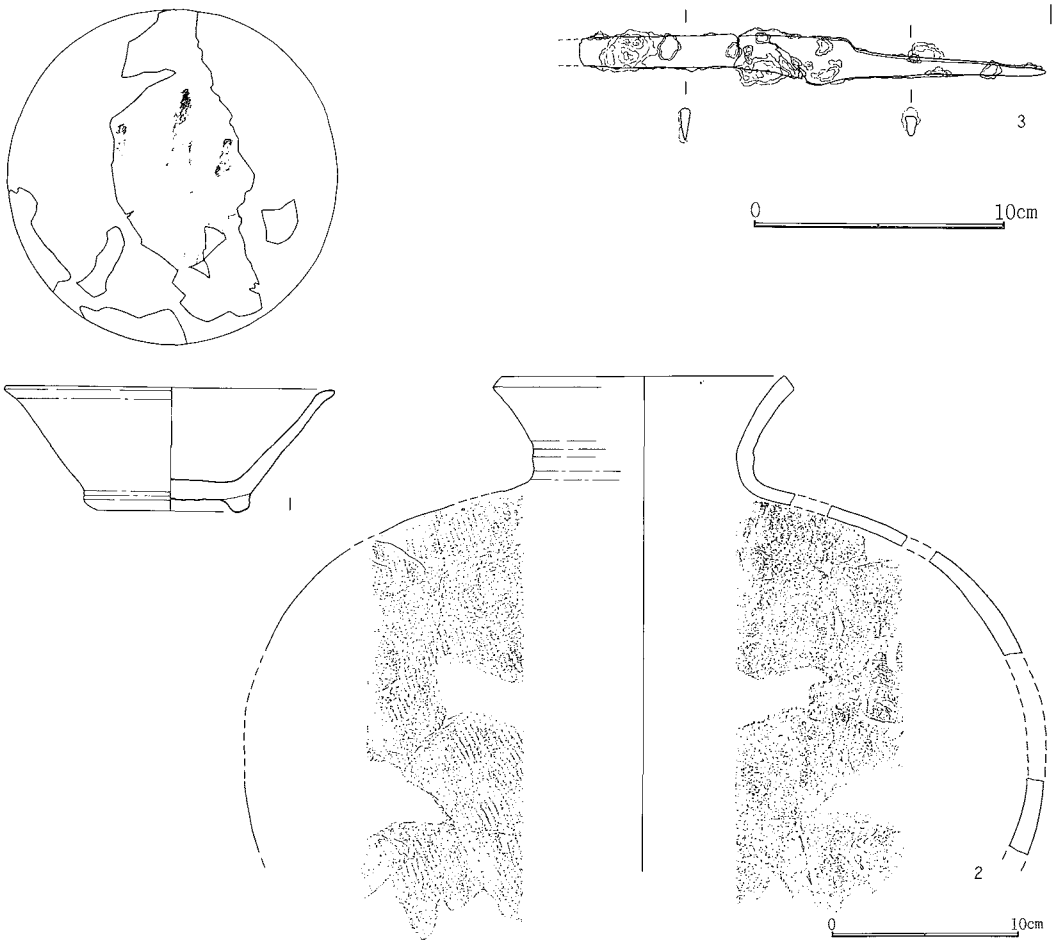
b、遺物（第38図）

検出された遺物の特徴は第3表のとおりである。

No.	器　種	法　量(cm)	調　整　技　法	胎土・焼成	色　調	残　存	備　考
1	須恵器 埦	器高　5.0 口径　13.1 底径　6.6	内外面共回転ヨコナデ。 底面に高台を付した後回転ヨコナデ。	細砂粒を少量含む。土師質。	灰褐色。外面に黒斑。	⅓	内面に墨書あり。文字不明。
2	須恵器 横　瓶	器高(31.0) 口径 15.0 胴部長径(42.0) 胴部短径(28.0)	外面：口辺部回転ヨコナデ。胴部タタキを半スリケシしている。 内面：口辺部回転ヨコナデ。胴部タタキを半スリケシしている。	細砂粒を少量含む。焼成は良好。	灰褐色。	⅓	
3	刀　子	現存長（18.5）	刃部　長（10.8）　幅1.9　厚0.4 柄部　長　7.7　幅1.2　厚0.5				刃部先端は新しい欠損。

第3表　平安時代遺物観察表

註1　注連引原の地名の語源について、都丸十九一氏は信仰関係の地名で、シメギ（標木）との関連性について言及している（都丸1987）。この中で中野谷村と鷲宮村の村界の「厄神除けなどの八丁じめ」であり、「外敵の侵入を防ぐための塞神の祭場だった」としている。



第38図　平安時代の遺跡

Ⅶ　成果と問題点

1、注連引原遺跡、同II遺跡出土の弥生土器について

本遺跡の2次にわたる調査で出土した土器群は、関東地方における弥生時代初期の生活址における土器組成を反映するものとして、良好な資料となるものである。当地域の初期弥生土器は、条痕文系・大洞系とこれらの影響を受け在地的に生成されたものを主体とし、希に畿内系を参画させるものとして理解されている。本遺跡の土器群もこれを基本とするが、縄文時代晩期終末の浮線文系の要素も含んでおり、従来知られている墓址を中心とした資料とは異質な部分が認められる。既存の編年関係からいけば、先行する一群の存在を考えなくてはならない。

注連引原遺跡と同II遺跡は、中央にある小起伏を挟んで、およそ50mの距離に近接するものである。両遺跡の土器群は、基本的に壺・甕・深鉢・浅鉢・台付鉢から構成され、近似の組成を持つが、各器種の中において、やや様相の相違を有している。これについて瞥見し、若干の検討を行っておきたい。

本遺跡及び当地域の初期弥生土器の主たる器種は、上記の5器種であるが、壺はかなりの部分が条痕文系・台付鉢は大洞系の影響下にある。当地域の独自性について考究するなら、甕の検討をまず行わなくてはならない。

〈甕〉

注連引原遺跡および同II遺跡検出の甕には、次のような要素が認められる。

形態　A　直立気味で長く、僅かに外反する口縁を有し、若干の段をもって胴部に至るものを基本形態とする。B　口縁は短く外傾し、くびれがやや強く、胴部上半がやや張るものが基本形態。

文様　1個体の文様構成が判明するものはほとんど無いため、主文様を持つ口縁端部と胴上半部文様帯について別個に分類していく。

口縁文様I類　口縁端部に浮線文手法による文様を持つもの。口縁文様II類　口縁端部に数条の箆描沈線文を基調とするもの。波状口縁の場合、最上段の沈線は口縁に沿って波状を呈し、頂点に刻みを施す。口縁端部文様帯～胴部の間は無文帯となる。口縁文様III類　口縁端部に数条の箆描沈線を施し、交互に刻みを入れて工字文とするもの。口縁文様IV類　口縁端部に幾何学的文様を施すもの。波状口縁の場合はII類と同一の端部処理を行う。口縁文様V類　口縁端部を僅かに肥厚させ、縄文を主とする文様を施すもの。波状口縁が多い。胴部との間は無文帯となる。口縁文様VI類　無文で、丁寧なナデ調整が行われる。口縁は波状である。口縁文様VII類　口縁端部に1ないし2条の箆描沈線文を施すもの。波状口縁は希。口縁文様VIII類　口縁端部が無文のもの。

波状口縁は希。口縁文様IX類　口縁端部に縄文帯を持つもの。

胴部文様Ⅰ類　浮線文的な手法を用いるもの。弧状モチーフ、工字状のモチーフが見られる。胴部文様II類　沈線による横位綾杉文を行うもの。胴部文様III類　平行沈線文を基調とし、刻みを付すことにより工字状とするもの。胴部文様IV類　縦位の条痕調整のみを行うもの。胴部文様V類　縄文。胴部文様VI類　平行沈線文を持つもの。胴部文様VII類　沈線による三角形を基調とする幾何学文を展開するものが基本形態。

これらの文様諸要素を、注連引原遺跡と同II遺跡の出現頻度で見ると、第4表のようになる。

	形態A	形態B	口縁文様									胴部文様						
			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	I	II	III	IV	V	VI	VII
注連引原遺跡	○	○	○	○	○	○	○	◎	○			○	○	○	○	○	○	○
注連引原II遺跡		◎							◎	○	○		○			○	○	◎

◎は出現頻度の高いもの

第4表　文様諸要素出現頻度表

このように注連引原遺跡と同II遺跡間には、様相の差異があり、きわめて近接する遺跡だけに、この差異を時間差に求めるのが妥当といえよう。注連引原II遺跡に多い甕形態B＋胴部文様VII類は、当地域における初期弥生土器に通有の「有文甕」である。

ところが、注連引原遺跡で顕著な甕形態Aおよびほとんどの文様類型は、当地の初期弥生土器として認識されている岩櫃山式前後の時期の遺跡には認められない。また極めて客体的ながら浮線文に類した文要素が存在することから、これらは注連引原II遺跡とこれに並行する段階に先行する一群とみるのが妥当であろう。群馬県西部地域は縄文晩期終末期遺跡の発見が希薄な地域であるが、近隣して浮線文系土器群（氷Ⅰ式・千網式）が発達している。注連引原遺跡の土器群は、これら浮線文系土器群と既知の初期弥生土器の時間幅を埋める資料の可能性がある。特に本地域の初期弥生土器が、東海地方の条痕文系土器群の系統を、組成内に大きく取り入れて発展することを考慮すれば、氷Ⅰ式との比較が必要条件となろう。(註1)

氷Ⅰ式における甕の形態は、大雑把に大別すれば次の2形態になる。形態a　口縁が長く延び、やや外反する。くびれは弱く、胴に段を有する。形態b　口縁は短く、くびれはやや強く、胴部上半が張る。量関係を見ればaが主体でbは少ない。さらに、文様帯構成をみると、Ⅰ　口縁端文様帯および胴上半文様帯をもち、その間は無文帯となる。II　口縁端文様帯を有し、頸部は無文帯、胴部は縦位の細密条痕整形。III　口唇部（波状口縁）装飾のみで以下無文。
といった類型が、形態a・bと相互に組み合わされる。

さらに文様要素について瞥見すると、口唇文様1　いわゆる口外帯をもつもの。口唇文様2　波

状口縁を呈するもの。口唇文様３　平口縁のもの。口縁文様１　浮線手法による幾何学文を付すもの。口縁文様２　浮線手法による平行線を付すもの。口縁文様３　無文のもの。胴部文様１　浮線手法による幾何学文を付すもの。胴部文様２　浮線手法による平行線を付すもの。胴部文様３　沈線手法による横綾杉文を施すもの。胴部文様４　無文で以下縦位細密条痕等を施すもの、が見られる。

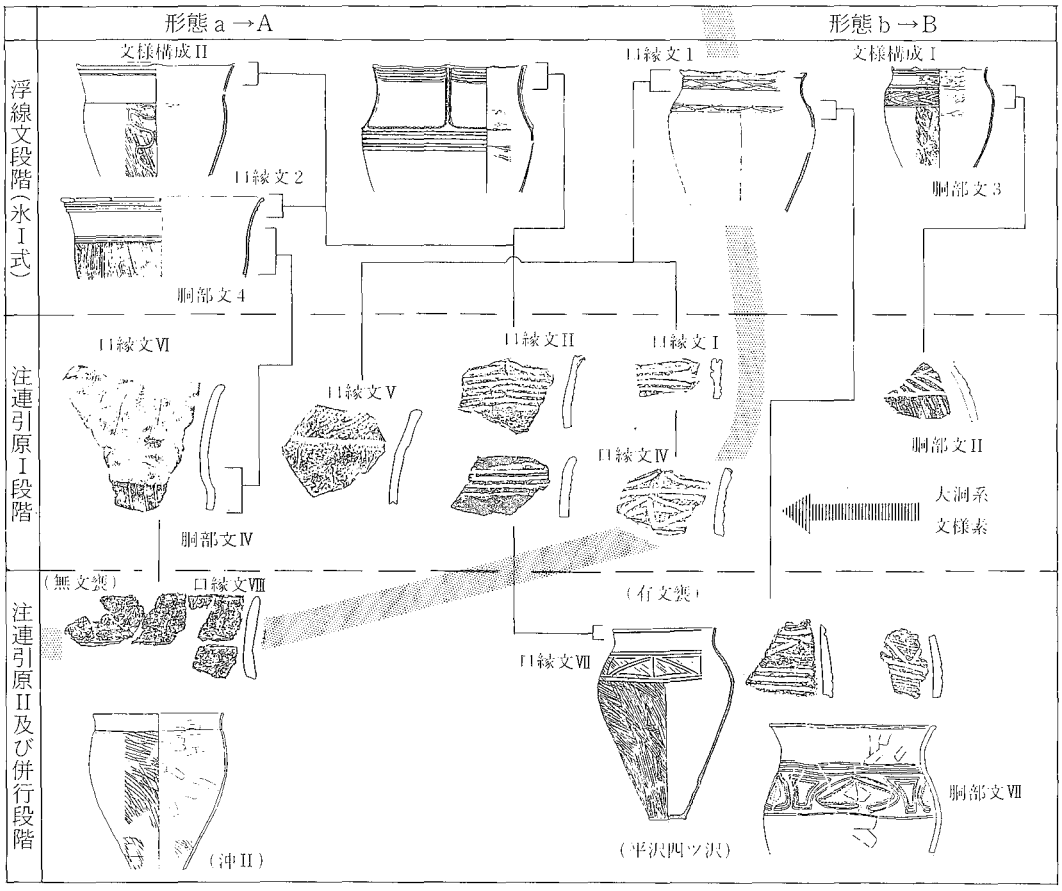
氷Ⅰ式の甕形態ａは、注連引原遺跡の甕形態Ａに近似し、形態ｂは形態Ｂとして当地の初期弥生土器に受け継がれていくものである。また、文様帯構成Ⅰの意識は、「有文甕」に引き継がれて定形化し、一方、文様構成Ⅱは口縁端文様を省略しながら、埼玉県如来堂Ｃ遺跡・群馬県南大塚遺跡に多く見られる口縁無文・胴部条痕整形の「無文甕」に繋がると思われ、岩櫃山式土器以後消失していくものである。

このように、器形および文様帯構成について見ると、当地の初期弥生土器甕は、浮線文系の氷Ⅰ式の系譜で理解される部分が多い。では、注連引原遺跡の資料の文様要素と氷式の文様要素について、見てゆこう。

縄文晩期終末期に盛行した浮線網状文は、直線を基調としたものから、数条の弧線が集散するものへ移り、やがて沈線化する時間的変化が指摘されている（中村1982）。こうした簡略化・沈線化に着目すれば、氷Ⅰ式口縁文様１→注連引原遺跡口縁文様Ⅰ→Ⅲ・Ⅳ類への型式学的変化が想定される。同様に、氷Ⅰ式口縁文様２→注連引原遺跡口縁文様Ⅱ類→同Ⅶ類の変化の流れも予想される。また胴部文様では、氷Ⅰ式胴部文様１→注連引原遺跡胴部文様Ⅰ類、氷Ⅰ式胴部文様２→注連引原遺跡胴部文様Ⅲ類→同Ⅶ類、氷Ⅰ式胴部文様３類→注連引原遺跡胴部文様Ⅱ類という変化も想定される（第39図）。

以上のように、注連引原遺跡の甕の諸要素は、縄文晩期終末の浮線文土器群である氷Ⅰ式甕からの型式変化をもって説明することが可能であり、初期弥生土器を生成させる過程に位置付けられるものといえる。そして、注連引原Ⅱ遺跡や並行する上久保・岩櫃山段階では、浮線文土器群甕の器形や文様帯構成をベースとし、主文様として大洞系のモチーフと沈線手法を取り入れ、特徴的な「有文甕」を生成したものと理解される。

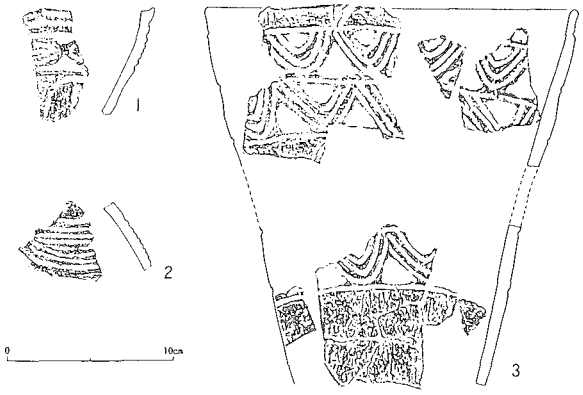
その他の浮線文手法を止める例を注連引原遺跡について見ておこう（第40図）。１の浅鉢は痕跡的に口外帯を残し、退化しているが典型に近い浮線文モチーフを残している。２は弧状の浮線文モチーフが沈線化したものである。３の深鉢も２と同様のモチーフがより三角形を指向して連続するものであるが、モチーフの中あるいは連続する間が刻陰的に処理されるのは、浮線文手法の遺存である。これらを見るかぎり、浮線文最末期あるいはその直後と言える様相であり、甕の在り方と矛盾しない。



第39図　褒の変化　※トーンは形態変化の境界を示す。

〈その他の器種〉

浅鉢は注連引原遺跡には希で、浮線文モチーフが見られる上記の例の他実態はよくわからないが、注連引原II遺跡では太い沈線文による精製品が主体となり、台付鉢等の様相から、大洞系の影響が強く、大洞A′式直後辺りに比定できよう。沖II遺跡で大洞系浅鉢が多量に存在する現象と相似たものがある。他には口縁に1～数条の沈線を持つ類型が若干あり、浮線文系土器群の中に見られる



第40図　注連引原遺跡検出の浮線文モチーフを残す例

ものに類似する。

壺は、注連引原遺跡・同II遺跡とも条痕文系が多い。東海編年と直接的に対比できるものは無いが、両遺跡間で要素の偏在が認められる。注連引原遺跡のものは、口縁端部を外に大きく張りださせ、大振りの押圧を施し、胴部文様は見られない。大振りの押圧は樫王式との類縁関係も指摘されるところであるが、在地系条痕文系土器の在り方の問題もあり、一概には断定できない。

注連引原II遺跡の壺は、注連引原遺跡のものに似た手法を取る例の他、口唇から離して突帯を付す物が認められる。胴部文様には波状文、横位・縦位の平行線文を有する物が存在する水神平式的手法をとるものが多いが、1のように頸部に縦線の入る丸子式的な構成の物もあり、ある程度の時間幅も想定される。全体に胴部文様位置などかなり在地化されている。大洞系と思われるものもあるが、少量である。なお注連引原II遺跡には遠賀川系に類する手法のものがある。

深鉢は、刷毛による条痕的手法の物が多い。しかし、注連引原遺跡には口縁に篦描平行沈線文をもつものもあり、甕と同様浮線文系の系譜を引き、沈線化したものと考えられる例も存在する。

甕における型式変化等を柱に、以上述べてきた他器種の注連引原遺跡・同II遺跡における要素の偏在性を系譜上から整理すると次のようになる。I段階を注連引原遺跡期、II段階を注連引原II遺跡期として記述する。

I段階

（浮線文系）甕：大別すれば有文系と無文系があるが、いずれも浮線文系の器形や文様帯区分・整形手法を引き継ぐ。口縁の長い形態Aが主流で、有文系では口縁端部に浮線文土器群にみられた平行線モチーフや幾何学文モチーフの沈線化した文様を有する。また胴部に横位の沈線綾杉文を施す物が遺存する。無文系では、胴部に縦位の細密条痕がみられる。

深鉢：大半は系統性を論じるのは難しいが、浮線文系に求めるのが妥当と思われる。口縁に平行沈線文を施す類型は、浮線による平行線の退化と見られる。一例認められる沈線化による逆三角形を連繋したモチーフは、東京田原遺跡等に見られる浮線文退化のモチーフに類似する。

浅鉢：判然としないが、1点浮線文モチーフのはっきり残る例がある。これがI段階にともなうものか疑わしいが、この段階の浅鉢が浮線文系の系統下にある可能性は充分と考える。

（条痕文系）壺：この器種の大半は条痕文系である。製作手法は在地化の傾向にあるが、大振りの押圧を施す。胴部文様は認められない。

また、甕・深鉢の条痕整形は、浮線文系を介しての間接的な条痕文系の影響と思われる。

（大洞系）I段階においては、甕口縁文様類に影響が見られる他、不明瞭である。ただ文様全般の沈線化が、大洞系の影響であるとも解釈できる。

II段階

（浮線文系）甕：形態Aが衰え、氷I式では客体であった口縁の短い形態Bが主体となる。I段

階で主体であった類型は、さらに口縁文様等を退化させ、「無文甕」として客体的に残る。一方胴部に大洞系の文様素を取り入れた「有文甕」が、地域的特色として生成されるが、文様帯構成・器形に浮線文系の影響を残す。浅鉢：口縁に１～数条の沈線を施す類型が、客体的に見られる。

（条痕文系）壺：ほぼこの系統で占められる。胴部に波状文、横位あるいは縦位の平行線文、羽状文が認められるが、手法的に大きく在地化している。甕・深鉢にも条痕文のみで整形される例があり、この系統の組成内における影響力の増加が看取される。

（大洞系）浅鉢・台付鉢の大半・鉢の一部に、この系統そのものといった類型が参画する。また磨消縄文モチーフが存在する。甕・胴部文様に変形工字文およびこれの変化した幾何学文の連繋文を施す類型が主流となり、条痕文系とともに組成に参画する割合の増加が認められる。

（畿内系）畿内第Ⅰ様式新段階の壺に類した物が希に参画する。

このように、注連引原遺跡群の土器群は注連引原遺跡→注連引原Ⅱ遺跡と時間性を有し、しかも縄文晩期終末から初期弥生土器への変化を跡付ける資料として位置付けられる。

注連引原遺跡（Ⅰ段階）は、繰り返し述べたように、甕の検討と文様モチーフの在り方から、浮線文終末～直後段階といえる。浮線文モチーフの沈線化類型とともに条痕文系土器を組成の柱とする形態は、氷Ⅰ式の組成を引き継いでいるといえよう。類縁要素を指摘するなら、浮線文の退化モチーフとして東京都田原遺跡に類似の様相があり、甕口縁文様Ⅱ・Ⅳ類は茨城県殿内遺跡に類例がある。組合せとしての様相から、既存の編年関係に照らせば、水神平式―緒立Ａ群―青木畑式の並行として理解されている初期弥生土器の一群に先行し、樫王式―氷Ⅰ式―大洞Ａ′式に後続する狭間の位置が与えられることになる。

注連引原Ⅱ遺跡（Ⅱ段階）は、沖Ⅱ遺跡などにみられる既知の初期弥生土器の組成構造と変わらない。やや時間幅を考えなくてはならないが、在地的な条痕文系土器の多数化や「有文甕」の定型化、大洞系文様素の大幅な導入は、Ⅰ段階とは様相を異にし、新たな様式の生成を示している。但し有文甕の器形や文様帯構造、あるいは無文甕に浮線文系の要素が引き継がれていることは既述の通りである。

縄文時代終末に関東・中部・南東北・北陸の一部にわたる広範な地域に展開した浮線文土器群以後、この消失地域下に成立する諸様式が様相差をもつとはいえ大洞系の文様モチーフを受け入れていく現象は、興味深いものがある。これら幾何学沈線文を施す有文甕の在り方や、条痕文系土器群の参画の在り方をめぐって、系譜関係と組成構造の近似した土器小様式が派生する現象は、今後詳しく検討していく必要があろう。

註１　氷Ⅰ式の成立には五貫森式が関与し、また樫王式との交流が認められるなど、東海地方との関連が強い（設楽1982）。

2、弥生時代の石器群について

(1) 石器組成

本遺跡の石器群は縄文時代前期～中期のものと弥生時代前期～中期のものに分布域からある程度区分することができた。また、前者と後者では分布上の差異のほか、器種、形態、製作技術でも違いが認められた。そこで、弥生時代の石器群の特徴について整理しておくことにする。

まず、石器組成であるが、弥生時代の石器は調査区東裾部にまとまっていることが、遺構、土器群の在り方等から明らかとなった。したがって、この部分の石器組成（第23図③）が弥生時代前期末～中期初頭の石器組成を最も反映していると思われる。これをみると、A類では石鏃、スクレイパーA類が大部分を占め、その割合も等しい。また、弥生時代特有の有肩石斧も存在する。B類では石鍬、打製石斧、スクレイパーB類がほぼ同じ割合を占めている。また、C類では凹石、磨石、砥石がほぼ同じ割合である。D類では独鈷石が1点存在する。この石器も弥生時代（前期～中期）に至ってもしばしばみられるものである。E類では磨製石斧が2点存在する。

このうち、石鍬の量的安定は長野県、特に南信地区の弥生時代前期～中期の遺跡、例えば林里（神村1967、1983）、寺所（神村1967、佐藤1982、1983）、阿島（佐藤・宮沢1967、佐藤1983）等の遺跡でみられ、長野県での一般的傾向と把えられる。本遺跡においても同様である。しかし、こうした石鍬と言えるような打製石斧は、すでに御社宮司寺遺跡（百瀬他1982）等、氷Ⅰ式の段階で存在しており、こうした石鍬はその系譜であるとみられる。

また、これら長野県の当期の遺跡には普遍的に存在する横刃形石器と呼ばれるスクレイパーは本遺跡においては基本的には存在せず、代りに特定の製作工程を有する小形のスクレイパーB類が多数存在しており、差違が認められる。

そして、砥石は当期の遺跡には多数存在する器種であり、本遺跡においても同様である。しかし、砥石は縄文時代晩期の遺跡でも多数存在しており、特に大きな変容は認められない。

石鏃については、縄文時代晩期の千綱谷戸遺跡（増田、伊藤他1977等）、長野県佐野遺跡（永峯他1967）、御社宮司遺跡、石行遺跡（神澤他1987）などでは大量に検出されているが、本遺跡ではこうした傾向はなく、むしろ石鏃は少量である。

一方、西に隣接する注連引原遺跡の石器組成は第23図のとおりであるが、これは大部分縄文時代前期のものであり、弥生時代の石器としては、石鏃、石鍬、スクレイパーB類が少量存在する程度であり、他の器種も少量であったと考えられる。このように石器が少ない傾向は氷遺跡（永峯1969）、トチガ原遺跡（原田1981）など縄文時代晩期終末の遺跡でみられ、組成の上からも石鏃と打製石斧（石鍬）が多く、非常に類似している。

以上のことから、縄文時代晩期から弥生時代中期に至る「過渡期」の石器組成は多様であり、遺跡数も少ないことから、一概に一般的傾向であるとは言えないが、少なくとも本遺跡における石器組成は、この地域における初期弥生文化の様相を反映したものと考えることができる。

(2) 各器種の特徴

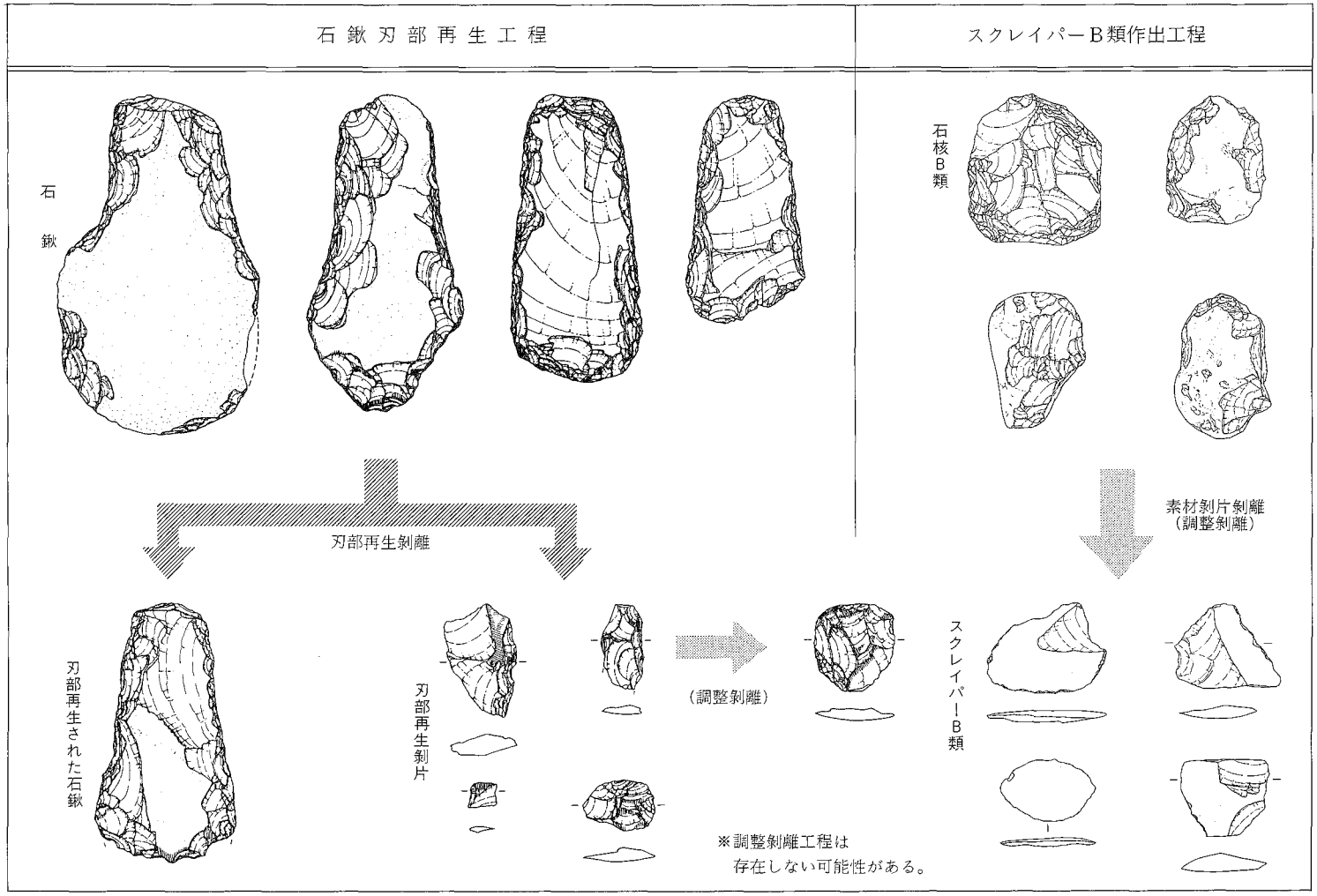
本遺跡出土の石器のうち、特徴的な器種についてまとめてみることにする。まず、石鏃であるが、平基無茎鏃が最も多く、次いで凹基有茎鏃が多い。そして、凸基有茎鏃、凹基無茎鏃は少ない。このうち凹基有茎鏃は長野県の晩期から当期の遺跡には安定して存在している。そして、凹基有茎鏃の中には茎部がわずかに突出するのみで、平基無茎鏃とほとんど差のないものもあり、平基無茎鏃は凹基有茎鏃からの変容である可能性がある。また、凹基有茎鏃の中には五角形鏃の系統とみられる突起を有するものが存在する。こうしたことから、石鏃は長野方面からの影響が強いと考えられる。一方、凸基有茎鏃は北関東、東北地方の晩期の遺跡に普遍的に存在する形態であるが、本遺跡では１点しか検出されておらず、この方面からの影響は少なかったとみられる。

有肩石斧は長野県の弥生時代にみられる石器である。しかし、長野県の例は中期後半から後期にかけてのものが多く、本遺跡のものよりも大形である。本遺跡の例は東北系と推定される硬質頁岩製であり、機能的にも切截するのに適しており、長野県の例と一概に同じものと考えるわけにはいかない。秋田県平賀遺跡では大洞 C_1～A式期の段階で「箆状石器」と呼ばれる機能的に類似した石器が多数検出されており、こうした東北系統の石器の可能性もある。

次いで石鍬であるが、Ⅰ～Ⅳ形態に分化しており、器種として安定して存在する。このうち、Ⅰ形態は山頂部分に限定され、明確な使用痕も認められないことから、他の形態と一線を画している。そして、同様の形態のものは中期中葉の埼玉県池守・池上遺跡（中島他1984)、後期の長野県山岸遺跡（神村他1971等）などに存在するが、前期～中期初頭の遺跡では類例を見い出すことができない。或いは時期が異なるものである可能性がある。(註１)

また、Ⅱ形態は寺所遺跡などに類例を見い出すことができる。非常に特徴的な形態であるが、刃部再生により形態が変化してしまうこともあり、確認できるものは少ない。一方、Ⅲ形態は本遺跡において、最も多いものであり、長野県の当期の遺跡から多数検出されており、最も一般的な形態である。しかし、北関東、東北地方の当期の遺跡では刃部がやや丸味をもつ。ちょうどⅠ形態とⅡ形態の中間形態のものが一般的であり、本遺跡の石鍬と形態的に差違が認められる。このようなことから、本遺跡の石鍬は関東より長野方面との関係が深いと考えられる。

本遺跡の石鍬は形態がはっきり分化しており、各形態ごとに規格化しており、範型の存在を暗示させる。また、これと呼応するように、遺跡内で石鍬が製作された形跡がなく、執拗に刃部再生を繰り返している。こうした現象は縄文時代における磨製石斧の在り方を彷彿させるものであ



第41図　遺跡内におけるB類石器剝離作業工程

り、この集落（テリトリーも含む）においては石鏃の製作は行われず、他の集団から移入している可能性が高い(第41図)。これは次に述べるスクレイパーB類の在り方とも一致する。

スクレイパーB類をみると、石鏃と同質の石材を用いているにもかかわらず、石鏃を製作した際に生じる剝片を用いているものはほとんど存在しない。たとえ、付近の河床において石鏃を製作したとしても、その際に生じた剝片を石鏃製作時に回収して集落内へ持ち込むことが可能であり、縄文時代の打製石斧製作においては、そうしたことが行われていたとみられる。(註2) ゆえに、縄文時代のスクレイパーB類の形状は、打製石斧の形態に左右されることが多い。

しかし、本遺跡において検出されたスクレイパーB類は表面に原礫面を大きく残した幅広の小形剝片を素材としたものであり、これを作出するための石核が多数検出されている。これらの石核B類の特徴については本文中でも述べているが、拳大の球状を呈するもので、原石の大きさもソフトボール大程度であり、石鏃を製作するためのものではない。また、円盤状を呈する石核も量的には少ないが存在し、これから作出されたスクレイパーB類も存在する。(註3) しかし、これも石鏃製作とは関係ないものであり、球状・円盤状を呈する石核を用いたスクレイパーB類製作工程と石鏃製作工程は完全に分離したものであるとみなすことができる(41図)。

以上のことから、石鏃の遺跡外からの移入により、独立したスクレイパーB類製作システムが成立したと考えられる。また、長野県における横刃形石器は、その形状から石鏃製作の際に生じた横長剝片を素材としているとみられるものが多く存在しており、長野県における石鏃と横刃形石器の在り方と、本遺跡の石鏃とスクレイパーB類の在り方は大きく異っていたと考えられる。このようなスクレイパーB類は池守・池上遺跡にも存在しており、少なくとも群馬県周辺地域では一般的であったと推定される。

磨石、凹石についてみると、磨石には特に特徴はないが、凹石は痕跡程度に凹を有するB種が多く存在する。また、石皿は存在せず、敲打痕の少ない台石が多く存在する。こうしたC類石器の組合せは縄文時代とは大きく異なっており、植物食の在り方が変化したことによると推定される。

独鈷石は縄文時代晩期後半の土器の出土する千綱谷戸（増田他1977等)、福島県窪田（古川他1987)、秋田県平賀（小玉1983）や弥生時代前期の沖II（荒巻1984）など、関東から東北にかけて、この時期に広凡に存在するが、長野県には少ない。ゆえに、本遺跡の独鈷石もこうした系統のものと考えられる。

(3) 小　結

以上、縄文時代晩期から弥生時代中期に至る石器群と本遺跡の石器群を対比しながら、当期における文化様相を石器群から検討してみた。その結果、本遺跡における石器群は長野県方面から

の影響を強く受けたものであることが石鏃(凹基有茎鏃)、石鍬から明らかとなった。しかし、在地の伝統、東北地方からの影響もみられる(凸基有茎鏃、独鈷石、円盤状石核)。また、これらを融合した発展させたもの（平基無茎鏃、スクレイパーB類、球状石核）も存在する。

こうした石器群の在り方は、新しい弥生文化を受容しつつ、独自の文化を形成しつつあるこの地域の弥生文化黎明期の様相を示していると考えることができる。また、本遺跡より１段階先行する注連引原遺跡における石器群の在り方は、本遺跡の様相と大きな違いをみせており、弥生文化受容の過程を知る上で、興味深いものがある。

また、本遺跡における石鍬とスクレイパーB類の在り方は、長野県における当期の石鍬と横刃形石器の関係に対応すると考えられるが、長野県において、当初からこれらの石器を用いて耕作が行われていたかどうかについては不明の点も多く、こうした石器の存在から農耕が行われていたと即断することはできない。石鍬が「土を掘る」機能を有していたことは疑いないが、用途について明言することはできない。しかし、本遺跡の石鍬の場合、遺跡外から移入されており、細かい機能差により形態が分化し、規格化していることから、縄文時代における打製石斧より、効率の高い進歩した道具であると考えることができる。また、本遺跡では濠を除けば大規模な遺構は存在しない。そして、C類石器の変容から植物食採取の低下が推定され、遺跡内外での「土を掘る」作業はあまり多くないと考えられる。にもかかわらず、「土を掘る」高機能の道具を多数有していることから、本遺跡で農耕が行われていた可能性を指摘することができる。

しかし、生産遺構は検出されておらず、生産地（耕地）の所在も明らかではない。こうした問題を含め、総合的に検討する必要があり、今後の課題であると言えよう。

註１　Ｉ形態の出土した山頂部では、中期中葉の須和田式の土器が検出されており、この段階のものである可能性がある。

註２　自由学園南遺跡（伊藤他1983）において、縄文時代中期の打製石斧製作址が、旧河床部分で検出されている。しかし、スクレイパーB類は打製石斧の形状と密接に関係しており、打製石斧製作時の余剰剝片が利用されていた事を示している。

註３　縄文時代後期には、円盤状を呈する石核があり、円盤状石器として指摘したことがある(大工原1982)。しかし、この段階ではこうした石核から作出した剝片ではなく、さらに大形の打製石斧製作時に生じた剝片を素材としてスクレイパーB類が多数存在しており、打製石斧とスクレイパーB類製作工程はいまだ不可分なものであったとみられる。

3、集落構造について

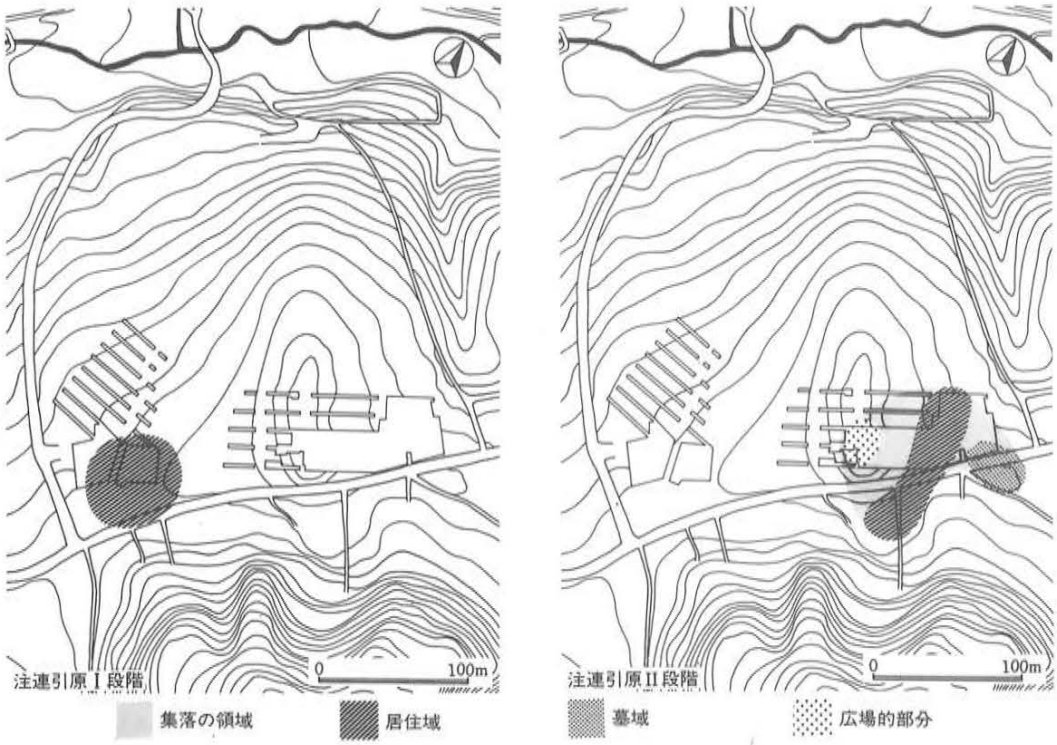
注連引原遺跡・同II遺跡は、これまで土器群と石器群からみてきたところでは、時間差が存在することが判明した。すなわち、注連引原遺跡が同II遺跡に先行する集落である。注連引原遺跡期（Ｉ期）は樫王式―氷Ｉ式―大洞A′式直後、水神平式―緒立A群―青木畑式直前の狭間の時期（弥生時代前期）である。同II遺跡期はやや時間幅をもち、沖II段階から岩櫃山式の時期（弥生時代前期末～中期前葉）である。以下、各段階の集落構造について述べてゆくことにする。(註１)

I期（第42図）　丘陵の西裾部に集落が形成される。検出された住居1軒、ピット群2箇所であり、規模は小さい。土壙も存在しない。土器群からみて、極めて短期間に限定されて営まれた集落であり、石器群からみて、農耕を行っていた積極的根拠は見い出せない。

II期（第42図）　丘陵の山頂部から東裾部にかけて集落が形成される。また、遺構、遺物の延び方からみて、南側も集落領域であった可能性が高い。濠により尾根を切断し、区画を行っている。居住域は濠のすぐ内側であり、その内側には土壙群、さらに内側にはピット群が存在し、東斜面上部は活動の低調な部分がある。そして、山頂部にはピット群が存在し、広場的機能を有していたと推定される。濠の中央には土橋が存在し、門がある。さらに濠の外側に土塁状遺構が存在する。墓域は濠の外側、集落の東側に形成されていたと推定される。

この段階でも集落は小規模であったとみられる。土器群からみて、しばらくの間、集落が継続して営まれていたことがわかる。また、石器群からみて、農耕を行っていた可能性がある。(註2)

このように注連引原遺跡・同II遺跡は、初期弥生文化受容期に丘陵上に形成された小規模な集落であるが、本格的に農耕が行われていたかどうかについては判然としない部分がある。しかし、濠により集落を区画する、いわゆる「環濠集落」は西日本において、前期に出現するが、こうし(註3)



第42図　集落の構造変遷図

た集落形態が、すでに前期終末には関東地方で成立している。しかも、本遺跡の場合、住居等集落を構成する基本的な要素は充実しているとは言えないが、濠及び付帯施設はしっかりしている。土橋を有する例は前期では福岡県光岡長尾（原1988）、同大井三倉（酒井1987）等、中期では浜尻（桜井1981）などがあるが、前・中期の類例は少ない。また、門址の検出された例としては、後期の福岡県西ノ迫（巾間1987）、神奈川県四枚畑（小宮1988）などがあるが、前期の例は見い出せず、さらに本遺跡では土塁状遺構も存在しており、濠の施設は揃っている。こうした集落構造自体が、すでに前期末の段階に本遺跡において成立していることは、弥生文化の伝播の問題を考えてゆく上で、非常に重要な意味をもっていると言えよう。（註4）

註1　山頂部には須和田式の遺物が認められるが、この遺跡において集落が形成された形跡はない。

註2　昭和62年度市内遺跡詳細分布調査の際、注連引原II遺跡の東の部分で、ほぼ同時期の土器群が採集されている。

註3　本遺跡周辺で耕作が行われた可能性のある場所を考えると、畑地の場合、遺跡の東部、南西部の平坦地、水田の場合、南の崖下の谷地、北の猫沢川流域が考えられる。

註4　群馬県内で濠の検出された弥生時代の遺跡としては、ほかに日影平（小池1988）、中村（五十嵐他1986）、清里・庚申塚（相京他1981）、小塚（井上1987）、西原（小島1986）などがあるが、これらは中期後半～後期のものである。

参考文献

相京建史　1981　『清里・庚申塚遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

愛知県考古学談話会編　1985　『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』

1988　『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』

秋池　武・新井順二　1983　「群馬県における神の木・有尾式土器について」『信濃』35－4

新井和之　1982　「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3　雄山閣

荒巻　実　「沖II遺跡」　1984　『遺跡は語る―最近の発掘調査の結果―』群馬県歴史博物館

新井順二・小野和之　1985　「碓氷川流域における弥生式土器の様相」『群馬考古通信』11　群馬県考古学談話会

伊藤恒彦他　1983　『自由学園南遺跡』　自由学園

五十嵐　信他　1986　『中村遺跡』　渋川市教育委員会

石川日出志　1984　「岩尾遺跡出土資料の編年的位置と特色」　『史館』16

1985　「関東地方初期弥生式土器の一系譜」　『論集日本原史』

井上　太　1987　『小塚・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書』　富岡市教育委員会

梅宮　茂他　1971　『福島県鳥内遺跡発掘調査概報』　石川町教育委員会

大塚昌彦　1986　「南大塚遺跡」　『群馬県史資料編』2

大西雅広他　1984　『上並榎遺跡』　群馬県埋蔵文化財調査事業団

神村　透　1967　「豊丘村林里遺跡」　『長野県考古学会誌』4

1967　「飯田市寺所遺跡とその他の遺跡」　『長野県考古学会誌』4

1983　「林里遺跡」　『長野県史考古資料編　主要遺跡（中・南信）』

1985　「石製耕作具」　『弥生文化の研究』5　雄山閣

神澤昌二郎他　1987　『松本市赤木山遺跡群II』　松本市教育委員会

佐原　眞・工楽善通編　1987　『探訪弥生の遺跡西日本編』　有斐閣

菊池　実他　1986　『三後沢遺跡』　群馬県埋蔵文化財事業団

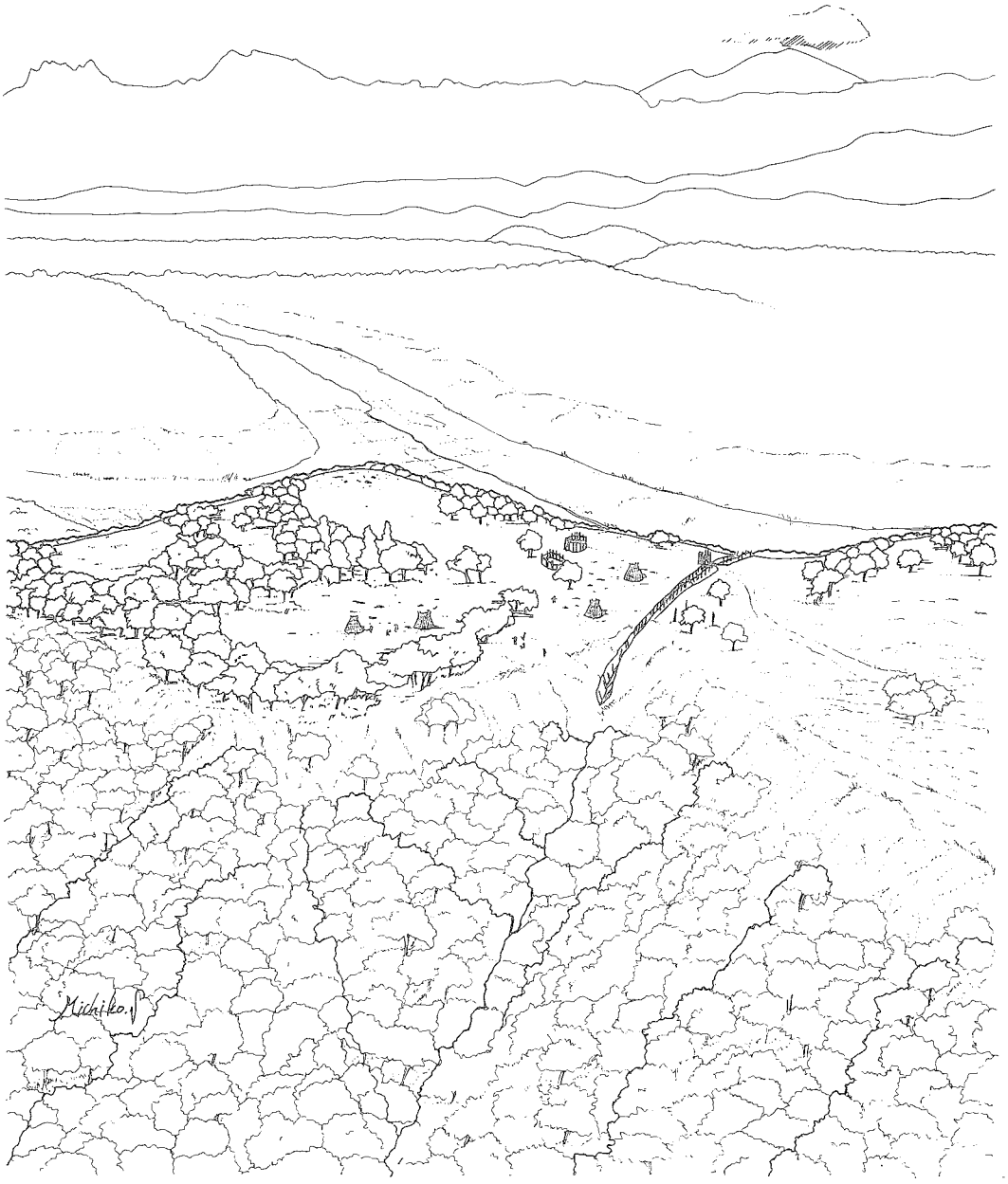
群馬県考古学談話会他　1983　『東日本における黎明期の弥生土器』

紅村　弘　1984　『東海の先史遺跡　綜括編』

小島純一　1986　『深津地区遺跡群』　粕川村教育委員会

小玉　準　1983　『平賀遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会

小林達雄　1975　「タイポロジー」　『日本の旧石器文化』1　雄山閣
小林行雄・佐原　真　1964　『紫雲出』　託間町文化財保護委員会
酒井仁天　1987　『大井三倉遺跡』　宗像市教育委員会
桜井　孝　1981　『浜尻遺跡』　高崎市教育委員会
佐藤甦信　1982　「寺所遺跡と寺所式土器」　『中部高地の考古学』II
　　1983　「寺所遺跡」　『長野県史考古資料編　主要遺跡（中・南信）』
　　1983　「阿島遺跡」　同上
佐藤甦信・宮沢恒之　1967「喬木村阿島遺跡」　『長野県考古学会誌』4
設楽博己　1982　「中部地方における弥生土器の成立過程」　『信濃』34―4
杉原荘介　1967　「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」　『考古学集刊』3―4
杉原荘介・大塚初重・小林三郎　1967　「東京都（新島）田原における縄文・弥生時代の遺跡」　『考古学集刊』3―3
杉原荘介・戸沢充則・小林三郎　1969　「茨城県殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」　『考古学集刊』4―3
鈴木道之助　1974　「縄文時代晩期における石鏃小考―所謂飛行機鏃と晩期石鏃について」　『古代文化』26―7
須藤　隆他　1984　『福島県会津若松市墓料遺跡』　会津若松市教育委員会
大工原　豊・中島　誠　1987　『注連引原遺跡』　安中市教育委員会
富沢敏弘他　1985　『中棚遺跡・長井坂城跡』　昭和村教育委員会
都丸十九一　1987　『地名のはなし』　煥乎堂
中島　宏他　1984　『池守・池上遺跡』　埼玉県教育委員会
長野県教育委員会　1970　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―阿智・飯田・宮田地区―』
　　1971　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―飯島町・高森町・阿智村各その1―』
永峯光一他　1967　『佐野』長野県考古学会
　　1969　「氷遺跡の調査とその研究」　『石器時代』9
中村五郎　1982　『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』
西村正衛　1974　「千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）」　『学術研究』23　早稲田大学教育学部
　　1975　「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」　『学術研究』24　早稲田大学教育学部
　　1976　「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」　『学術研究』25　早稲田大学教育学部
原田　曠　1981　「トチガ原遺跡立合調査」　『借馬遺跡II』　大町市教市委員会
藤の台遺跡調査団　1980　『藤の台遺跡』III　藤の台遺跡調査会
　　1981　『藤の台遺跡』IV　藤の台遺跡調査会
藤村東男他　1980　『九年橋遺跡第6次調査報告書』　北上市教育委員会
古川利意他　1987　『窪田遺跡』　只見町教育委員会
古郡正志・前原　豊・大工原　豊他　1982　『小野地区遺跡群発掘調査報告書』　藤岡市教育委員会
増田逸朗他　1980　『甘粕山』　埼玉県教育委員会
増田　修・伊藤晋祐・高橋　哲　1977　『千網谷戸遺跡発掘調査概報』　桐生市教育委員会
　　1978　『千網谷戸遺跡発掘調査報告』　桐生市教育委員会
　　1980　『千網谷戸遺跡発掘調査報告』　桐生市教育委員会
百瀬長秀他　1982　「御社宮司遺跡」　『昭和52・53年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市（その5）―』　長野県教育委員会



第43図　注連引原Ⅱ遺跡集落推定復元図(南東方向より)

付　編　　注連引原遺跡・注連引原II遺跡出土の黒曜石の意地推定

分析者：鈴木正雄・戸村健児（立教大学）・金山喜昭（野田市郷土博物館）・福岡　久（日本大学）
分析法：熱中性子放射化分析法

注連引原遺跡

時代・時期：縄文時代前期関山期
試　　料：１点
採　集　法：外観上共通する原石９点中フレイク状原石を１点抽出する。
結　　果：信州系星ケ塔

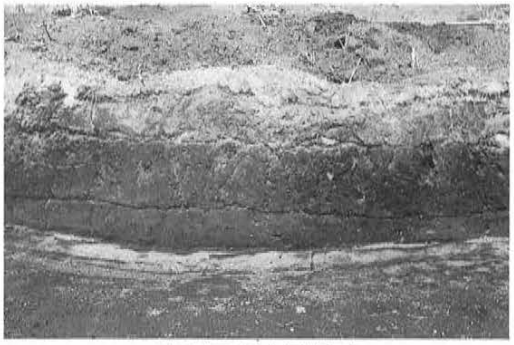
注連引原II遺跡

時代・時期：弥生時代前期末
試　　料：10点
採　集　法：Ｙ－１号住居址炉内および炉付近から出土した剝片
結　　果：全点共、信州系星ケ塔

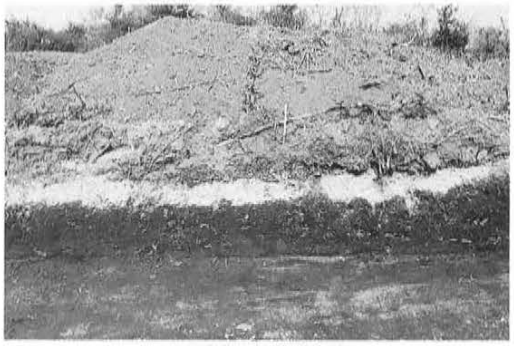
写 真 図 版

注連引原II遺跡全景（東より）

山頂部土層断面



東斜面部土層断面

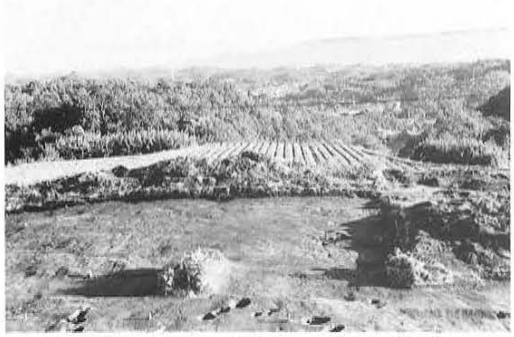


東裾部土層断面

図版－２

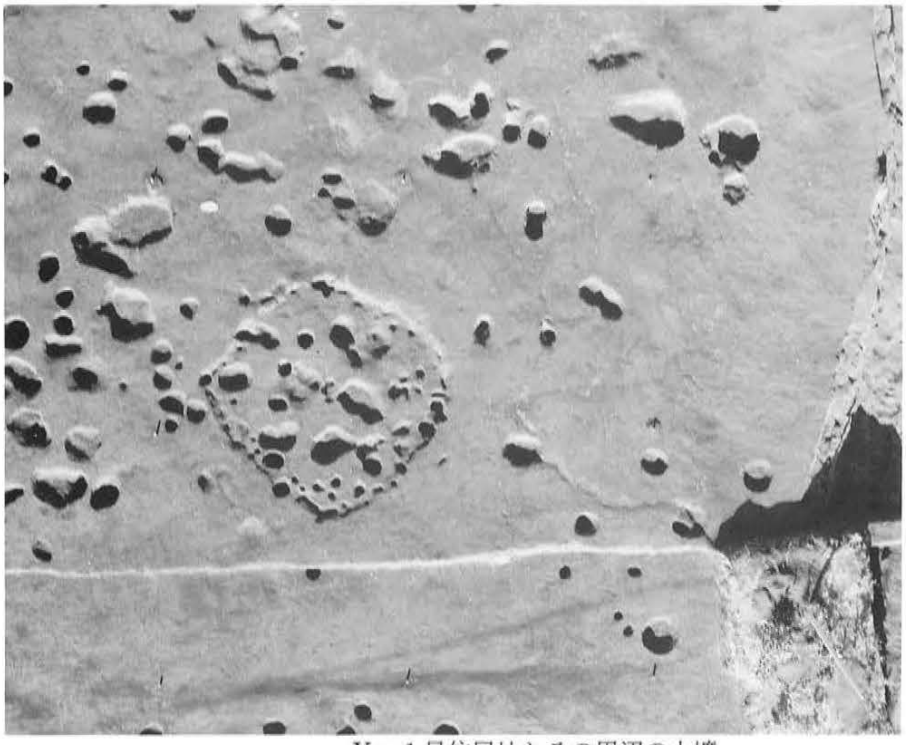
遺跡遠景（調査前：南東より）

遺跡遠景（調査後：南西より）



山頂部より南方を望む（黒岩方面）

山頂部より北西を望む（中野谷方面）

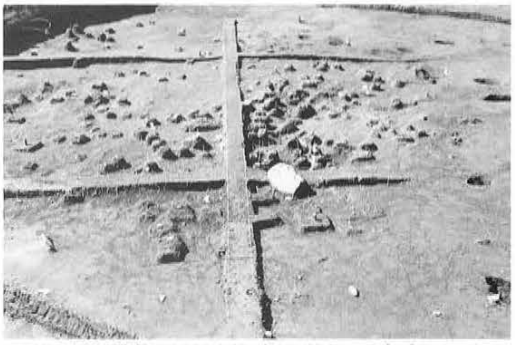


◀土壙Ａ群

Ｙ－１号住居址とその周辺の土壙

Y－1号住居址（南より）

Y－1号住居址とその周辺の土壙



Y－1号住居址遺物出土状況（南東より）

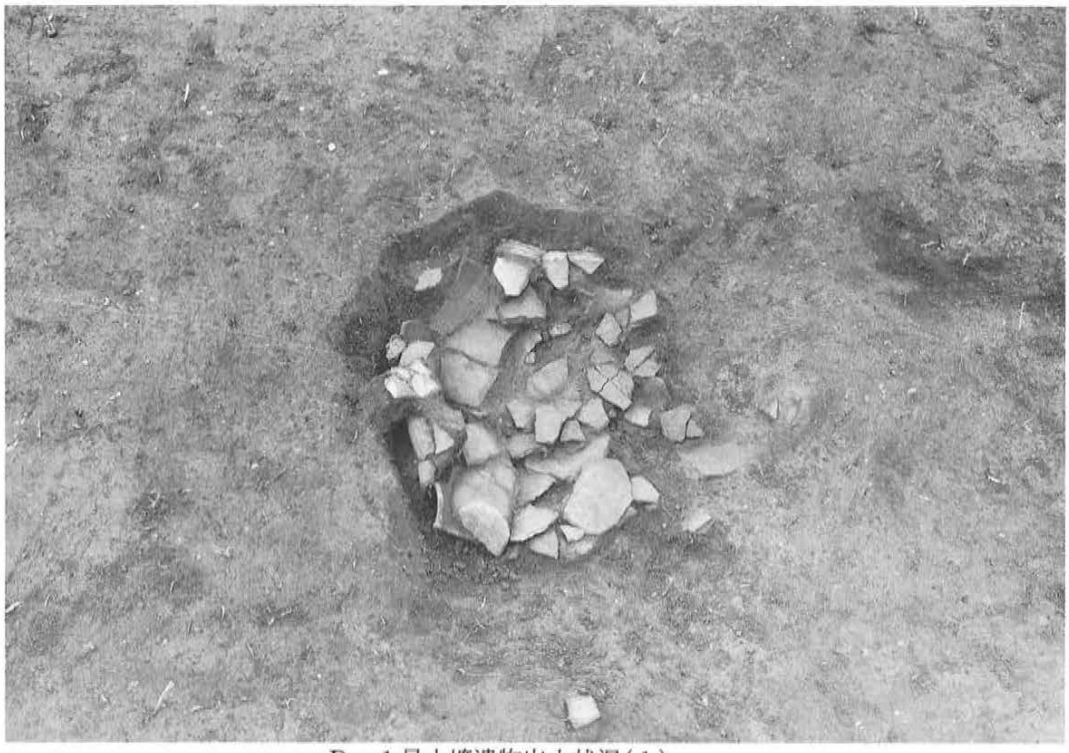
Y－1号住居址壺出土状況

Y－1号住居址精査風景

図版－4

石鏃出土状況（Ⅰ－39G）

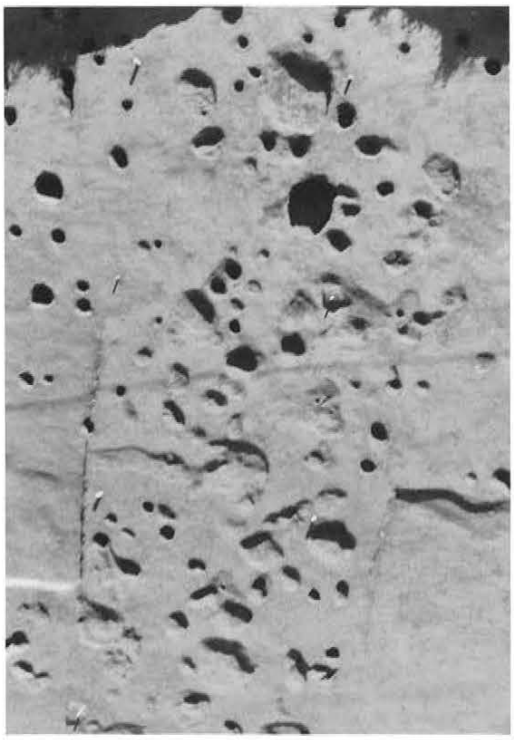
1号遺物集中部（北東より）



D－1号土壙遺物出土状況（1）

D－1号土壙遺物出土状況（2）

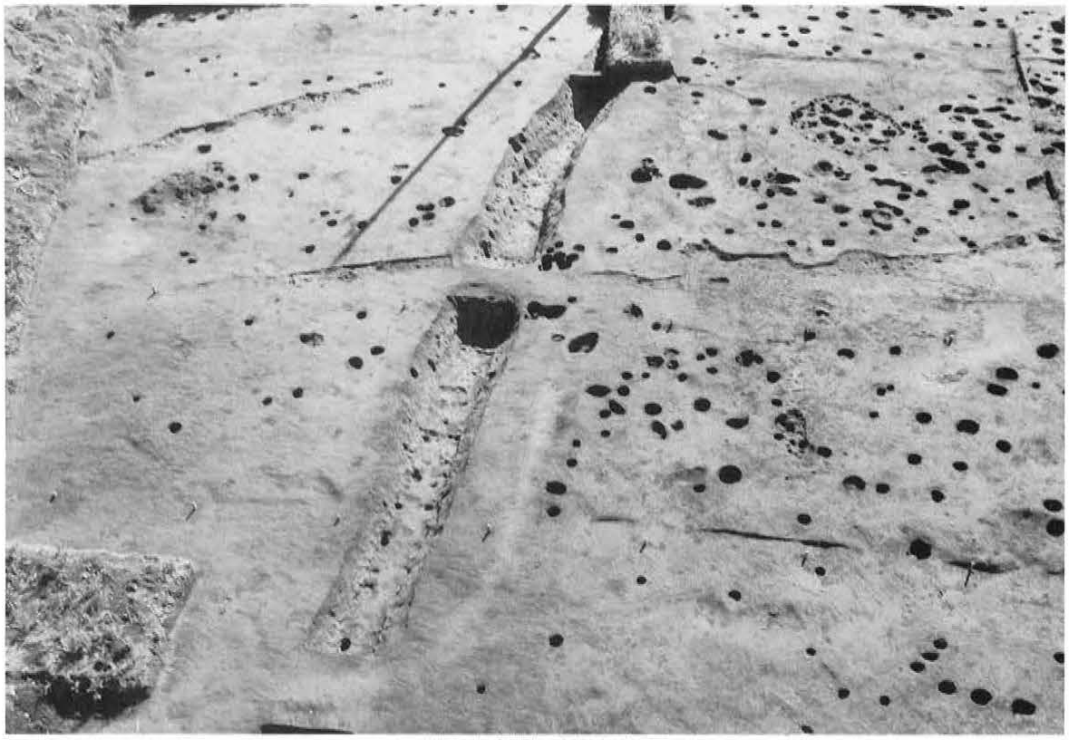
D－1号土壙（東より）



土壙B群

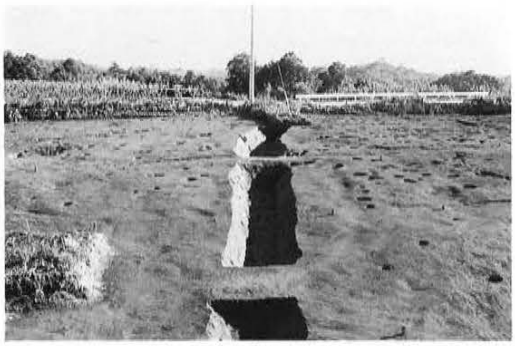
土壙B群・C群

D－12号土壙遺物出土状況



M－1号濠（北より）

図版－6

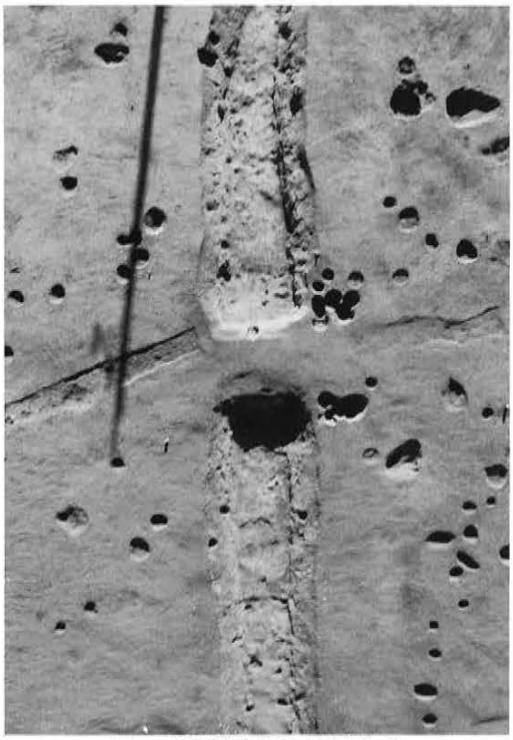


M－1号濠（北より）

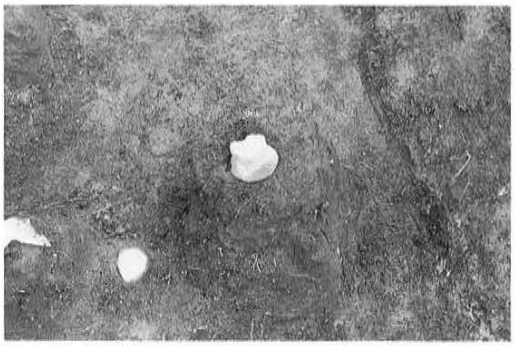
M－1号濠（西より）

M－1号濠遺物出土状況（1）

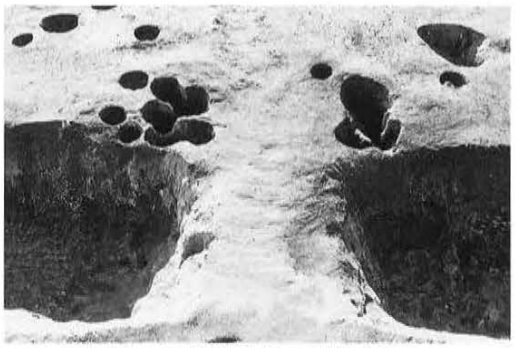
M－1号濠遺物出土状況（2）



M－1号濠土橋・門址（1）



M－1号濠台付鉢出土状況



M－1号濠土橋・門址（2）

M－1号濠土橋（南より）

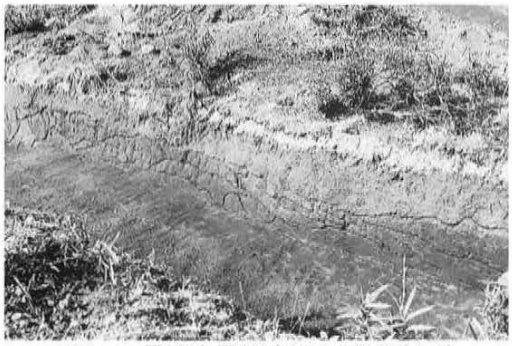
M－1号濠土橋付近遺物出土状況

M－1号濠土層断面（1）

M－1号濠土層断面（2）

M－1号濠土層断面（3）

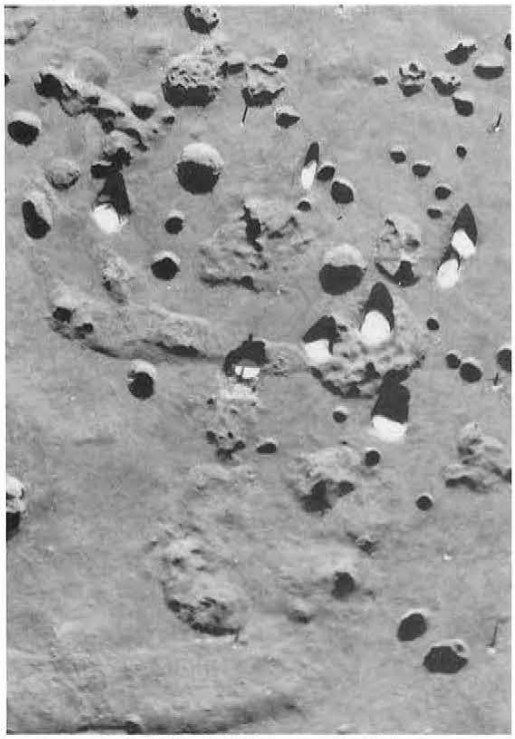
M－1号濠土塁状遺構土層断面（1）



M－1号濠土塁状遺構土層断面（2）

M－1号濠土塁状遺構土層断面（3）

図版－８

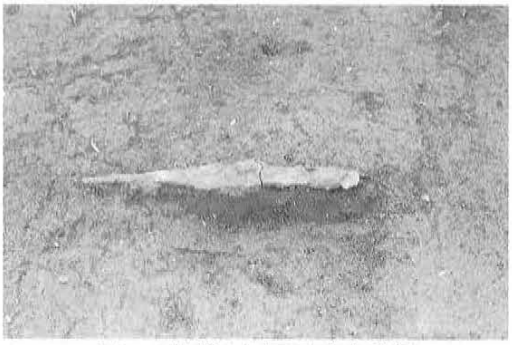


山頂部配石遺構・ピット群（１）

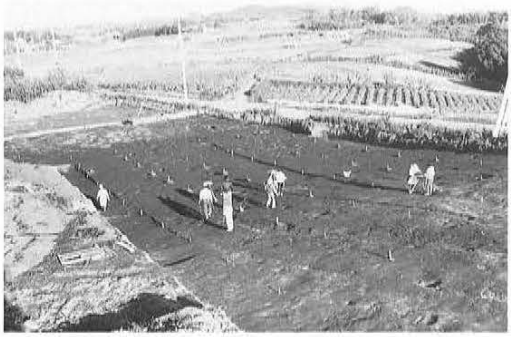
山頂部配石遺構・ピット群（２）

東斜面部遺物出土状況（東より）

東斜面部横瓶集中部



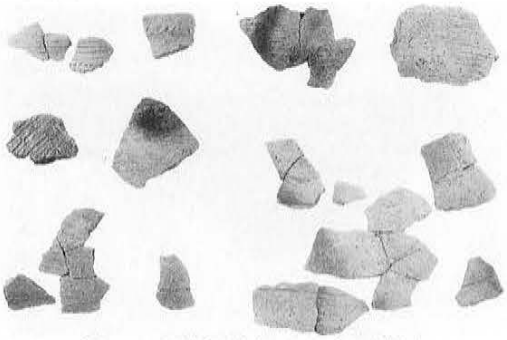
Ｍ－１号濠１層刀子出土状況



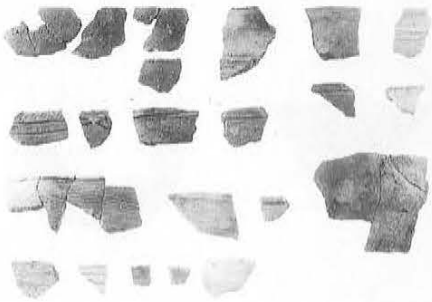
測量風景（山頂部より東方を望む）

現地説明会風景

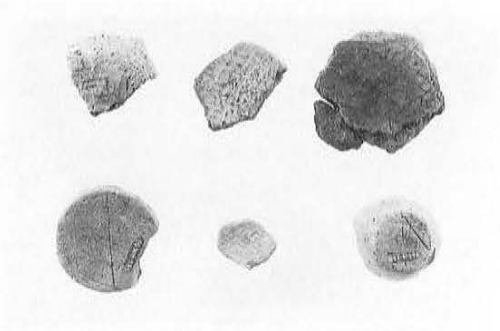
Y－1号住居址出土の土器



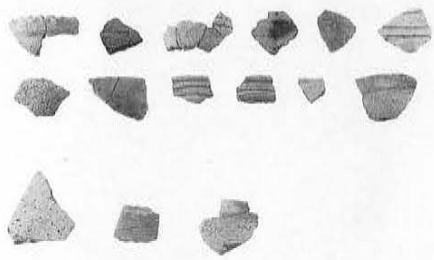
Ｙ－１号住居址出土の土器（２）



Ｙ－１号住居址出土の土器（３）

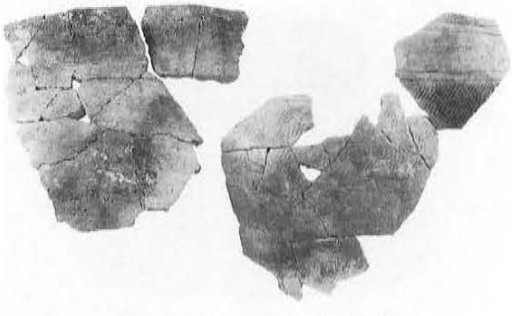


Ｙ－１号住居址出土の土器（４）

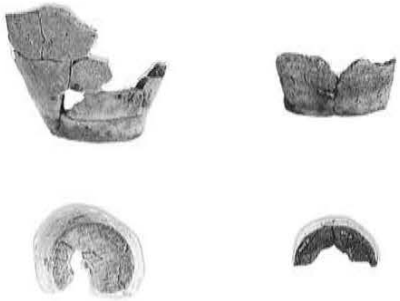


１号遺物集中部（上段）２号遺物集中部（下段）出土の土器

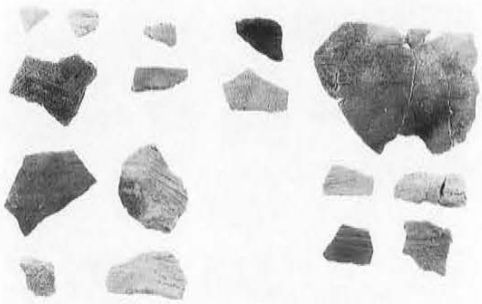
Ｄ－１号土壙出土の壺



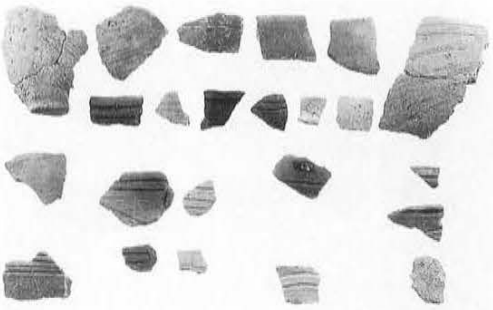
D－1号土壙出土の甕(1)



D－1号土壙出土の甕(2)

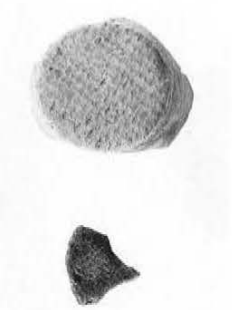


土壙出土の土器(1)



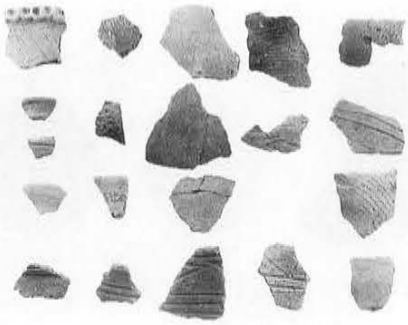
土壙出土の土器(2)

土壙群周辺出土の壺

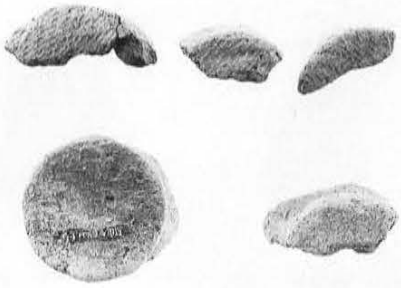


土壙出土の土器(3)

土壙群出土の土器(1)

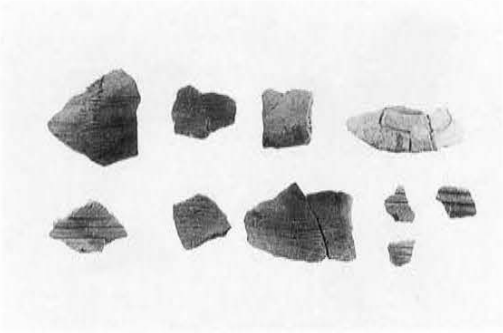


土壙群出土の土器(2)



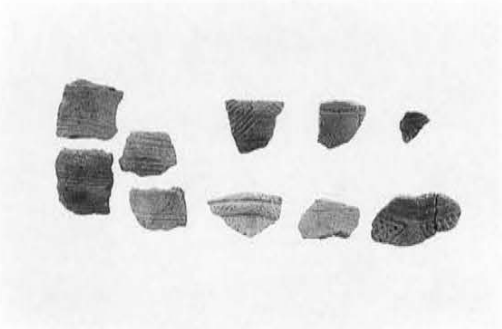
土壙群出土の土器(3)

図版－12

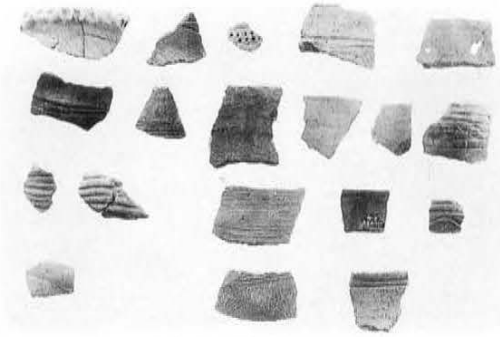


M－１号濠出土の土器

M－１号濠出土の台付鉢

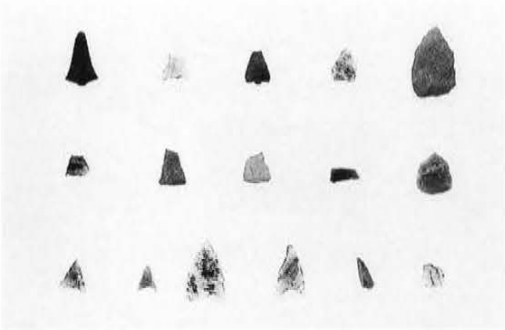


山頂部出土の土器



グリッド等出土の土器

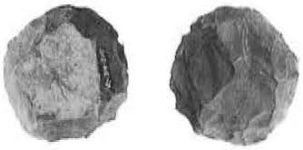
槍先形尖頭器



石鏃

石槍

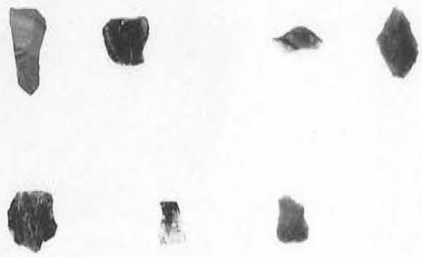
有肩石器



円盤状石器

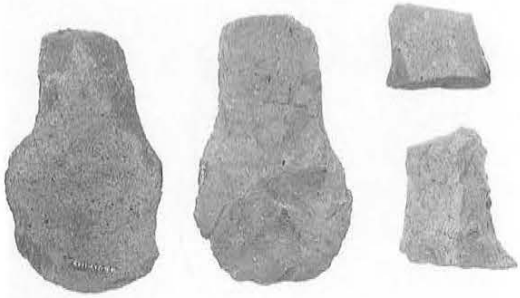
スクレイパーA類(1)

スクレイパーA類(2)

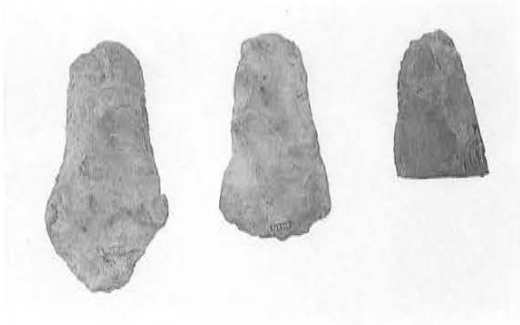


リタッチド・フレイクA類

石核A類



石鏃（I形態）

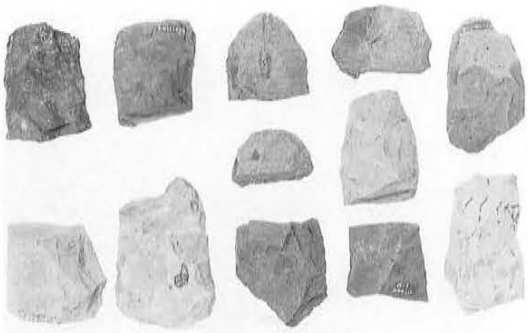


石鏃（II形態）

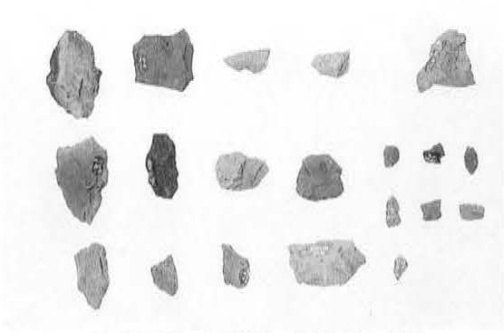
石鏃（III形態）

石鏃（IV形態）

図版－14



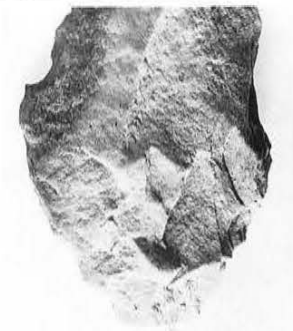
石鍬（形態不明）



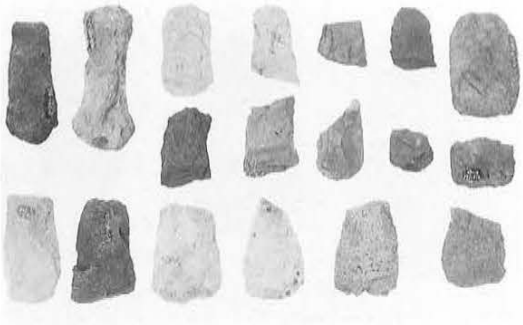
打製石斧（石鍬）刃部再生剝片

石鍬（II形態）刃部使用痕

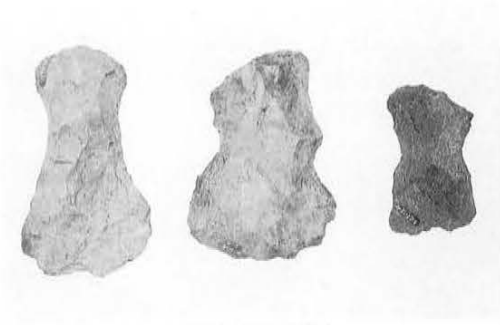
石鍬（III形態）刃部使用痕



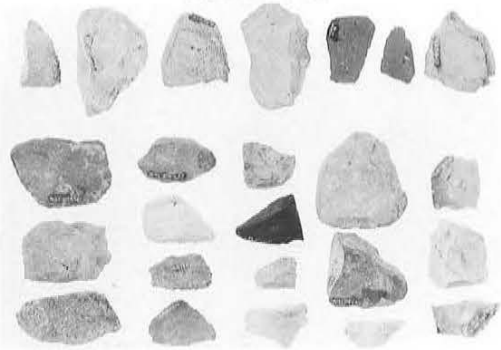
打製石斧（石鍬）刃部再生剝片磨耗痕



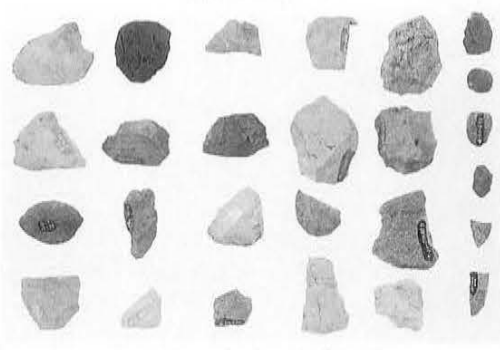
打製石斧（1）



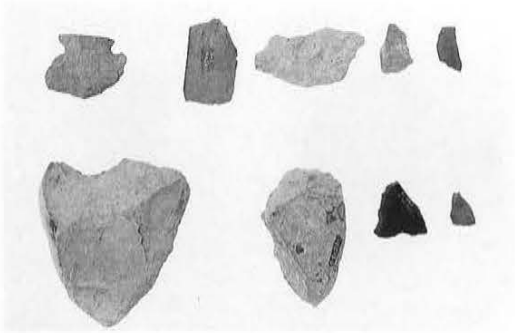
打製石斧（2）



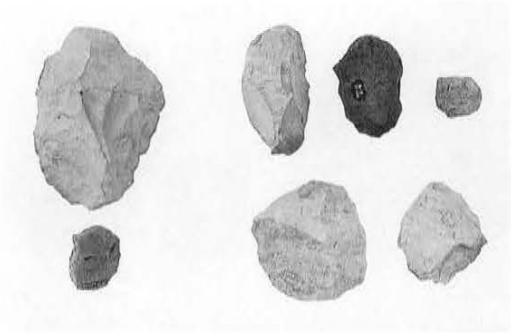
スクレイパーB類（1）



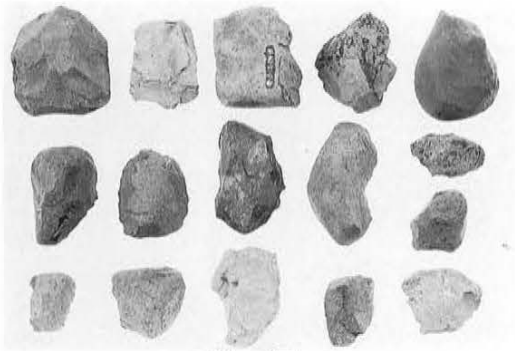
スクレイパーB類（2）



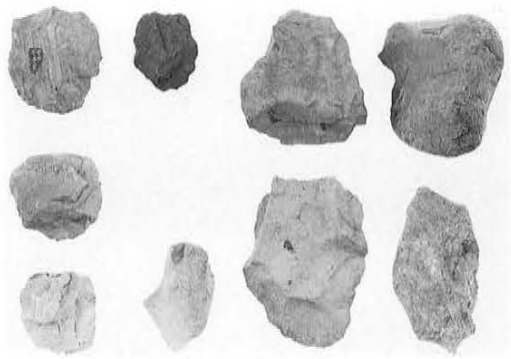
石匙・スクレイパーB類・リタッチドフレイクB類



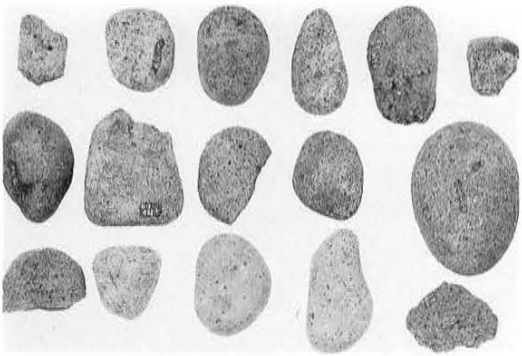
石核B類(1)



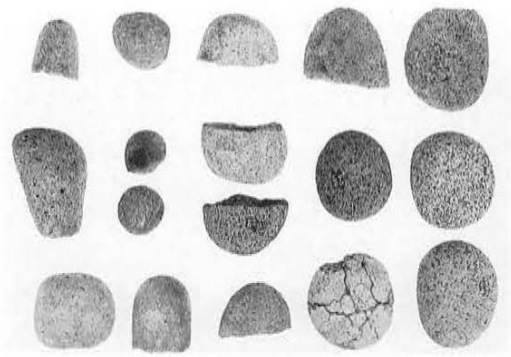
石核B類(2)



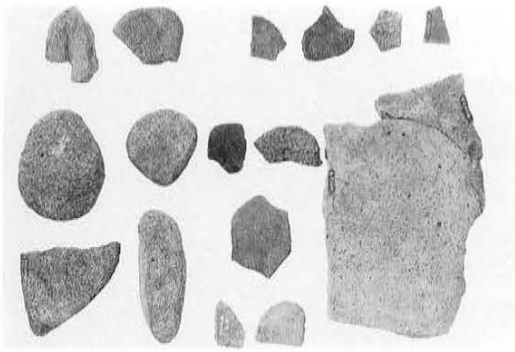
石核B類(3)



凹　石



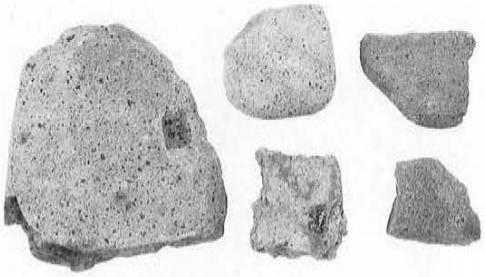
磨　石



砥　石

敲　石

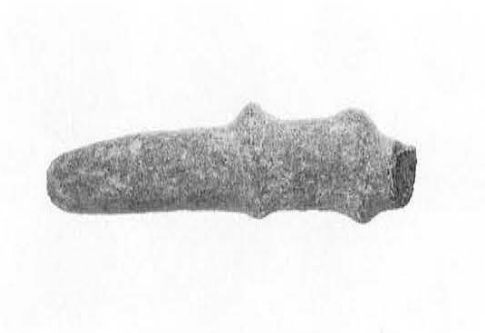
図版－16



台　石

石　皿

垂　飾



独鈷石

磨製石斧

椀（墨書）

椀（墨書）

横　瓶

刀　子

注連引原(II)遺跡

—すみれケ丘公園造成事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書—

発行日　昭和63年3月31日
第2刷　平成元年8月31日
編　集　安中市教育委員会社会教育課
発　行　安中市建設部都市施設課
印　刷　朝日印刷工業株式会社